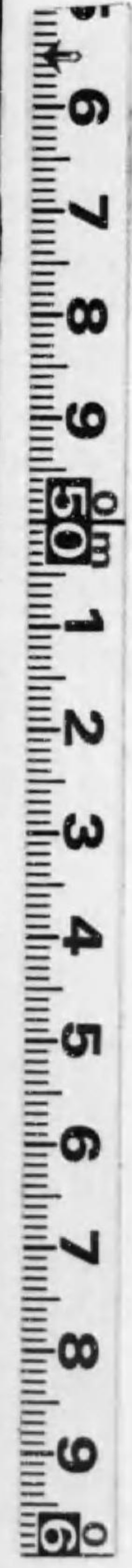


518
75



始



518-75

神



大

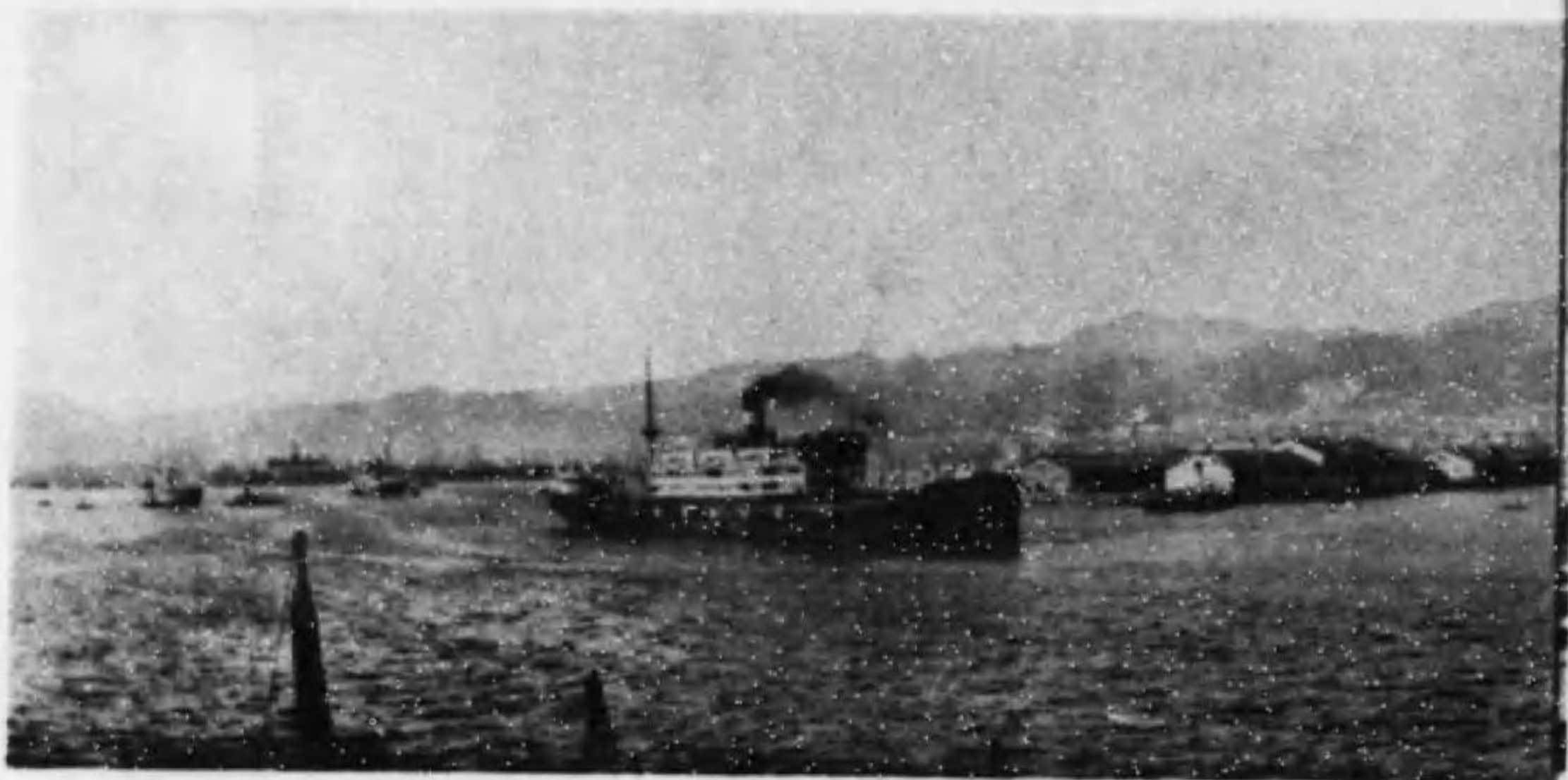
觀

神戸市役所



緒言

本書は從來本市に於て刊行し來れる「港勢一斑」を改題し、昨年末までに於ける本港の大觀を叙述したるものなり。本書は來る十月初旬本市に開催せらるべき港灣協會第一回總會の出席者諸氏に頒布せんがため、短時日忽卒の間に編纂したれば、缺漏固より尠からざるは頗る遺憾さす。幸にして神戸市史別錄竝に神戸税關新設備報告の参照すべきあり、永田助役、森垣港灣部長指導の下に、阪主事及び井尾都築、富原各書記の努力に由りて首尾全きを得たるは、私かに望外とする所なり。



因に云く、本書稿成りて版刻に附したる際、突如關東大震災の報あり
東京、横濱等の大破を傳ふ。従て港灣協會總會は無期延期たるべく、本
書編纂の目的の一半を失ひたるは残念なり。而も統計、叙事共に蕪事
たらざるを信するが故に、大方の一燦を博し得ば幸甚とす。

大正十二年九月初旬

神戸市長 石橋爲之助



む 望 を 港 戸 神 り よ 山 訪 諏



む 望 を 港 築 り よ 上 船 合 沖



む 望 を 合 沖 及 堤 突 り よ 内 構 港 築

神戸港大観

目次

第一章	神戸港の發達	一
第一節	沿岸施設の發展	一
第二節	外國貿易の進運	七
第二章	神戸港の概要	
第一節	港界及航路	一五
第二節	航路標識	一七
第三節	潮汐潮流及水深	一八
第四節	氣象	二三
第五節	戸數及人口	二五

第三章 神戸港の現況

第一節 築港

第一款 第一期修築工事既成設備

第二款 第二期築港擴張工事

第三款 築港設備利用の概況

第二節 運河

第一款 沿革

第二款 設備と其の利用

第三款 市營後の概況

第四章 船舶

第一節 出入船舶の消長

第二節 航路

第一款 内國航路

第二款 外國航路

第三節 沿海通航船の觀察

二九

二九

三六

四二

四六

四六

四九

四七

五三

五七

五八

五九

六三

第四節 外國貿易船の觀察

第一款 最近の外國貿易船

第二款 外國貿易船累年比較

附 本港上陸外來客の狀況

六六

六六

六八

七九

第五章 貨物

第一節 内國貨物

第一款 内國貿易に於ける神戸港の地位

第二款 内國貿易荷役場の設備

第三款 内國貿易の概況

第四款 朝鮮貿易

第二節 外國貨物

第一款 總說

第二款 輸出入貨物噸量

第三款 輸出入貨物價額

第四款 金銀輸出入の概況

第五款 輸出入品の變遷

八三

八三

八四

八五

九二

九五

九五

九八

一〇五

一〇七

一一三

第六款	通商國に對する關係	二三八
第七款	仲繼貨物	二四六
第六章 倉庫		
第一節	普通倉庫及出入貨物	一六七
第二節	保税倉庫及出入貨物	一六九
第三節	假置場及利用狀況	一七一
第四節	上屋及出入貨物	一八一
第七章 雜錄		
第一節	工業の概況	一八五
第二節	交通の狀態	一九五
第三節	陸運の概況	一九六
第四節	金融の狀況	二〇四
第一款	銀行	二〇四
第二款	神戸手形交換所	二〇七
第三款	神戸金融界の推移概況	二〇八
附	港灣關係設備使用料	
	港灣關係官公署會社及團體一覽	

寫真版

口繪

明治初年の湊川
今日の湊川新開地
開港當初の神戸
今日の神戸港
突堤を築造せんとする鐵筋混凝土函
築造中の防波堤
第一突堤築造前と築造後
築港利用の光景
運河廻轉橋附近
運河中ノ島附近に於ける舟筏の幅轉
内國貿易の島上棧橋
外國貿易の繫船荷役

目次

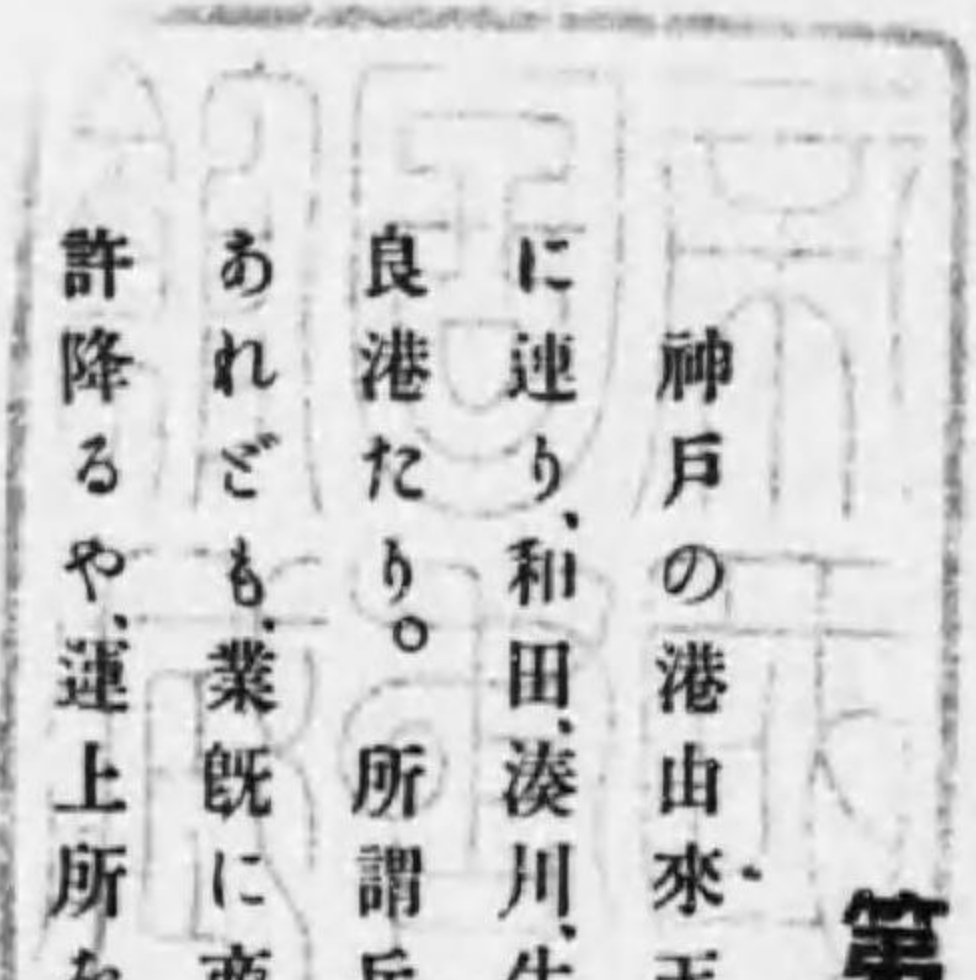
表

- 神戸港外國貿易價額累年表
- 神戸港外國貿易噸量累年表
- 神戸氣象圖（其一及其二）
- 神戸港突堤利用表
- 神戸港出入外國貿易船舶累年表
- 神戸港入港内外航船舶對照表
- 神戸港内國貿易發着對照表
- 神戸港重要輸移出貨物價額對照表
- 神戸港重要輸入貨物價額對照表
- 神戸港沿岸利用狀況調查圖

神戸港大觀

第一章 神戸港の發達

第一節 沿岸施設の發展



神戸の港由來天與の形勝を占む。北六甲、摩耶、再度の諸山を負ひて、南大阪灣に連り、和田、湊川、生田の三洲突出して、克く灣内を擁し、波靜に水深く、風に天下の良港たり。所謂兵庫の津は早くより船舶の往來繁く、平相國遷都以後時に消長あれども、業既に商港として重きをなし、が如し。慶應三年四月兵庫開港の勅許降るや、連上所を神戸村に建設し、倉庫及び波止場を築造し、外人の居留地域亦決定せられて、對外貿易の端緒茲に始めて開けたり。明治元年十一月走水、二ツ茶屋及び神戸の三寒村、戸數千に満たざりしを合して、神戸町と稱するに及び、其の船入場の設備を利用するもの漸く多く、神戸の港亦兵庫の津に對し、貿易上樞要の地と認めらるゝに至れり。

然れども當時の神戸港は猶未だ完からず。砂石の往々填埋するのみならず、時に風浪の災厄あり、貨物の揚卸亦不便なりしが故に、屢々灣内を浚渫し、砂除堤石垣を築造し、更に波止場をも増設して、纒に其の用に便せり。明治四年會々生田川の附替を行ひて、多年暴漲の患を除き、同六年小野濱に船溜を開鑿して碇泊に便するものあり、漸次外航船舶の出入般賑たるに及び、海上貨客の輸送に小蒸汽船を用ひ、又木造棧橋の架設をも見、一般施設の改良せらるゝもの多く、方に發展の曙光を萌せりと謂ふべし。反之兵庫港は依然長く舊殻を脱せざりしが、明治八年五月新川開鑿の一大工事を遂行してより、船貨の被害大に減じ、同十一年辨天濱の埋築せられたると相俟つて、便宜復昔日の比に非ず。後更に島上海岸船橋の架設せらるゝに及んで、貨客の集散漸く繁し。

明治十二年に至り神戸兵庫を合して神戸區と稱し、同二十二年之に市制を實施し、同二十五年港界線擴張せらるゝに及び、兵神兩灣は爾來全く神戸港なる名稱に包括せらるゝことゝなれり。斯くて海外貿易愈々發展すると共に、沿岸貿易亦著しく進歩し、之に伴ひて貨物の荷役及び船客の乗降に關する諸般の設備着々整頓せり。殊に明治三十一年に於ける米利堅波止場以西國産波止場間繫

船塲及び物揚塲擴張工事の實施、同三十二、三年の交に於ける兵庫運河の開鑿と、荊藻島の埋築、同三十四年に於ける湊川附替改修工事の竣成、竝に其の後に於ける海岸地域及び海面埋立の擴張等は、何れも直接本港の發達に資する所甚だ尠しとせず。

日清戦後本港の貿易が急激に増加するや、從來の諸設備忽ち其の狭小を愾へ、自然更に沿岸各施設の築造擴張を見たり。今其の重なるものを竣功年月に順ひて列記すれば略々左の如し。

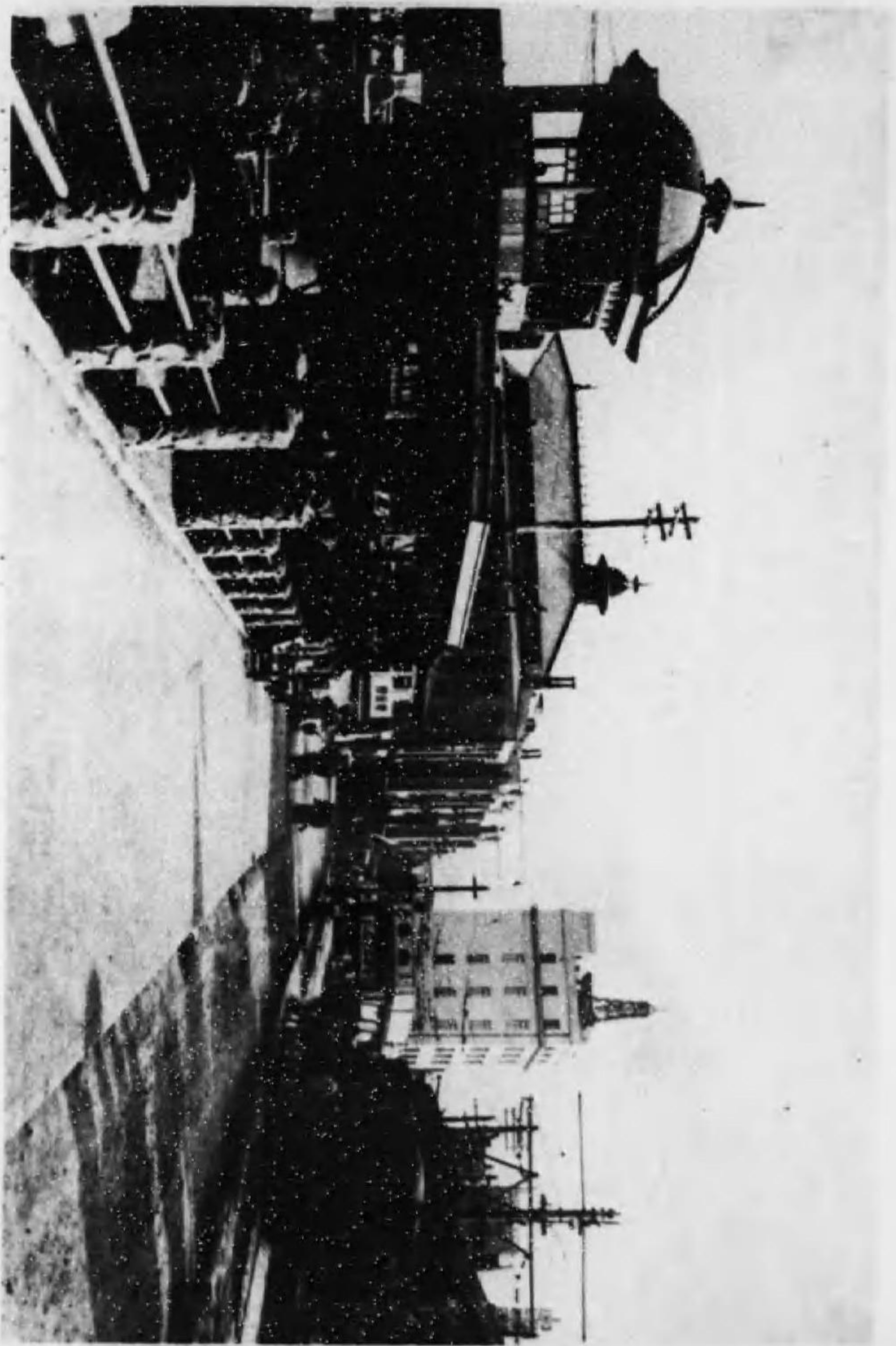
明治三十三年七月	神戸税關小野濱護岸及防波堤の築設
同 三十五年十二月	川崎造船所の船渠築造と水面埋立
同 三十六年十二月	湊川尻海面の埋立
同 三十九年十二月	和田岬三菱合資會社の埋築と船渠繫留塲
同 四十年二月	海岸通船渠修築工事
同 年七月	神戸海陸運輸聯絡鐵道及び小野濱驛の設置
同 四十三年二月	加納灣の埋立と葺合港共同物揚塲の設置
同 四十四年三月	米利堅波止場擴張

大正二年一月	高濱埋立
同 年三月	神戸製鋼所の海面埋立
同 七年六月	東神倉庫加納町地先埋立
同 十一年五月	川崎造船所の葺合港埋立

最後に特筆すべきは、本港をして世界貿易の一大良港たらしめたる所謂築港工事の完成なり。抑々該計劃は古く明治六年十月時の港長英人ジョン・マルシヤル氏の建言に創まり、同二十九年五月神戸市會の意見書提出となり、爾來幾度か劃策論議せられて、遂に同四十年三月第一期築港計劃の決定を見たり。其の總工費豫算實に壹千七百九萬九千四百七圓、中神戸市の分擔額四百參拾七萬圓、工事期間は明治三十九年度以降同四十六年度に亘る八箇年なりしが、政府は其の後財政上の都合に依り、再三事業を繰延べ、又工事の一部にも變更を加へて、結局工費壹千五百九萬貳千參拾七圓を以て大正十一年三月漸く竣成せり。其の總面積正に八萬三千坪、中繫船突堤四箇四萬餘坪に及び、之に上屋起重機等の諸設備、凡て歐米の萃を聚め、出入船舶の着離壁頗る便にして、之を世界一流の港灣に比するも些の遜色を見ず。

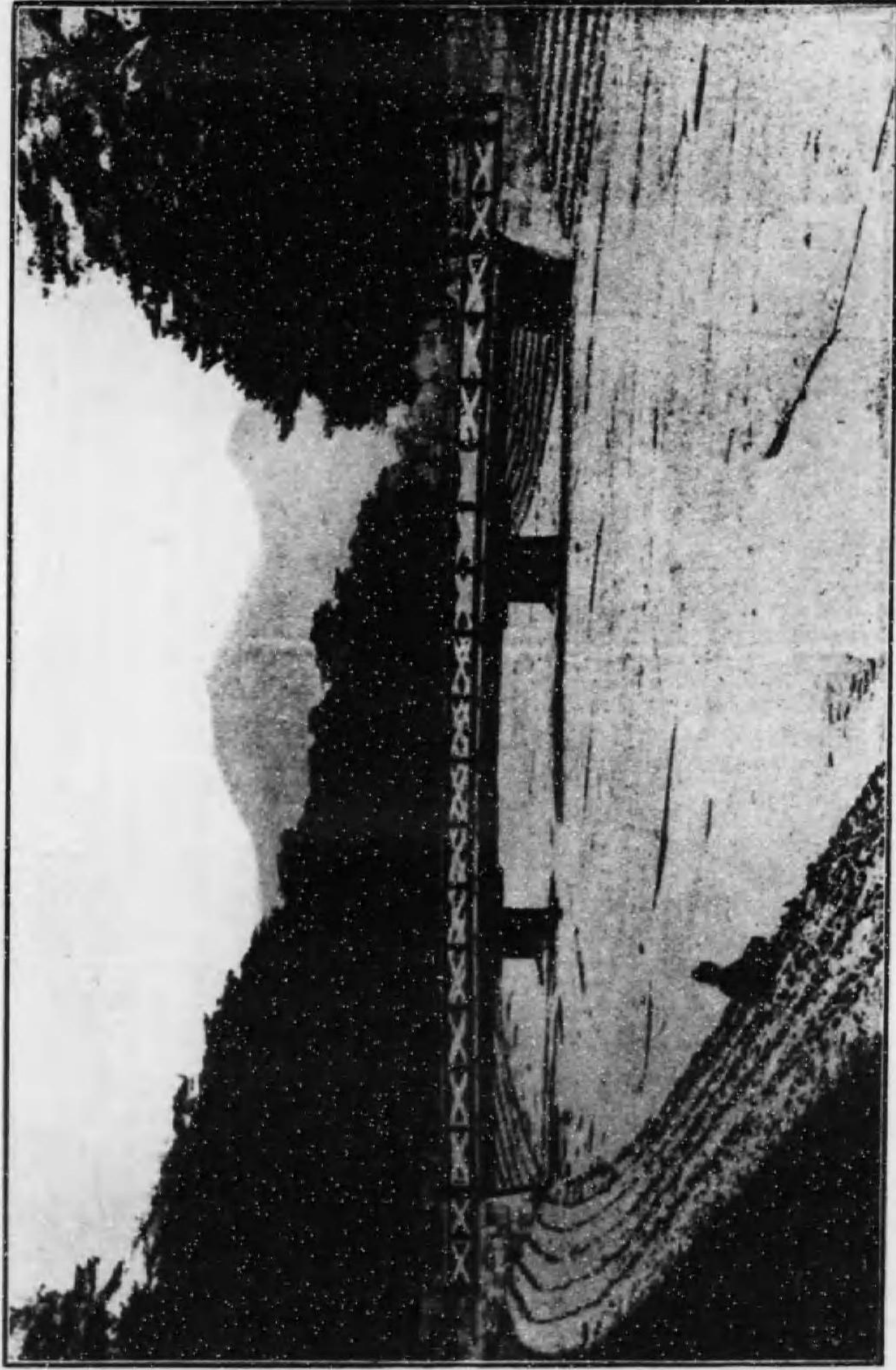
斯の如くにして築港の壯觀宇内に誇るべきものありしも、歐洲大戰の勃發は更に本港の内外貿易に一層の激増を來し、從來の施設を以てしては又もや狹隘を告ぐるに至りしより、大正八年四月政府は愈々第二期擴張工事を計劃せり。工費豫算は市費分擔壹千六百四拾五萬圓を合して、總額貳千九百八拾萬圓に達し、十箇年繼續事業として、小野濱の東方に海面約九萬三千坪を埋立て、外國貿易に宛つる外、西方兵庫沖に新しく九萬一千餘坪の内國貿易設備をなし、結構略々第一期に似せしむ。右事業も財政上期限を二箇年繰延べられ、大正十九年竣功の豫定を以て、目下折角進工中なるが、若し其の完成を見るの曉に於ては、外國貿易の繫船壁有効延長凡て二千六百十間、物揚場千七百八十二間を得、一箇年に突堤は三百九十一萬五千噸、物揚場は百四十二萬五千噸、計五百三十四萬噸の荷役可能を豫想し得べく、又繫船突堤には六千噸以上の大小汽船三十四隻を一時に繫留し得べし。而して内國貿易の繫船壁は延長五百二十間、物揚場は九百三十五間にして、一箇年の荷役量前者に於て二百二十八萬噸、後者に於て七十四萬八千噸、計三百二十八萬八千噸に及ぶべく、而して繫船壁には千噸以上の大小汽船二十三隻を一時に維繫するに足る。以て其の結構の壯大を想見すべし。

此等の施設と相俟つて附記すべきは防波堤の築造なり。其の起工は明治四十三年四月に係り、先づ東防波堤六百三十二間の一部に工事を開始し、大正六年南防波堤の築造に及び、工費四百六拾七萬圓を算す。尙右の外工事中又は計劃中の南、東兩防波堤の増築を合すれば延長方に三千間に垂んとし、蜿蜒港内を擁して風浪を防ぎ、克く船貨を安泰ならしむ。而して之に圍繞せらるゝ港内の水面積無慮二百七十八萬八千六百坪にして、其の水深九尺乃至三十尺、中舢舨及び小蒸汽船の碇繋水面は濱邊通地先、米利堅波止場附近、國産波止場沖並に兵庫新川沖等に於て約十四萬坪に達すべし。



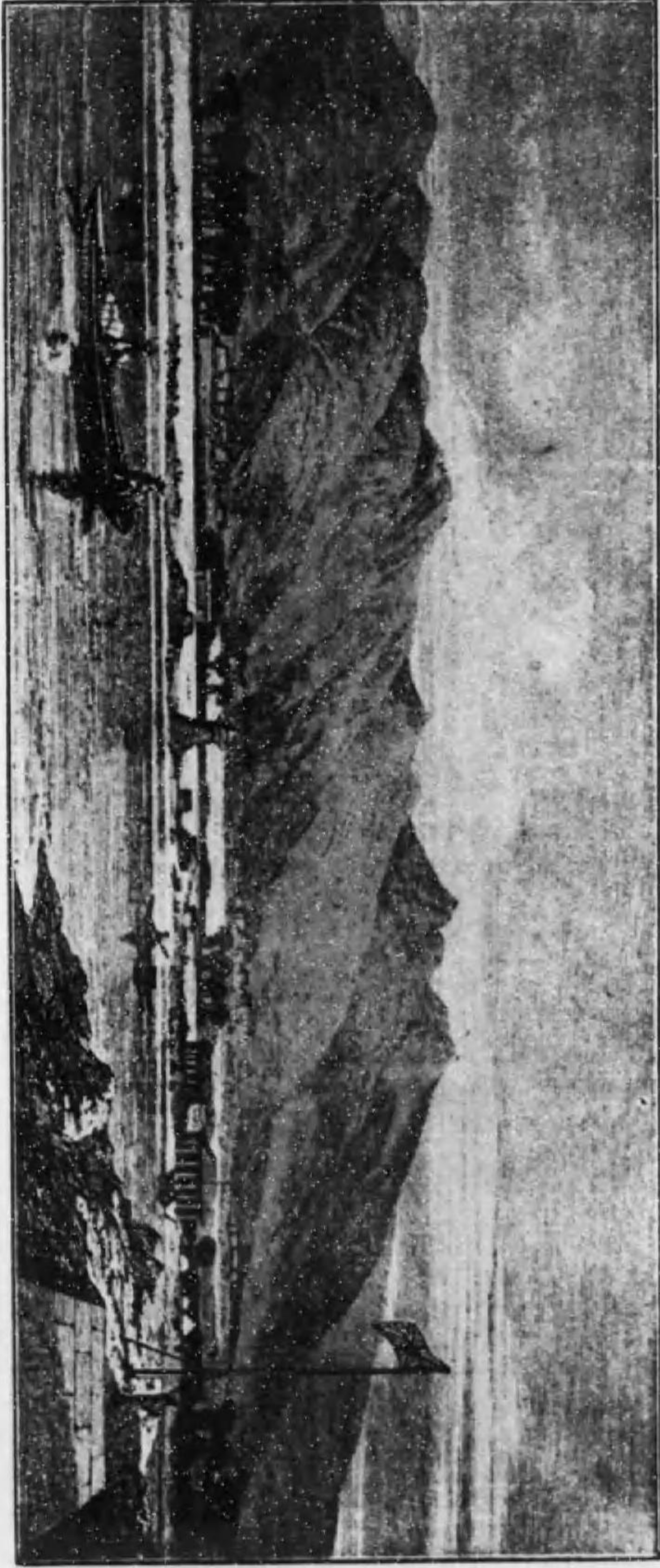
今日の湊川新開地

明治初年の湊川



む・収に・ペ・コー・ブ・オ・ノ・リ・ト・ス・ヒ・編・社・ル・ク・ニ・ロ・ク・ノ・バ・ン・ヤ・ウ 近附(前館築家地開新川湊の今)橋町新川湊

開港當初の神戸



軍海舊しりた:地在所館事領國英時當其、は所箇るて樹の旗國英、りあさ景の地留房庫兵はれ依に柱の國の此、しへる見を状の近附地留房るけ於に時當しりさら故:未の木土で以、くへるな端突の堀入舟るな前所の練操、刊月三(年元治明)年八六八一、所るけ畫のーマ・バ・ニ・エ・ジ・フエ官士組乗障艦國英して泊定時當港開は圖原。む・収に・ヌ・エ・ニ・ソ・フ・ソ・ロ・フ・ツ・テ・レ・ト・ス・ラ・イ

今日の神戸港



元居留地海岸壁波止場沖合を望む

第二節 外國貿易の進運

前節沿岸施設に據りて、本港發展の一斑を概叙したるが、更に貿易の消長に就て、其の進運を窺はんとす。但沿岸貿易に屬する數量價格は、其の調査に資すべき確たる徵憑記録に乏しく、之が集散分布の實況を知るに由なきを以て、今専ら對外貿易の狀況を述べて、其の大勢を知るに便せんとす。

明治初期に於ける本港外國貿易は、勿論逐年多少の進境を認むべきも、之を横濱開港當時の狀態に比すれば大に其の趣を異にし、一般に發達の遅々たりしを争ふべからず。殊に當初所謂神戸人士の貿易に對する思想は頗る幼稚にして、明治二年外商の此地に來往せし者、已に百八十五人の多きを算したるも、之を取引せるは多く他郷の薄資なる小賈に限られ、且著しき輸出品を有せず、輸入の必要亦薄かりしを以て、甚だ其の進運を阻止せられたり。即ち明治十年頃までの輸出入額が共に五百萬圓に上らざりしを以ても、其の一斑を知るべし。此の點に於て本港が天與の形勝を占むるに反し、當時人爲の頗る伴はざりしを憾ますんばあらず。併し斯の如き狀態は間もなく漸次改めらるゝに至り、産業勃興の

機運動き來ると共に、各種の工業は明治十二年の頃より起り、一方海陸交通の便開けて、航運亦擴張を見たるに相俟ちて、同二十年には輸出入額共に倍加するに至り、更に日清戦後經濟界の順調につれて、諸事業頗に旺盛を極むるや、本港の外國貿易も之に影響せられて、約四倍強の躍進を遂げ、總額一億圓を超過せり。而して茲に特に注意を惹くは、此頃より輸出入額の差異顯著となり、遂に輸入超過の趨勢が本港の一特色となれることなり。

明治三十三年、四年の交金融界恐慌の打撃を受けて、稍輸入の不況を見しが、輸出は幸にも順調なる發展を辿りて、貿易總額貳億圓を抜き、同三十八年には參億圓を突破せり。明治四十一年又もや金融界に恐慌の襲來するや、貿易復急轉落潮に陥りしが、同四十三年以後再び好勢に轉じ、其後支那に於て或は動亂あり、或は日貨排斥等の不祥事ありたれども、其の影響する所大ならず、歐米諸國に於ては市場一般に良好にして、本港の貿易亦増進を續けたり。

歐洲大戰の初頭に於ては、貿易も稍悲況に陥りしが、戰禍の繼續に連れて世界の市場が我に開かるゝや、國民皆猛然として商戰場裡に活躍せる結果、大正五年より本港貿易増進の割合も亦頗る顯著となり、同六年には汽船の輸出六千參百

萬圓の多きに及びて一新記録を作り、貿易總額の如きも拾億圓を超えて遂に横濱を凌駕し、更に同九年には戰捷の餘慶を以て、輸出五億圓輸入拾壹億圓總計實に拾六億圓を突破するの盛觀を呈せり。併しかゝる状態の永續を望むは尙早に屬せるにや、翌年經濟界の大恐慌に伴ひ、急轉直下拾億圓の貿易額に減じ、一時の成行は甚だ寒心すべきものありしが、漸く安定して大正十一年には又拾壹億圓に上れり。

以上を以て大體對外貿易の進運を察すべきが、今試に過去五十有餘年間に於ける貿易増進の跡を證するため、明治元年を基準として毎五箇年毎に比較すれば、其の増加率左の如し。

年次	輸出	輸入	輸出入計
明治元年	一・〇	一・〇	一・〇
同五年	四・三	七・五	六・二
同十年	一〇・〇	六・二	七・八
同十五年	一四・五	九・三	一一・三
同二十年	二八・四	二〇・一	二二・四
同二十五年	四七・四	四四・六	四五・七

年次	輸出	輸入	輸出入計
同 三十五年	一四四・四	一六一・〇	一四二・六
同 三十五年	一六六・三	二一〇・一	一九二・八
同 四十年	二三七・四	三二四・九	二九〇・三
大 正 元 年	三三四・八	四三九・四	三九八・一
同 五年	七三六・八	五四三・九	六二〇・一
同 十年	五〇九・九	一一七・三	八七七・一
同 十一年	六二二・七	一一四五・二	九一・二

尤も右の表は或は仔細に之を検する時は、統計編製の不備、貨幣制度銀價の變動及び之に伴ふ一般物價の騰落等により、決して的確なる貿易價額變遷の實相を示すとは言ひ難からんも、依つて以て略々其の大勢を知るに足るべし。
尙次に明治二十二年の噸量を一として、其の増進の割合をも左の如く示すを得べし。

年次	輸出	輸入	輸出入計
明治二十二年	一・〇	一・〇	一・〇
同 二十五年	〇・七	一・二	〇・八

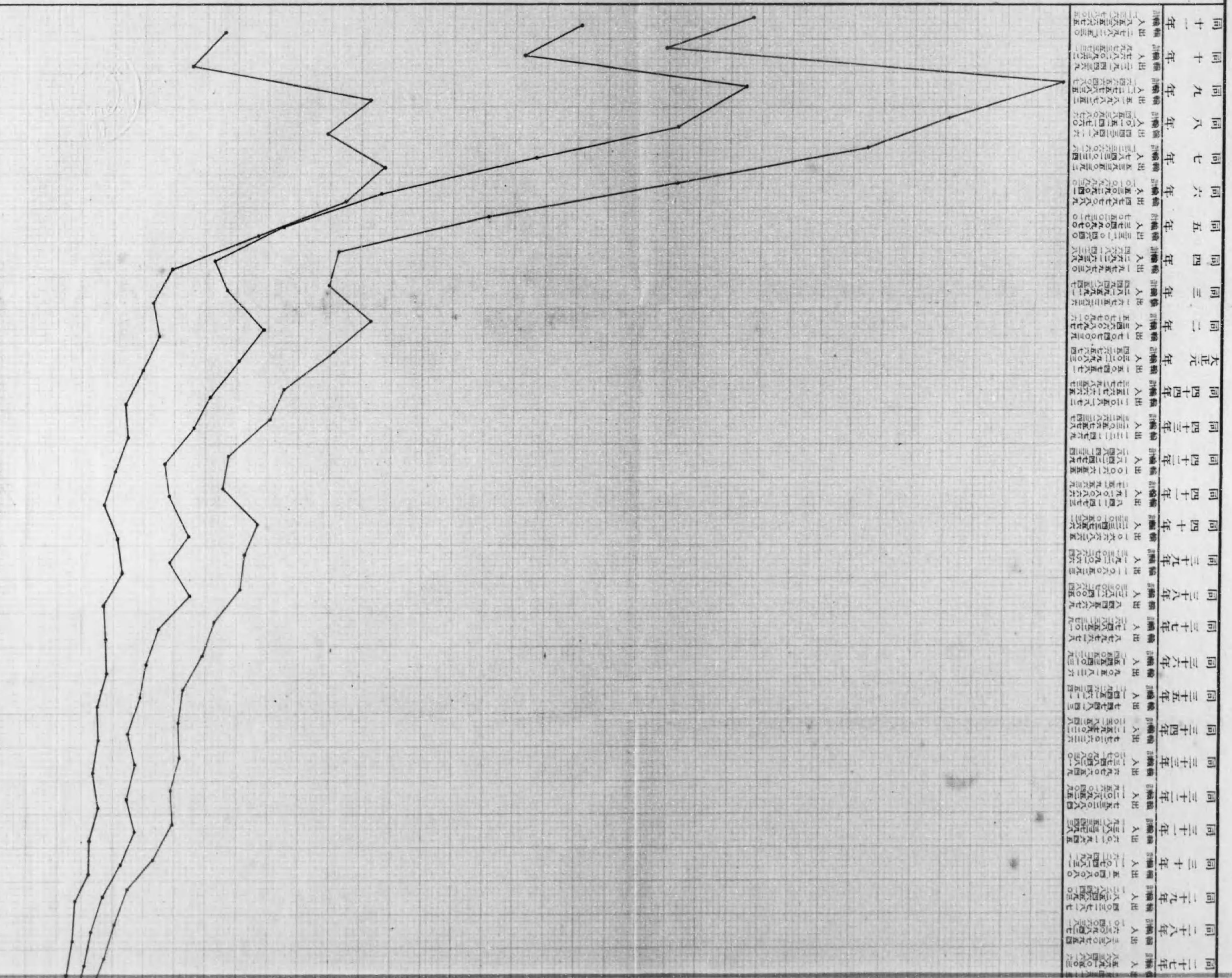
年次	輸出	輸入	輸出入計
同 三十五年	〇・九	一・五	一・八
同 三十五年	一・一	三・一	一・八
同 四十年	一・三	四・八	二・六
大 正 元 年	一・七	六・五	三・五
同 五年	三・〇	五・五	三・九
同 十年	一・四	八・七	四・二
同 十一年	一・六	一〇・七	五・〇

茲に甚だ遺憾なるは、官府の統計缺知せるが故に、明治二十一年以前に於ける輸出入貨物の噸量が如何なる變遷を辿れるかを知らざることなり。然れども其の價額の推移によりて略々大體を察知すべく、それよりも注意すべき一事は、前にも述べたるが如く、明治二十年前後より、輸出に比して輸入の増加率漸次擴大せられ、殊に其の傾向が價額よりも噸量に於て甚しく、且明治末期より特に顯著となれることなり。是れ全く神戸港の背域に於て、工業及び造船業の勃興したるを證するものにして、蓋し其の原料の輸入増大したると共に、輸出に於て夫等の製作品を多く含めるに職由せずんばあらず。

れに對する地位の變遷に想到せば、思ひ方に半ばに過ぐるものあらん。

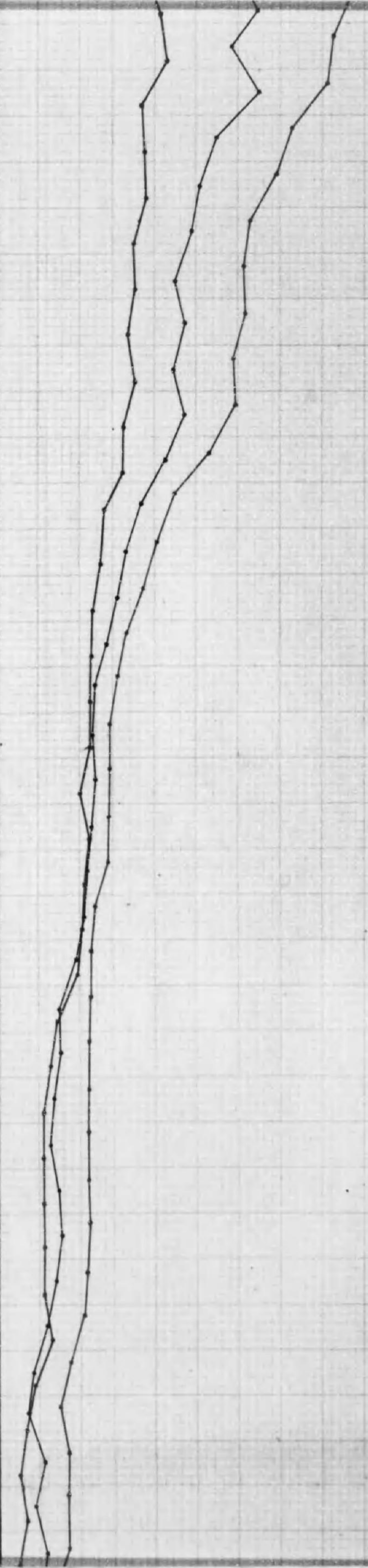


十六億門
十五億門
十四億門
十三億門
十二億門
十一億門
十億門
九億門
八億門
七億門
六億門
五億門
四億門
三億門
二億門
一億門
一千萬門
八百萬門
六百萬門
四百萬門
二百萬門



備考 一、本表中明治四十三年乃至大正九年貿易價額中二八朝貿易價額予包含
二、大正十年以降朝鮮貿易價額八別二內國貿易統計表中三收

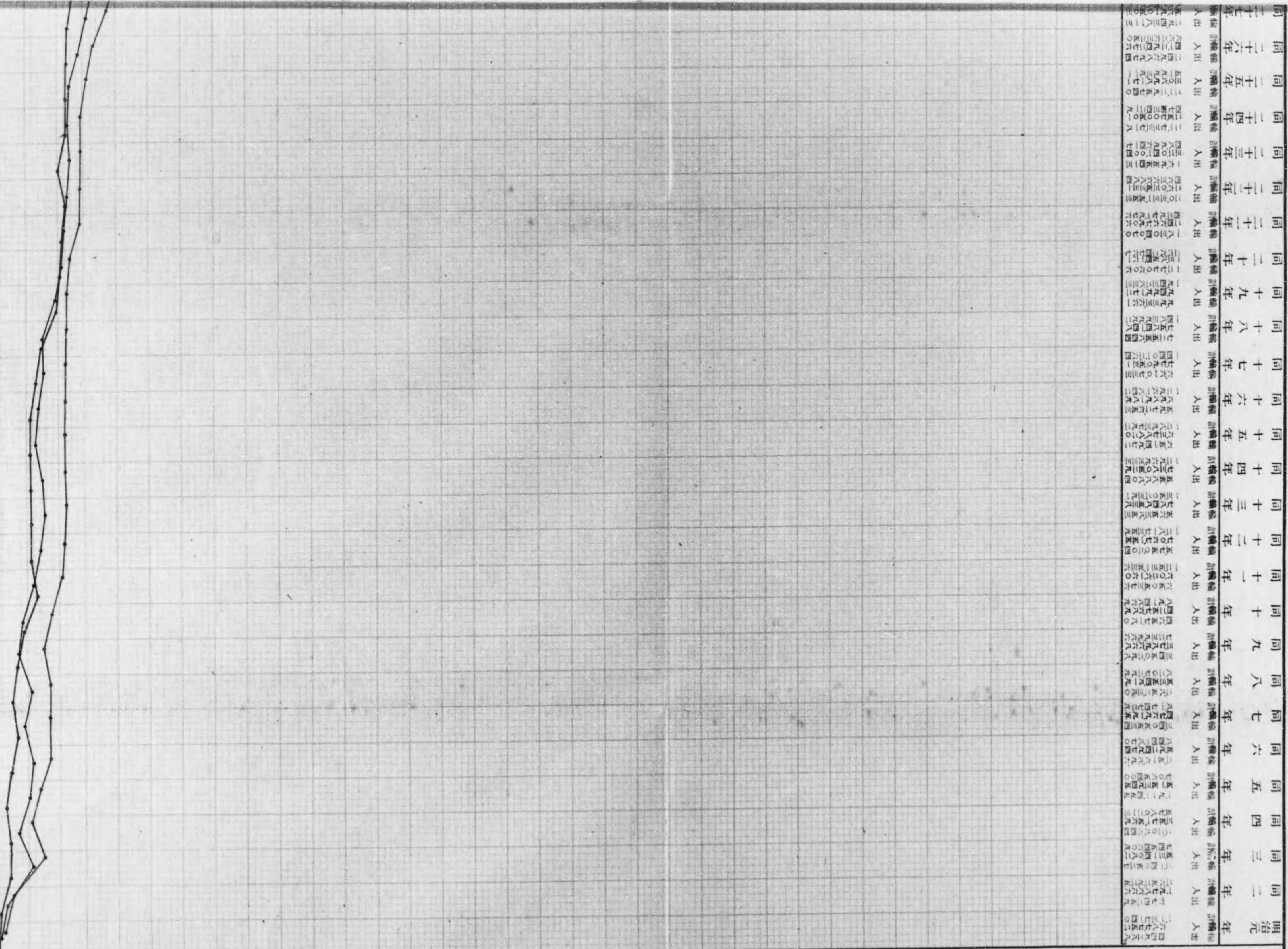
同 六 年	同 七 年	同 八 年	同 九 年	同 十 年	同 十 一 年	同 十 二 年	同 十 三 年	同 十 四 年	同 十 五 年	同 十 六 年	同 十 七 年	同 十 八 年	同 十 九 年	同 二 十 年	同 二 十 一 年	同 二 十 二 年	同 二 十 三 年	同 二 十 四 年	同 二 十 五 年	同 二 十 六 年	同 二 十 七 年	同 二 十 八 年	同 二 十 九 年	同 三 十 年	同 三 十 一 年	同 三 十 二 年	同 三 十 三 年	同 三 十 四 年	同 三 十 五 年	同 三 十 六 年	同 三 十 七 年	同 三 十 八 年	同 三 十 九 年	
入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三	入出 八四三 入出 八四三



神戶港外國貿易價額累年表

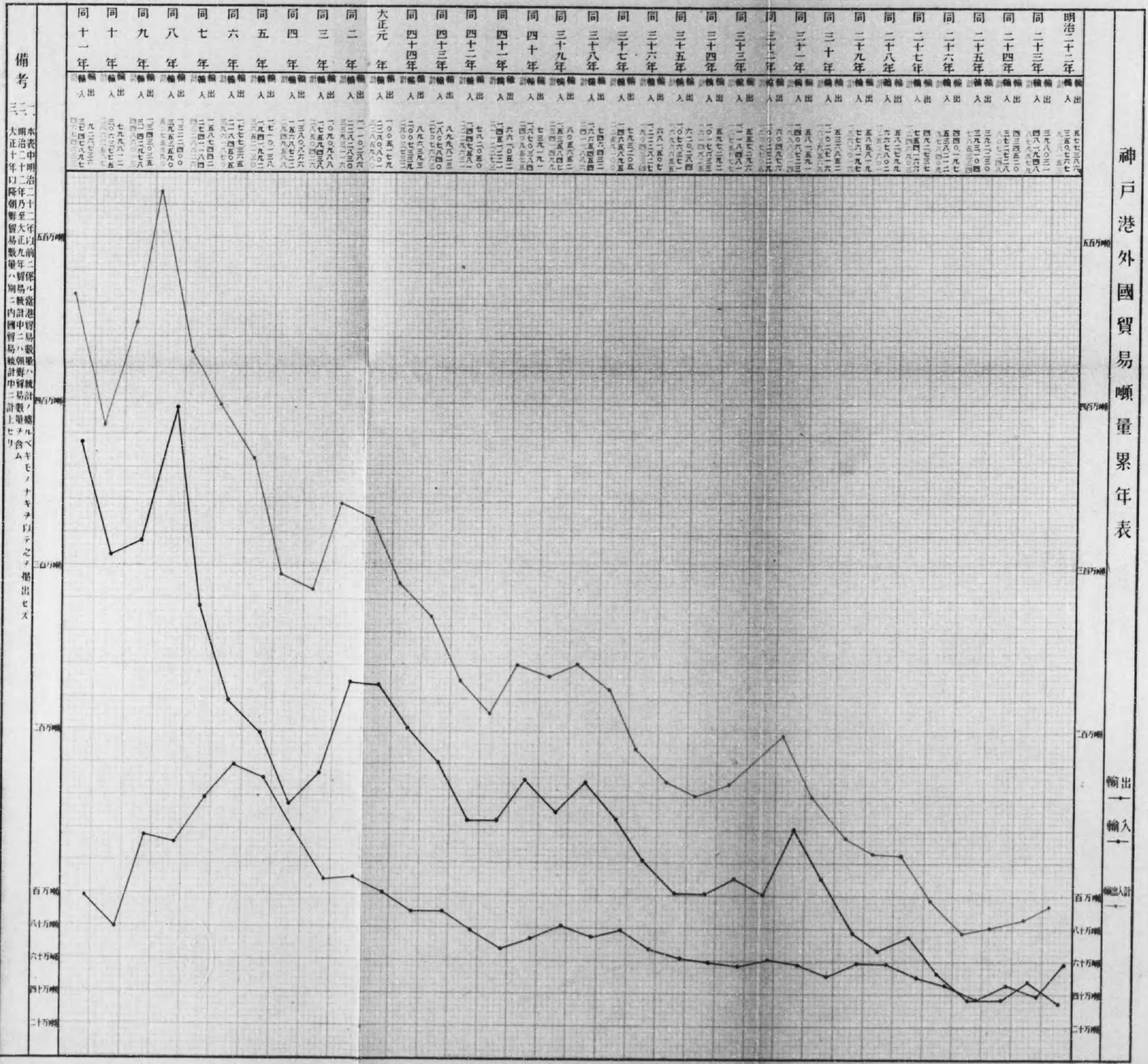
十六億門
十五億門
十四億門
十三億門
十二億門
十一億門
十億門
九億門
八億門
七億門
六億門
五億門
四億門
三億門
二億門
一億門
一千萬門
八百萬門
六百萬門
四百萬門
二百萬門

輸出
輸入
總出入



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

神戸港外國貿易噸量累年表



備考
 本表明治十二年以前係舊統計、明治十三年以後係新統計、其間之差異、係因統計方法之不同、故有出入、其詳見於本表之末、

第二章 神戸港の概要

第一節 港界及び航路

神戸開港當時に於ける外航船舶の碇繋區域は、舊生田川尻より西南湊川尻の北東に至る海面にして、兵庫津は全然之に包含せられざりき。然るに其の後船舶の出入漸く増加し、區域狹隘を感ずるに至れるより、政府は明治二十五年十月一日港界を次の如く擴張せり。

神戸港船舶碇繋所の區域は舊生田川口より正南に向ひ、和田岬の尖角より北東に向ひ直線を畫し、其の兩線交叉以南と定む。

於是兵庫港亦外國貿易地域となりしが、貿易の進展は此の擴張を以て満足する能はず、明治三十三年勅令第二五二號により更に次の如く擴張せられたり。

神戸港の港界は協の濱の東角より正南に引きたる一線と、和田岬より北東に引きたる一線との二線を境界となしたる面積内に含まる。

其の包擁する水面積は各突堤間及び其他の船溜をも含めて約二百七十八萬

八千六百坪にして、港内海岸線の延長五千間に垂んとす。而して港界を標示せんが爲め、北東は脇の濱海岸に赤白色二箇の立標、及び南西は和田岬に同様二箇の立標を建設す。

本港第三波止場及び兵庫陸揚場又は其の附近に往復する總噸數八百噸以下の汽船の爲めに、兵庫縣に於て次の三種航路を定め、船舶の碇泊を禁ず。

- 一、第一種航路は舊湊川尻南岸に建設したる頭部三角形二基の赤色立標を海上より見通したる一直線の右側三百尺間
- 一、第二種航路は國産波止場に建設したる頭部三角形の白色立標と港務部構内にある報時球柱を第一種航路より見通したる一直線の左側二百尺間
- 一、第三種航路は兵庫島上町に建設したる頭部三角形二基の赤色立標を第一種航路より見通し各一直線の左側二百尺間

更に港界内を前記第一種航路の南北二區に分ち、其の極東極南部を軍艦、其他を商船の碇泊所とし、兩區の沿岸を雜種小形船の碇泊所と定めたり。

第二節 航路標識

神戸港の位置は、舊湊川尻川崎波止場の稍々南寄なる天測點に於ける觀測に基き、北緯三十四度四十分十二秒、東經百三十五度十分五十秒とし、本港燈臺の位置も亦之に據れり。

和田岬燈臺。明治三年夏兵庫和田岬石堡塙の西方北緯三十四度三十九分、東經百三十五度十一分の地に工を起し、同五年八月初めて點火す。燈臺の構造は木造八角形白色塗にして、等級は第四等、燈質は不動色、水面より燈火まで五十二尺、基礎より燈火まで四十六尺、光達距離十二海裡なりしが、明治十七年三月に至り鐵造白色六角形に改築し、其の後更に明孤を南八度十五分東より南西北を經て北七十二度四十五分東まで二百六十一度間とし、燈質はアセチリン瓦斯明暗白光明三秒暗二秒、燈光力二千燭光、光達距離十二海裡半に變換せり。

東防波堤南燈臺。東防波堤の南端北緯三十四度四十分、東經百三十五度十二分の位置に於て鐵道格子製櫓形紅色の燈臺を設置す。其の高さ滿潮面より三十九尺、基礎面より三十五尺にして、燈質はアセチリン瓦斯閃紅色每四秒半に一

閃光を發する装置とし、明弧は全度にして燈光力三百燭光、光達距離十一海涅半。
 東防波堤北燈臺。東防波堤の北端北緯三十四度四十一分、東經百三十五度十二分の位置に於て、南端の燈臺と同様の構造にて白色櫓形とし、燈質はアセチレン瓦斯閃綠光毎四秒半に一閃光を發す。明弧は全度、燈光力は二百燭光にして燈臺の高及び光達距離等何れも南端燈臺に同じ。

右三燈臺は何れも政府の管理に屬するが、此他神戸市又は會社の施設に基く點燈裝置數箇あり。即ち市は米利堅波止場に百五十燭光瓦斯燈十箇を點する外、縣營に係る國産波止場浮棧橋頭部の電燈は、東側に赤色西側に綠色二箇を點じ、光達二涅半なり。又會社經營に屬する兵庫島上町棧橋外端に二紅色電燈を點じ、和田岬三菱造船所防波堤先端に白色電燈千燭光一箇、高約二間半、及び東京倉庫和田棧橋の頭端に赤色電燈二十四燭光一箇を設備す。何れも汽船の發着を安全ならしめ、船客の乗降に便すること幾何ぞや。

第三節 潮汐潮流及水深

本港に於ける潮汐干満の調査は、明治三十三年以降第二波止場内米利堅波止

場の西南位に、自記檢潮器を据付けて細密に之を行ひ來れり。今大正元年以後に於ける潮位表により其の狀況を見るに、一年を通じて満干の平均差は二呎六六にして、朔望大満潮時に於ける平均差は五呎〇一、而して最高最低潮位の差は最大八呎〇二、最小六呎六二を示せり。蓋し潮位の最高となるは夏季暴風雨季節、又は春秋大満潮期にして、最低となるは冬期互寒の季節なり。概して氣壓の降下に伴ふ南西強風は、大阪灣内の水準を高むること二尺に及ぶといふ。要するに本港干満潮の差は左の潮位表に示すが如く甚だしからざるを以て、船艇の荷役上大なる不便を感ずること稀なり。

年次	通常潮位一年平均		大満潮時潮位一年平均		一箇年間最高最低潮位差	
	満潮	干潮	満潮	干潮	最高	最低
大正元年	六・〇四	三・六五	六・九〇	一・七八	八・一二	〇・四四
同 二年	六・三二	三・三〇	七・〇四	一・九〇	八・〇〇	〇・六四
同 三年	六・二六	三・五五	七・二三	二・〇五	八・五〇	〇・四八
同 四年	六・四九	三・五一	七・三一	二・一八	八・七〇	〇・六八
同 五年	六・三三	三・七五	七・一八	二・一一	八・三五	〇・五六
同 六年	六・二六	三・六四	六・九二	二・〇一	八・五〇	〇・六一

同 七年	六・一六	三・五五	二・六一	七・〇八	二・〇八	五・〇〇	八・一二	〇・八三	七・二九
同 八年	六・三二	三・六九	二・六三	七・〇七	二・二〇	四・八七	七・八五	一・二三	六・六二
同 九年	六・一九	三・六五	二・五四	七・〇八	二・一七	四・九一	八・二四	〇・九一	七・三三
同 十年	六・二四	三・七六	二・四八	七・〇七	二・三五	四・七二	八・三二	〇・八五	七・四七
平均	六・二六	三・六一	二・六六	七・〇九	二・〇八	五・〇一	八・二七	〇・七二	七・五五

本港の潮流は和泉灘に於ける本流の渦流に過ぎざるが、未だ完全なる観測の行はれたるを聞かず。唯今試に其の規模の比較的大なりしものを擧ぐれば次の如し。

一、明治三十年六月、七月の頃神戸市役所内築港調査事務所に於て、明石西灘間、淡路洲本岩屋間及び神戸港内の各沿岸を測定せる結果に據れば、流速は明石瀬戸に於て最高一時間二・七哩、和田岬邊は一・一哩、港内は普通大潮時の速力〇・五八哩、小潮時〇・三五哩を示せり。

一、大正二年九月より翌年六月に亘り、海軍水路部に於て、明石瀬戸の潮流を測量せる結果は、春秋大潮に於ける最大は一時間に西流四・六哩、東流四・三哩、夏冬大潮西流四・二哩、東流四・七哩、又春秋小潮は西流三・八哩、東流三・三哩、夏冬小潮西流二・九哩、東流三・〇哩なりしと云ふ。

一、大正六年十月より十二月まで大藏省臨時建築課神戸出張所に於て、和田岬附近を観測せるに據れば、同沖合の潮流方向は漲潮時に在りては稍々西南方向に、又落潮時にありては東北方向に流れ、流速は大潮時最大一時間一・二哩、小潮時最大〇・六哩なり。

惟ふに港内の潮流は大潮時と雖も、一時間の流速〇・六哩を超過すること稀なるが如く、其の方向も概して東より西するもの多きに似たり。

本港の水深に就ては之を天與として肯せざるべからず。明治三十六年水路部刊行の神戸港海圖に見るも、三尋の等深線は近く海岸より百五十間に在り。五尋線の遠きものと雖も八百間を出でざるを以て、大船の碇泊に共用せらるゝ前記水深の部分は海岸に近く、而も安全なる場所にして荷役上の利便極めて大なりとす。又海底傾斜の状況は所によりて異なるも、常に潮流の激する和田岬附近の急斜を除き、小野及び川崎の突洲沖にては、水深五尋に達するまでの海底は約六十分の一、其他は百四十分の一内外となり、五尋以上の海底は漸次緩勾配をなして沖合に傾斜し、和田岬の東南方位に到りて七尋に及び、和泉灘の稍々中央に於て初めて十尋の水深を得るが如し。

第四節 氣象

本港に於ける天測及び氣象觀測は、明治八年十月時の港長英人ジョン・マルシヤル氏が、港務所に於て始めて之に従事したるを嚆矢とし、之と同時に和田岬燈臺規定の下に行はれたる氣象觀測と相俟ち、爾來年々缺漏なきを得たり。明治二十九年十一月本縣測候所の落成と共に、改良發達漸次諸般の設備も整頓し、更に大正九年四月海洋氣象臺の設置を見るに及んで、萬遺憾なきを得以て今日に及べり。今明治三十年以降の測候成績によりて累年平均氣象表を示せば略々左の如し。

氣象	月別												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
氣温 (攝氏)	四・六〇	四・七一	七・四六	一二・二八	一七・四九	二二・三六	二五・三二	二五・七七	二二・一五	一七・三三	一二・九三	六・七九	一五・〇三
降水量 (總計)	五三・八九	五五・七五	六六・六六	二二・〇六	一一・四七	二二・三六	一四・五七	二二・九七	一五・八五	二四・七三	六三・六三	七三・三三	三三三・五六
湿度 (百分率)	六八・一	六六・二	六七・七	六八・五	七〇・二	七七・三	七七・九	七四・四	七四・九	七二・一	七〇・四	六八・〇	七二・三
雲量 (十分率)	五三・七	五六・八	六二・八	六二・八	六〇・八	七七・四	七二・三	六〇・六	六〇・九	六〇・二	五〇・三	四七・五	六二・四
風 (秒間米)	三・四九	三・四三	三・四三	三・三九	三・二二	二・九七	三・〇〇	三・三四	三・二七	三・一七	三・二八	三・三九	三・二八
平均速度	三・四九	三・四三	三・四三	三・三九	三・二二	二・九七	三・〇〇	三・三四	三・二七	三・一七	三・二八	三・三九	三・二八

今神戸測候所の觀測に係る平均氣温及降水量を、大正元年より月別に表示すれば次の如し。

平均氣温表 (攝氏)

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
大正元年	四・一	七・四	八・三	一三・五	一七・二	二二・二	二四・五	二六・九	二二・八	一六・九	一〇・六	六・九	一四・九
二年	三・六	四・六	六・三	一四・七	一六・七	二二・〇	二四・六	二五・九	二二・三	一七・三	一一・七	六・五	一四・五
三年	五・〇	五・〇	九・九	一四・九	一八・二	二二・五	二七・三	二七・九	二四・三	一七・一	一一・五	七・五	一五・八
四年	四・五	五・〇	六・四	一三・三	一七・四	二二・三	二六・二	二六・九	二四・六	一九・三	一一・一	七・四	一五・五
五年	六・八	五・六	五・八	一三・三	一八・二	二三・五	二五・八	二七・四	二五・〇	一七・八	一一・六	七・八	一五・九
六年	二・七	四・一	五・八	一三・三	一七・四	二二・三	二五・八	二七・四	二五・〇	一七・八	一一・六	七・八	一五・九
七年	二・三	四・二	六・八	一三・一	一七・〇	二二・一	二七・〇	二七・一	二四・〇	一七・九	一一・二	四・三	一四・四
八年	四・二	四・七	八・四	一三・七	一七・五	二二・二	二六・七	二六・三	二三・五	一七・四	一一・三	六・二	一四・五
九年	四・四	四・七	八・八	一三・三	一七・一	二二・八	二六・三	二六・三	二三・三	一七・六	一一・四	七・三	一五・二
十年	五・二	四・八	六・四	一三・八	一七・四	二二・六	二五・二	二七・四	二三・三	一七・〇	一一・〇	六・七	一四・七
十一年	二・四	七・四	六・八	一三・九	一八・五	二二・四	二五・八	二八・五	二四・九	一八・〇	一一・二	五・八	一五・六

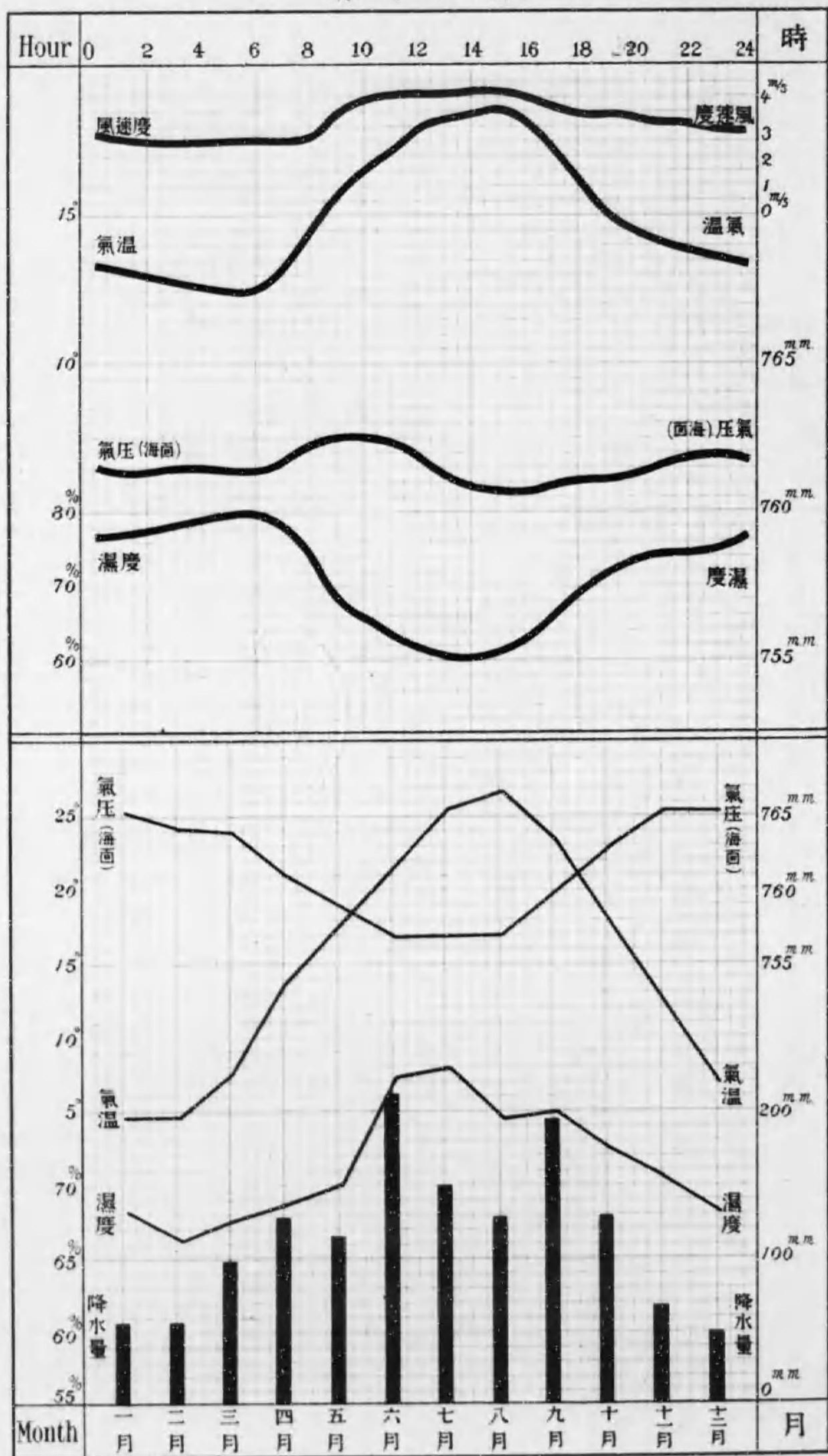
備考 一、大正元年より同六年までは二十四回觀測の平均、大正七年以後は六回觀測の平均値なり。

神戸港大観

神戸氣象圖

(累年平均)

其一



備考 一、降水量中には雨の外雪、霰、其他水の變形せるもの、降下せしを融解し、水として計りたるものをも含む。

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	總量
大正元年	三六・四	二九・〇	一〇二・五	一三四・九	八七・八	一〇八・一	一七二・一	二四二・一	二五〇・八	五〇・六	四六・二	九五・二	一三二七・六
二年	五七・七	四六・七	五二・六	九七・五	一三二・九	一三一・九	四四・四	一三二・九	六一・三	三九・五	一一・六	九八・二	一三三七・八
三年	三三・六	六二・二	一四三・二	一〇〇・三	二二七・三	二六六・六	七二・八	一三三・九	一五六・六	九七・二	五三・三	四四・五	一四〇五・五
四年	六二・九	二九・七	五二・〇	一九六・八	二二六・四	二六七・二	五二・一	二四四・八	一六七・二	一五九・九	九一・二	三〇・二	一五六四・四
五年	三三・五	二七・二	五二・六	一三九・一	二二六・四	三〇・六	六六・五	二〇三・六	一六九・一	一七八・〇	二五・二	三〇・二	一五六四・四
六年	九・八	二五・六	二八・四	八〇・七	九二・九	二〇・六	六〇・一	一四四・九	三二五・八	二七四・三	一五・二	一八三・一	一四二二・七
七年	三三・九	四〇・六	二六・九	一〇八・〇	一〇八・七	一九四・九	八〇・〇	一五四・三	二〇八・六	一三四・七	三〇・〇	七三・五	一三二八・二
八年	八二・七	五三・六	一〇七・九	七二・九	四七・八	一六八・三	三三・四	一五九・九	二八・八	一〇一・三	六五・〇	四七・七	一一五七・三
九年	六三・三	六八・八	八四・〇	五五・一	八六・四	一九〇・八	九一・四	二二九・八	一五八・八	一〇一・三	四・四	九九・六	一一九四・〇
十年	六三・九	四四・三	九九・八	一八一・一	一四九・一	三六〇・九	一六八・七	一二五・〇	三四八・六	四七・四	四・四	三三・九	一六六四・九
十一年	五八・四	二〇・三	二二・八	一〇〇・六	一五八・八	二二九・五	二九九・一	四九・七	一四七・〇	一六一・一	九五・八	一三三・一	一三八五・四

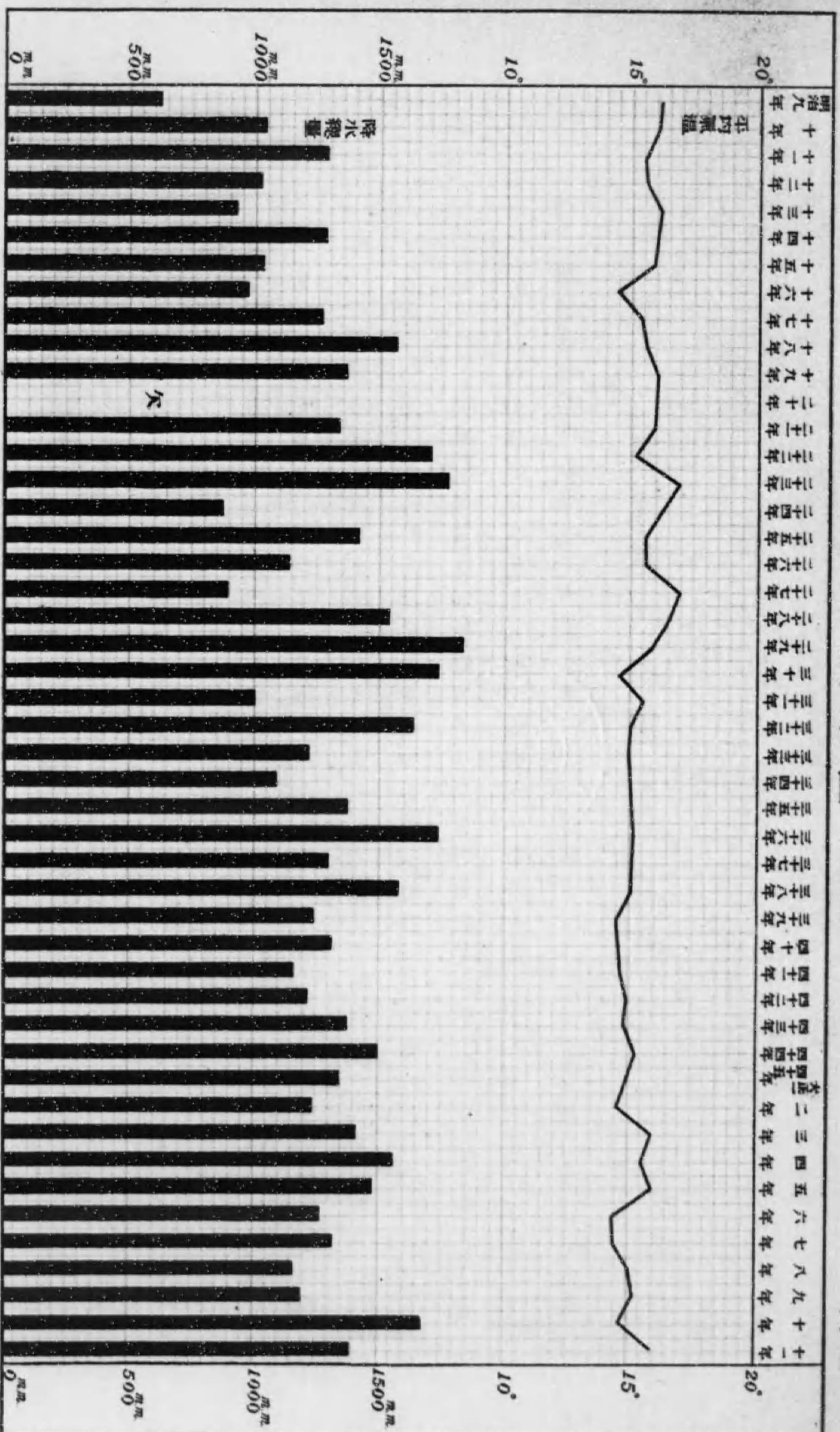
第二章 神戸港の概要

二、前掲の気温を華氏に換算するには、之を二倍して其の一刻を減じしものに、三十二度を加算すべし。

降水量表 (耗)

神戸氣象圖(年別)

其二



二、一耗の降雨は一坪に付一升八合三勺に當る、即ち十耗は一段歩に約五十
五石なり。

第五節 戸數及び人口

明治初年神戸は戸數千に満たざるの一寒村なりしも、兵庫は既に商家軒を並べて、人馬の往來相當に繁く、西國街道交通の衝にも當りしかど、戸數尙五千に及ばざりき。爾來對外貿易の伸張に伴ひ、兩者の合併せられて神戸區と唱へらるゝ頃には、戸數二萬人口五萬を超え、其の後年々激増して十箇年毎に順次殆んど倍加の盛況を呈し、大正五年には十二萬一千八百五十四戸、五十二萬九千八百六十五人となり、同八年には更に戸數十四萬に上り、人口六十三萬を突破せしが、翌九年四月には須磨町の市内編入を見たるも、歐洲大戰後に於ける經濟界の大恐慌に影響せられて、戸口の減少を來したるが、同十年より再び増加し、同十一年に於て戸數十六萬二千八百一、人口七十四萬二千六百四十七に上れり。今明治元年より五箇年に戸口を示せば次の如し。

年次	戸数	人口
明治元年	五、九四二	二三、七一三
同 同 二年	一六、五四七	四〇、九四〇
同 同 三年	一八、九七五	五一、五四四
同 同 四年	二〇、二四四	六二、四〇五
同 同 五年	二七、三七〇	一〇三、九七九
同 同 六年	三六、四七三	一四八、一一八
同 同 七年	四九、二五五	一九三、〇〇一
同 同 八年	六九、二九〇	二七四、四四九
同 同 九年	九一、一一四	三六三、五九三
同 同 十年	一〇五、九三二	四三一、三七八
大正元年	一二一、八五四	五二九、八六五
同 同 二年	一三一、四五〇	五九一、三九三
同 同 三年	一四〇、〇三八	六三四、〇六三
同 同 四年	一三八、九八六	六〇八、六二八
同 同 五年	一五七、五九七	七一四、九七六
同 同 六年	一六二、八〇一	七四二、六四七

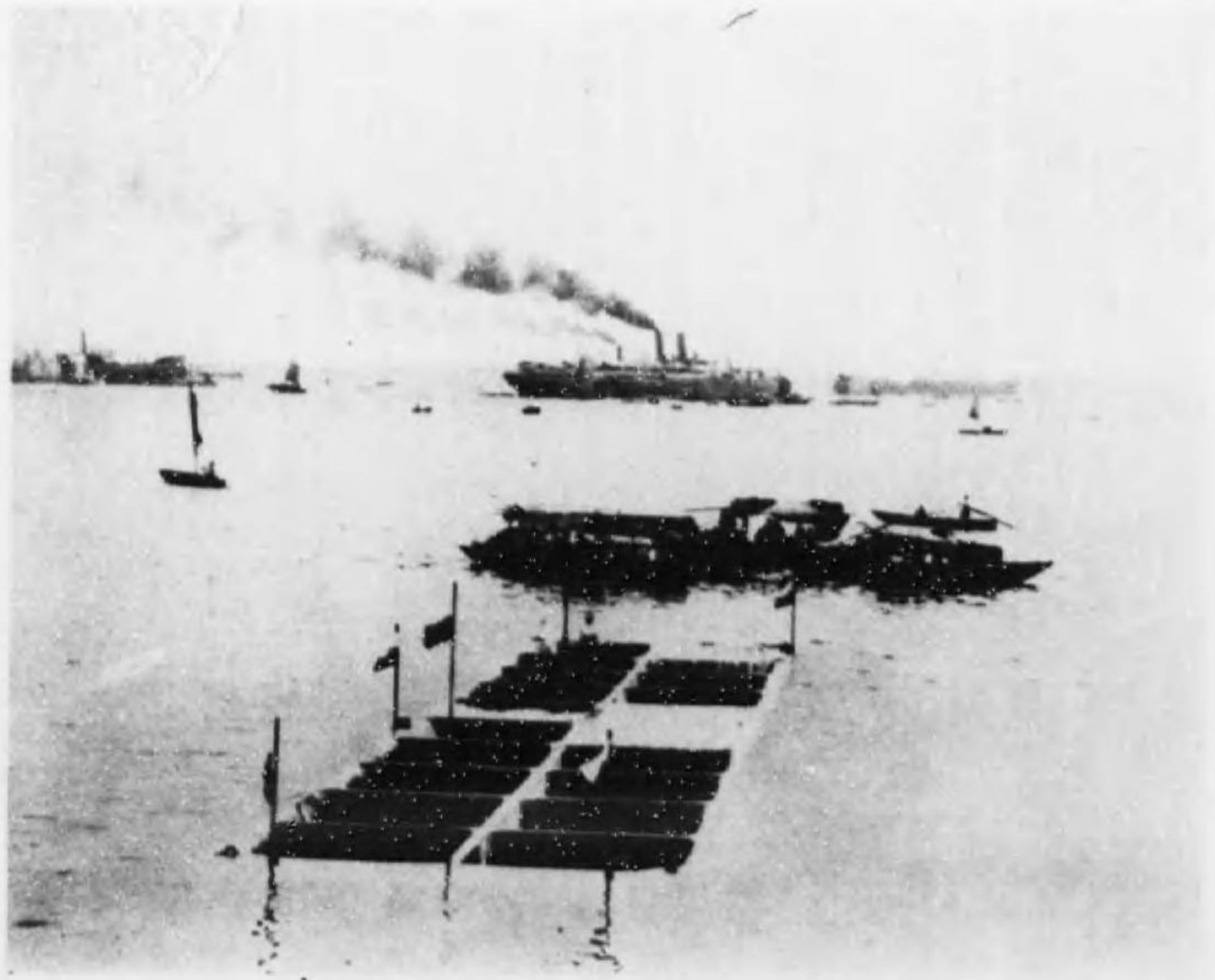
(因に明治五年の戸口は確たる統計に缺けるが故、同六年を以て之に代ふ)

し。 尙序に本市に居住する外國人員數の大正十、十一兩年分を表示すれば次の如

國籍	大正十一年 人口	大正十年 人口
英吉利	四六	四六
獨逸	一六	一六
佛蘭西	五	五
伊太利	七	七
埃國	七	七
白耳義	八	八
露亞	八	八
瑞亞	九	九
諸威	九	九
西班	九	九
葡牙	九	九
和蘭	九	九
瑞典	九	九
計	四六二	四七六
希羅	一	一
丁抹	三	三
支那	三、二三四	三、二九五
印度	一七	一五八
比律	六	二〇
波新	九	二〇
米國	二六	二六〇
濠洲	九	二二
加奈	三	八
墨西	一	三
其他	二五	二五



函土凝混筋鐵の中航曳へ場現



函土凝混筋鐵るたし置沈に置位定所

突堤を築造せんとする鐵筋凝土函



第一突堤築造前と築造後

(す示な點基其は旗) 地立埋の時當工起年十四治明



況狀の陸離堤突一第丸日春



築造中の防波堤

業作置沈の函土凝混筋鐵用造築堤波防



堤波防東の中造築

築港利用の光景



第四突頭部に於ける積荷の状況



東京橋南寄の揚場利用

第三章 神戸港の現況

第一節 築港

第一款 第一期修築工事既成設備

明治初年に於ける神戸港は、風災屢々起り、其の被害甚大にして之を未然に防
 歴し、既發に避難するの設備なく、天然の良港をして空しく風神の暴威に委する
 の状態にあり。時の港長英人ジョン・マルシャル氏之を概し、明治六年十月本港
 改修の議を兵庫縣廳に具申す、是れ本港修築計畫の嚆矢なり。即ち東は舊生田
 川東堤より、西は湊川北堤に向ひて虹形の石塘を海中に建造し、中間を以て船艦
 の碇繋地となさんとするにあり。其の經費大約三十萬弗と稱せられ、不幸にし
 て政府の容るゝ所とならず、築港の議遂に歇む。爾來年を閲すること二十有餘
 年、本港貿易の増進及び海運の發展は、逐年般盛に向ひたるも、獨り其の設備に至
 りては特に觀るべきもの尠く、依然として風難の厄屢々襲來し、爲に本市の蒙る
 損害莫大なりとす。是を以て本市は、明治二十九年五月に至りて本港修築の提

議をなし、越へて同三十三年一月其の計畫を發表し、時の市長をして政府に稟請せしむる所ありしも政府の用ふる所とならざりき。

明治三十四年政府は漸く時運に鑑みる所あり、第一、第二、第三及び小野濱各波止場に倉庫八棟、上屋十四棟、起重機九基を増設し、川崎、第四及び兵庫各波止場の設備に改善を加へ、翌三十五年には小野濱波止場に貿易工事を施し、次第に進歩の跡認むべきものなりしと雖も未以て充全の域に達せざりき。明治三十七年日露戦役の勃發するや海運界漸く多事となり、貿易の進展亦顯著にして、從來の施設に安んずる能はず。於是同三十八年曩に一度帝國議會に提出し、議會解散の厄に遭ひて、其の目的を達せざりし所謂棧橋築造案なるものを、再び帝國議會に提出して其の協賛を經、同三十九年度より六箇年の繼續事業として起工するに決せり。然も前記の計畫は、本來應急の施設として一時を糊塗せるものなれば、本港の如き東洋の要港にして、無限の發達を將來に有するものにおいて、斯る姑息なる計畫を以て甘んずべくもあらず。本市亦夙に一大修築を計畫し、本港永遠の繁榮を期せむとせり。明治三十九年九月時の阪谷藏相東神して本港修築方針を發表するや、本市は工事の速成と設備の擴張を切望し、率先して其の

工費の一部分擔を申請し、政府も遂に之に應じ、從來の一時的計畫を廢して永久的計畫に改め、取扱貨物四百萬噸標準設計を以て、一面新生田川尻に始まり元居留地先に終る海面一帯を埋立て、之を外國貿易設備に充て、他面兵庫新川沖を中心とし附近一圓を埋立て、之を沿岸貿易設備とし、内外工費合計貳千八百九拾餘萬圓を以て本港海陸運輸連絡設備を完全せん事を期せり。然るに當時政府は財政の都合により前記の計畫を一時に實施し難きの事情あり、之を分割して二期とし、其の緊要なる第一期工事より着手し、小野濱地先海面を埋立て、之に四箇の突堤を築造し、一箇年約二百十萬噸の貨物を取扱ふに適する計畫に縮少し、工費壹千七百九萬九千四百七圓(内本市分擔額四百參拾七萬圓)を第二十三回帝國議會に提出し、其の協賛を經て、明治三十九年度より同四十六年度に亘る八箇年繼續事業とし、市民翹望の築港修築問題も茲に漸く確定し宿志を達するに至れり。這般の工事は豫定の計畫に従ひ、着々實行の緒に就きしも、其の間政府は屢々財政緊縮を以て蒞みしが爲め工期の繰延工費の減額等幾多の障礙に逢著し、工事に遅延を來したること一再に止まらざりしと雖も、遂に明治三十九年度より大正十年度に至る十六箇年を以て所定の第一期工事を遂行し、大正十

一年三月滞りなく竣工す。是れ即ち現在の築港なり。其の埋立面積八萬三千坪に及び、工費壹千五百九萬餘圓と註せらる。今や其の設備を利用するに遺憾なきの時期に到達したるを以て、茲に其の主要設備の梗概を記述して一燦に供せん。

海面埋立 東は小野濱最突出部より西は元居留地前面に亘り埋立面積八萬二千九百十三坪六一、其の工量五十二萬五千四百立坪三七にして、之を突堤別により序述すれば。

突堤別	埋立面積	埋立土量
第一突堤	七、〇〇六、〇〇〇	五〇、六六五、二八〇
第二突堤	一、二二〇、〇〇〇	八九、七五三、〇〇〇
第三突堤	一〇、九七二、〇〇〇	八〇、五六六、四九〇
第四突堤	一一、四九八、〇〇〇	八五、六三四、七二〇
各突堤根元	四二、二一七、六一〇	二二八、四八四、八八〇

浚渫 浚渫區域は突堤間及び前面航路にして、其の面積三十三萬五千三百三十七坪餘、其の土量三十三萬五千餘坪とし、水深は干潮面以下三十尺乃至三十六尺とす。

繫船岸壁 總延長一千五百九十二間五四、有效延長一千三百六十二間にして同時に大小船舶十九隻を繫留し得べし。之を圖表に依れば左の如し。

位置	水深 (干潮面以下)	總延長	有效延長	繫留し得べき船舶噸數	繫留し得べき船舶數
第一突堤南部	三十六尺	一三〇・〇〇	一三〇・〇〇	一八、〇〇〇噸級	一隻
第二突堤東側南部	同	一三〇・〇〇	一三〇・〇〇	一〇、〇〇〇噸級	一隻
第一突堤北部	三十三尺	八五・〇〇	七七・〇〇	一〇、〇〇〇噸級	一隻
第二突堤東側北部及頭部	同	九六・二〇	六五・〇〇	八、〇〇〇噸級乃至三、〇〇〇噸級	一隻
第二突堤西側及頭部	三十尺	二三九・三四	一八九・〇〇	八、〇〇〇噸級乃至三、〇〇〇噸級	三隻
第三、第四突堤全部	同	九一二・〇〇	七七一・〇〇	三、〇〇〇噸級	一二隻
計		一、五九二・五四	一、三六二・〇〇		一九隻

備考 第一突堤第二突堤の間隔は九十間乃至百二十間其他の突堤間隔は八十間とす。

物揚場及埋立地護岸壁 物揚場は其の延長二百九十九間六にして、之を内譯すれば、埋立地の西北隅に延長百二十九間六、第一及び第二突堤間に延長九十間、第三及び第四突堤間に延長八十間、主として舢舨荷役に便す。又埋立地護岸壁は總長九十八間にして、第四突堤西側繫船岸壁に延長十八間、第二及び第三突堤間に八十間にして、吃水九尺前後の小蒸汽船の着離に便す。小野濱突出部に於ける第一突堤の東側及び頭部の護岸は、延長約三百八十間、其の頂點は干潮面以上十七尺とす。

陸上設備 上屋は鐵道及び木造の二種とし、鐵道上屋は十六棟一萬四千九百八十四坪七五、内第一號及び第十四號の兩上屋は、其の一部に旅客用設備を施し、木造上屋は二棟其の坪數一千五十六坪とす。左に突堤別により各上屋の坪數を摘記すれば左表の如し。

第一突堤	第二突堤	突堤別		坪數
		上屋名稱	構造	
第一號	第一號	鐵造	鐵造	一、六七〇・七五
第二號	第二號	鐵造	鐵造	一、〇九二・〇〇

計	第四突堤						第三突堤			第二突堤													
	第一號	第二號	第三號	第四號	第五號	第六號	第七號	第八號	第九號	第十號	第十一號	第十二號	第十三號	第十四號	第十五號	第十六號	第十七號	第十八號	第十九號	第二十號			
	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	木造	鐵造	鐵造	鐵造	
一六、〇四〇・七五	三、八四〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	八、四〇〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	一、一三四・〇〇	一、〇〇八・〇〇	一、一七六・〇〇	六、七二〇・〇〇	八、四〇〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	一、一七六・〇〇	八、四〇〇・〇〇	六、七二〇・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇	一、一七六・〇〇

備考 前掲中鐵道上屋坪數は十六棟一四、九八四坪七五にして水道上屋は一、〇五六坪なり。

鐵道 鐵道は鐵造上屋と繫船壁との中間に一線、上屋の背面に二線若くは三線を敷設し、埋立地中央には數條の側線を配置し、總て小野濱驛に通ずる幹線に連絡せしむ。其の總延長十一哩に餘り、之に附屬して貨車用轉車臺二十一計重臺六臺を配置す。又繫船壁全部に亘り電氣起重機を運轉すべき軌道約一哩半を有す。

道路 道路は總てマカダム式碎石道路にして、其の幅員を十二間十間八間及び七間の四種に區分し、之に幅一間半又は一間の歩道を設く、其の延長二千四百十八間とす。

橋梁 幅員經間共に六十尺の鐵橋にして、築港と市内との交通に使せむが爲にして之を京橋と稱す。

起重機 其の數二十七基、内電氣可動式にして、扛電力五噸のもの七基、一噸半のもの十四基にして、蒸氣可動式は其の數一基、扛重力一噸半なり。手働定置式に屬するものは、扛重力三十噸のもの一基、五噸のもの四基なり。以上

の起重機は鐵造、木造各上屋前面及附近に配置し、荷役に備ふ。

配電所 一棟煉瓦構造にして、其の坪數五十五坪八七、電氣變壓の裝置を有し、築港構内に電光電力を送致す。

水道 水道は繫船岸壁及び主要道路の歩道直下に敷設し、主として船舶の給水構内各種の用水及び非常事變に備ふ。

海上設備 海上設備中主要なるものを防波堤となす。内第一期工事に屬せる東防波堤は、和田岬の立標(北方の分)より東微北に走る一線上に在る南防波堤の法線を延長せる位置にあり。其の延長は幹部六百間にして、其の構造は海底に割石を以て基礎堤を造り、之に鐵筋混凝土函を据付け、函内及び函上に場所詰混凝土を施し、函側には混凝土方塊を以て根部を定着し、本堤の南北兩端延長各十六間、其の頭部に燈臺各一基を設置す。燈火は南端を紅光に北端を綠光に區別し、何れもアセチリン瓦斯を使用す。幹部及び兩端を合して其の延長六百三十二間、工事は大正元年十二月二日に始まり、同七年五月二十六日に竣功す。目下遞信省に於て點火使用せり。本防波堤の完成により偏東の風波による港内の不安は、以て遮斷せらるゝに至れり。

以上築港第一期に属する主要設備の大要を記述し了りたるが故に、更に進んで之と密接の關係を有する第二期修築擴張工事を瞥見せんとす。

第二款 第二期築港擴張工事

第一期修築工事は南防波堤及び東防波堤の一部を残して略々完成し、本港の設備觀るべきものありと雖も、歐洲の大戦は本港の内外貿易に空前の盛況を齎し、既成設備の改良及び擴張は焦眉の急にして、最早荏苒日を曠しうすべからざるものあり、本市は之が急設の必要を痛感し、政府に迫りて工事の實施を要望し、工費の分擔を申請するに至り、政府亦擴張の必要を認め、大藏省所管の許にありし前述東防波堤一部の工事施行を内務省に移管すると共に、大正八年四月工費豫算貳千九百八拾萬圓を投じて第二期築港擴張工事を起し、大正八年以降十箇年繼續事業として地域を兵神兩沿岸に求め、先づ既設第一突堤を擴張し、其の東部に外國貿易設備を施し、西方兵庫沿岸に内國貿易設備を新設し、本港内外貿易設備の完璧を期せんとするにあり。左に計畫の概要を舉示せん。

内國貿易に關する設備は從來其の觀るべきものなく、荷役の不便と貨物の損害大なるに鑑み、先づ兵庫新川沖を埋築して之に二箇の繫船壁を築造し、其の護岸の一部を物揚場に供し、更に附近一帶の沿岸を二十間内外埋立て、舢舨荷役に便すると共に、國産波止場突出部には臺灣航路の大型船を初めとし、其他沿海諸線の大小船舶の繫留及び荷役に備へんとす。其の繫船壁有効延長約五百二十間、物揚場九百三十五間にして千噸以上の汽船二十三隻を同時に維繫し得べく、埋立面積は約九萬一千六百餘坪にして兵庫沿岸地先に於て八萬一千六百坪、海岸通地先に於て一萬二千八百坪とす。防波堤は東及び南の兩堤より成り全長約二千六百八十二間とす。東防波堤の一部は既に竣功を告げたるを以て、現時工事中に屬する部分は約二千五十間なり。

外國貿易に關する設備は現在の第一突堤を増大して更に其の東方に二箇の繫船突堤を増設し、繫船壁の延長約千四百二十七間、茲に物揚場延長約八百七十七間の築造と共に、海面約七萬八百五十坪を埋立て、大小船舶の維繫荷役に備へんとす。第二波止場附近に於ける物揚場は其延長約五百三十五間、其の埋立面積一萬二千三百三十坪にして、主として舢舨荷役に便す。工費九百五拾萬圓、其の半額は本市の分擔する所にして、大正十年度以降十二箇年繼續事業とす。其の

主要設備左の如し。

上屋は鉄筋混凝土又は鐵造のもの八棟、其の坪數一萬四千七百八十七坪とし、木造に係るもの八棟、四千六百八坪にして、總計十六棟一萬九千三百九十五坪とす。之を細別すれば左表の如し。

第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	上屋名稱	構造	延坪數
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	一	鐵筋混凝土	四、四四〇
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	二	鐵筋混凝土	一、九八〇
八	七	六	五	四	三	二	一	八	六	五	四	三	同	二、七〇〇
八	七	六	五	四	三	二	一	八	六	五	四	三	同	一、二一五
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	九〇〇
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	二、五九二
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	九六〇
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	七六八
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	五三二
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	五四六
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	同	四六二
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
一九、三九五	二、〇〇〇	三〇〇												

第	第	第	計
九	十	十	一九、三九五
號	號	號	
號	號	號	
同	同	同	
木	木	木	
造	造	造	

鐵道 各突堤上に敷設せらるべき鐵道は上屋と繫船壁との中間に一線、上屋と道路との中間に一線乃至二線を布置し、突堤の後方埋立地に建造せらるべき木造上屋の背面に一線を設け、總て海陸連絡線に連絡し、運輸上の完備を期する外、繫船壁全部に亘り、上屋前面に廣軌線を敷設し、起重機の運轉に便すること既成突堤に似たり。

道路 道路は幅員五間乃至十二間とし十間以上には必要に應じ歩道を設く其の總面積二萬七十一坪とす。

起重機 起重機は高架式可動電氣起重機にして、其の數一噸半八基、五噸四基、總數十二基とし構内配電所より送電す。

以上の外構内必要の場所に照明の設備を施し、給水の便を圖り、排水其他諸般の施設を怠らす。

第三款 築港設備利用の概況

築港設備中の主要なるものに就きては、大要記述し了りたるを以て、更に之より既成設備利用の状態を説き其の實際を窺はんごす。

第一期築港工事は大正十年を以て略々竣功を告げたるが、之に先だちて、大正二年以來早くも上屋及び繫船壁の一部を一般の使用に供し、更に大正五年に至り第四突堤西側の一部を、大正六年には第一突堤第二突堤根元上の各上屋及び繫船壁を一般に開放し、漸次工事の進捗に伴ひ其の範圍を擴大したり。歐洲大戰の起るに及び本港の外國貿易は未曾有の盛況を呈し、本港に來往せる船舶は毎船貨物を満載し、官私設倉庫上屋等は最早此等を藏置收容するの餘力なく、大正五年末期に及んでは輸出入貨物の滞貨其極に達し、官設保税地域に至りては貨物道路を充塞して空地を餘さざるの状態にあり、輸出入業者並に海運業者の困難謂ふべからざるの状態なりしを以て、政府は臨時事件費拾八萬圓を支出し、大正六年一月第一及第二突堤根元埋立地に木造上屋一棟其の坪數一千五百九十六坪、第三突堤上に二棟其の坪數四千四百十坪を急設して、此等の滞貨を收容

藏置し以て幾分の緩和を見たり。一方船舶の出入するもの亦逐日繁きを加へ、繫船壁を以てしては其の需用を満すに足らず、工事の速成を希望するや愈々切なるものあり、政府も亦頻に工事を急ぎ、設備の利用を完ふせしめんことに努力したるを以て、漸次滞貨を一掃し、餘力を示すの域に達したり。今繫船壁利用の状態を實績に徴するに、本突堤中最初に維繫せし部分は、大正二年十月第四突堤東側の一部なれど、其の期間短く且試験的性質を帯びたるを以て、固より其の成績を見るべからず。今大正三年を基準として各突堤に亘り之を見るに、同年中の維繫船は百二十五隻其の登簿噸數二十九萬一千七百三十四噸にして貨物積卸總量二十六萬二千二百三十四噸なりしに、大正七年に至り四百十五隻一百六萬六千五百十六噸其の貨物積卸總量一百五十二萬七千四百八十六噸となり、大正三年に比し隻數に於て三倍三分強噸數に於て三倍六分強を増加し、貨物噸數に比すれば實に五倍八分強に激増せり。更に之を十一年に對比するに、其の隻數噸數に於て各九倍六分強、十五倍七分強、貨物噸數に於て四倍四分強の増加を示せり。斯くの如く利用能率は年々共に増進するは注目し値すと謂ふ可し。左に年別に從ひ繫船壁利用の狀況を示さん。

年次	繋船隻		繋船隻		船積	物積	卸	合計
	隻	噸	隻	噸				
自大正二年十月至同 年十二月	二六	六三、三三三	二、四八八	四、三三三	△	三、三〇八	六四、七六八	
大正三年	二五	二九、七三四	三、〇四四	八、九七七	△	二、九四三	二六、二三四	
同 四年	二六	三〇、六七八	三、七七一	一〇、四三三	△	二、九四三	三三、九四三	
同 五年	二五	三九、四七五	五、〇五五	一〇、五九七	△	二、八五七	四三、九四三	
同 六年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
同 七年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
同 八年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
同 九年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
同 十年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
同 十一年	二五	四〇、九七六	六、五九五	一〇、五九七	△	三、〇〇九	四三、九四三	
計	四、四七〇	一四、五八二	三、六二一	六、三六〇		八、九五七	三六、四七〇	

備考 一、前表中△を附したるは第三、第四突堤より假鐵道を敷設し之により私設倉庫會社構内へ搬入したる噸量なり。
二、大正七年以降は解船により繋船隻に船積卸せる噸數を含む。

上屋利用の方面より之を觀察するに、第四突堤根本なる第一物揚場背面木造

上屋は竣工と共に、明治四十四年五月より其の使用を開始したりと雖も、鐵造上屋に至りては遙に後れ、大正五年六月に入り漸く開始の運に至り、第一突堤二號上屋に一棟及第四突堤第十九號一棟とし、同六年三月には第一號上屋、同年八月第四號、第七號の二棟に及び大正七年七月以降同十年九月に至る間に、逐次第三號、第五號、第十六號、第十四號、第十號、第八號、第十一號、第十三號各上屋の使用を始む。其の間歐洲大戰に依る滯貨救済の目的を以て大正六年二月第三突堤上に木造假上屋二棟を設置し、其の急に應じたりと雖も、大正十年に至り突堤の完成と共に之を撤廢するに至れり。以上の上屋に搬出入したる貨物は、大正十年以前に於ては上屋の一部を利用したるに過ぎざるが、今試に上屋竣工に近き最近三年間に於ける出入能力を見るに、大正八年中利用せられたる上屋は、十四棟(假上屋を含む)其の坪數一萬二千八百五十六坪にして、之れに搬入せられたる貨物は四十三萬四千四百四十一噸、搬出數量は四十九萬一千八百一十一噸、同九年に於ては十三棟、八千八百八十一坪、其の搬入貨物三十五萬七千九百二十五噸、搬出四十六萬五千二百噸、同十年に至りては十六棟、一萬九百九十二坪にして、搬入貨物數量三十七萬五千五百七十八噸、搬出三十七萬四千八百五十四噸とし、其の一坪當り貨物

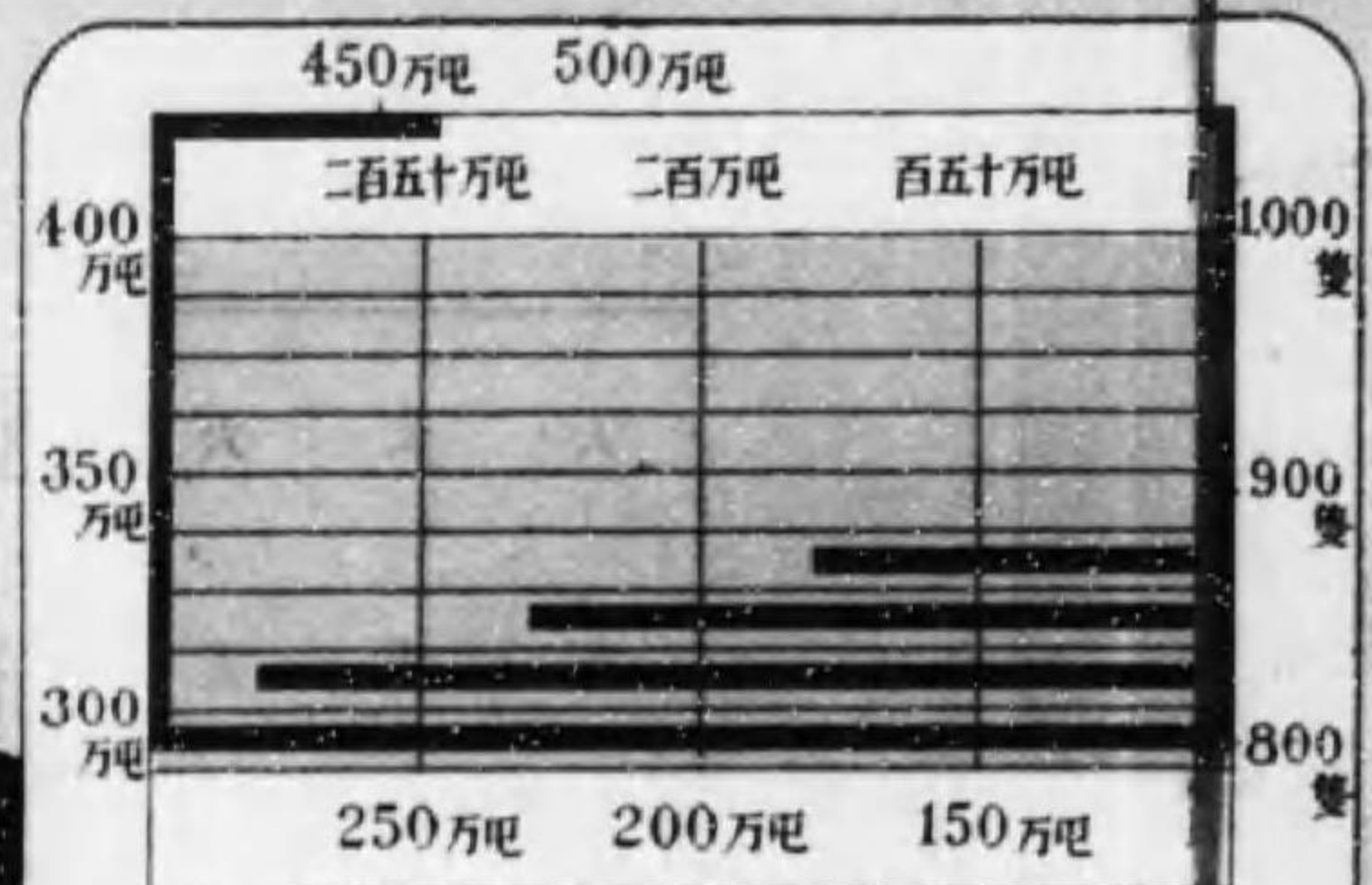
數量を對比するに左の如し。

年次搬入			年次搬出			一坪當噸數		
大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正	大正
十	九	八	十	九	八	十	九	八
年	年	年	年	年	年	年	年	年
搬	搬	搬	搬	搬	搬	搬	搬	搬
入	入	入	入	入	入	入	入	入
出	出	出	出	出	出	出	出	出
三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八	三三・八
三八・一	三八・一	三八・一	三八・一	三八・一	三八・一	三八・一	三八・一	三八・一
四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三	四〇・三
五一・八	五一・八	五一・八	五一・八	五一・八	五一・八	五一・八	五一・八	五一・八
三四・五	三四・五	三四・五	三四・五	三四・五	三四・五	三四・五	三四・五	三四・五
三四・四	三四・四	三四・四	三四・四	三四・四	三四・四	三四・四	三四・四	三四・四

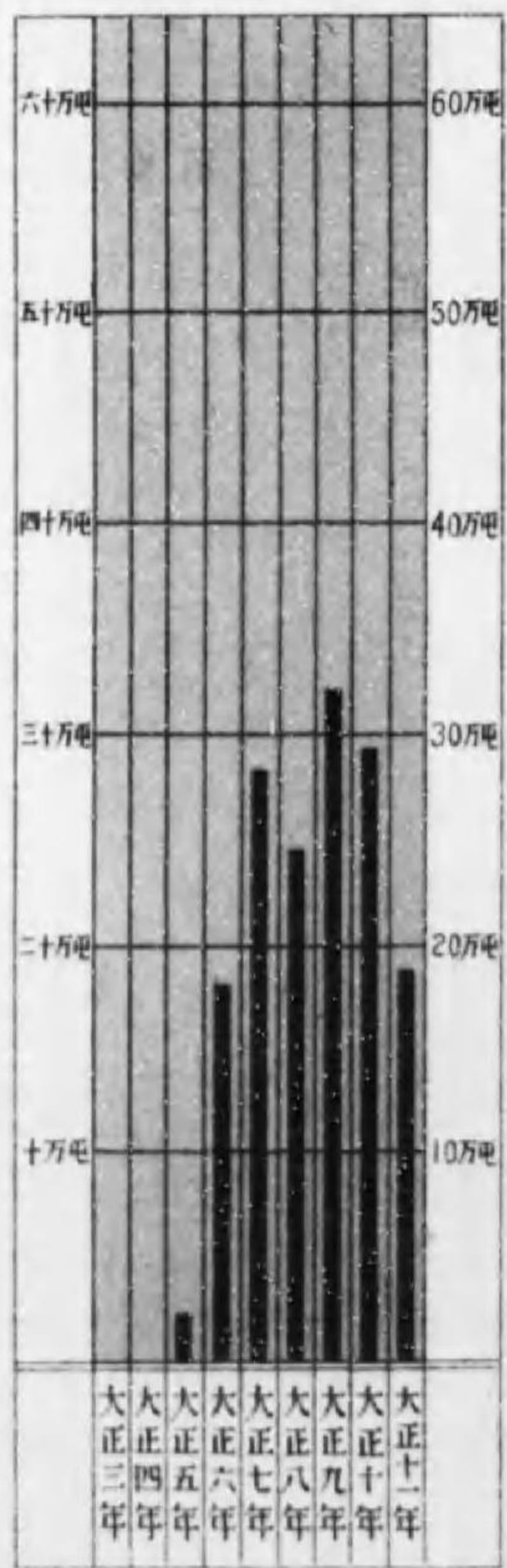
第二節 運河

第一款 沿革

運河開鑿事業は其の端を明治初年新川開鑿に發し、爾來二十有餘年懸案の儘進捗を見ざりしが、明治二十七年二月兵庫運河株式會社の設立を見、同二十九年一月即ち許可後約二ヶ年間に經て漸く工を起し、三十二年十二月竣成せり。其の間設計の變更、或は日清戰後に於ける財界の變動等に遭ひ會社資金も數度の

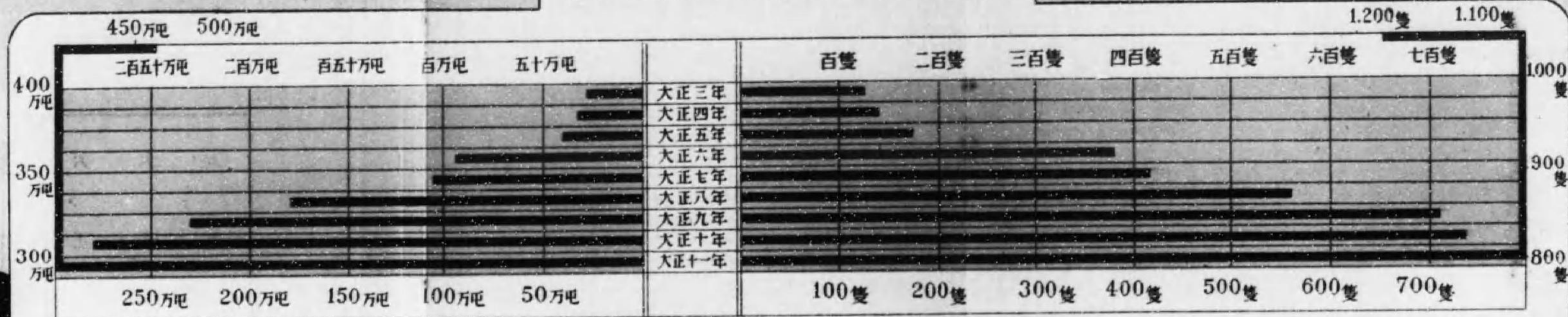


第一突堤

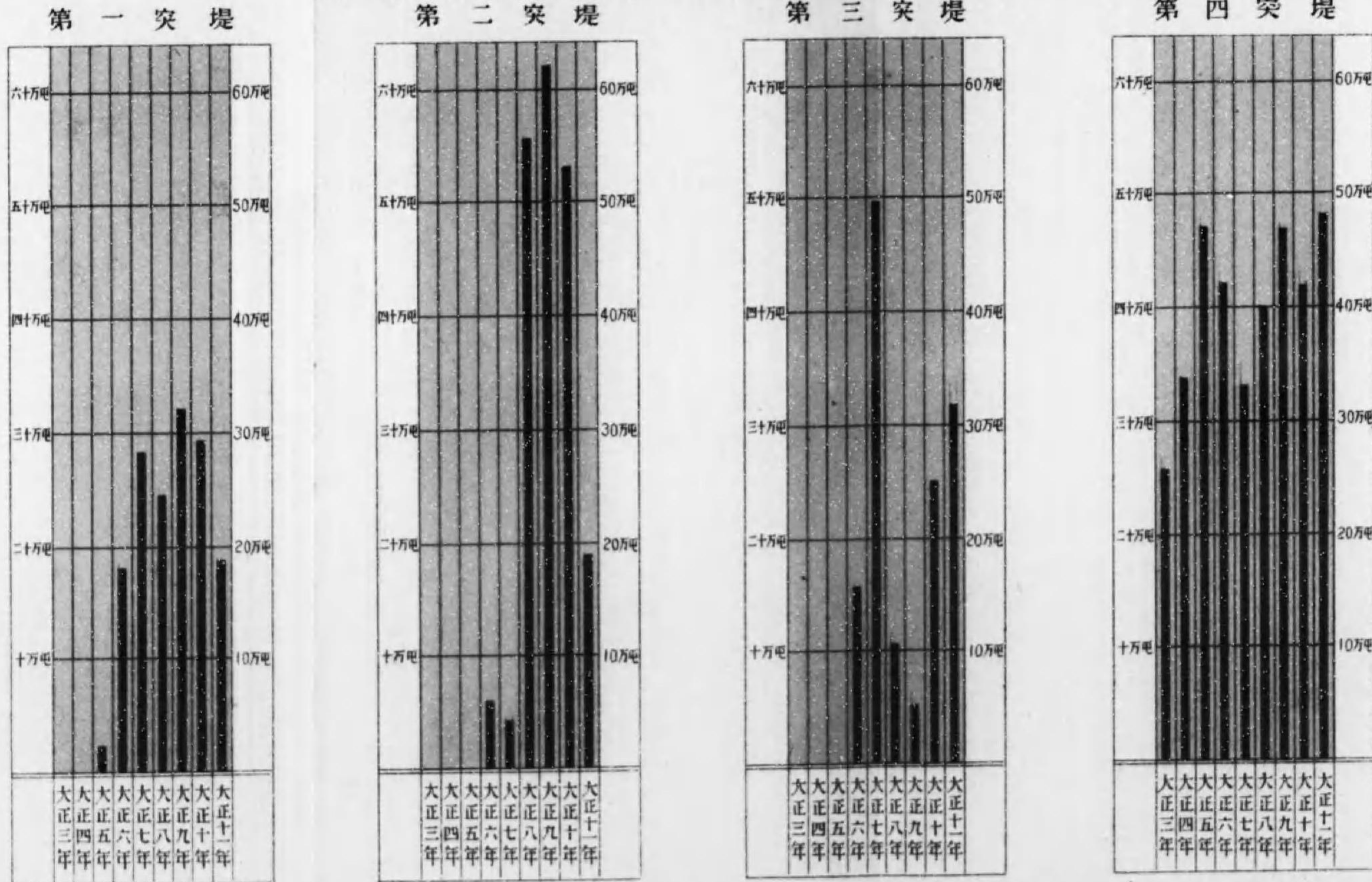


神戸港突堤利用表

繫船壁繫留船舶噸數及隻數比較



突堤別荷役噸量比較表



進接を見せしめしが明治二十七年二月兵庫運河株式会社の設立を見同二十九年一月即ち許可後約二ヶ年間に於ける財界の變動等に遭ひ會社資金も數度の

増額を爲して、竣功當時に於ては七拾萬圓となり、工事費の如きも六拾萬參千餘圓を要せしと云ふ。

右經營會社の收入は運河沿岸所有地の賃料、並に舟筏の通航料を以て之に宛てたるが、其の後沿岸地を賣却したる爲、缺損打ち續きて收支相償はず、従つて其の浸漉も等閑に附せられ、一般利用者の不便甚しく、之が爲大正四年以來沿岸商工業者等によりて、施設改善の聲を聞くに至り、苟も斯の如き公益事業は、一私營會社の經營に委すべきものに非ず、宜しく國家若くは公共團體の經營に移し、以て其の効用を益々増大せしむべきものとし、當時早くも公營論を唱ふるもの漸く多し。其の後本市に於ても之れが市營に關し調査を重ね、大正六年九月愈々兵庫運河買収案を作製して、爾來殆んど二ヶ年會社と攝衝し、遂に同八年十二月六拾萬圓を以て其の權利一切を買收し、翌年四月内務大臣の許可を得たり。茲に於て市は大正九年度より運河事業を直營し、同年十一月曩に申請中の運河營理條例並に同使用料條例の認可を得以て今日に至れり。

第二款 設備と其利用

運河の位置は大正九年四月五日附内務大臣の命令書第一條に明記せらる。即ち左の如し。

「第一條 運河の位置は、兵庫縣神戸市東尻池村海岸より同市兵庫南逆瀬川町字新川に至る間、竝に神戸市東尻池町六丁目より分岐し、同市條ヶ香町官設鐵道兵庫停車場附近に至る間とす」

右命令書に依りて明かなるが如く、本線は其の延長一千三十五間五分にして河幅二十一間乃至三十間を保ち、支線は延長四百間にして河幅八間乃至十六間を有す。水深は本線中央部航路平均干潮面六尺なるも支線平均五尺とす。而して此の總水面積實に四萬二千四百三十八坪七合九勺なり。

其の他運河には廻旋橋四、浮橋一あり、これ等は皆晝夜橋番人を置き、水陸交通上一般の利便を計る。右の外鐵道廻旋橋一、固定橋四あり。

惟ふに運河開鑿以來之れを利用する商工業者は、年と共に著しく増加し、沿岸一帯の地は當市に於ける商工業區として嚴然其の域を畫するに至れり。今沿岸發展の狀況を擧げんに、製造工場には川崎造船所兵庫工場、鐘ヶ淵紡績兵庫工場、長田商店竹工場を始めとし、製糖業には臺灣製糖、帝國製糖の兩工場あり、製粉

事業には日本製粉、増田製粉、日清製粉の各工場、製肥業には井上豆粕工場、木栓製肥所あり、其の他横濱魚油、奥田、吉金等の各魚油工場あり、倉庫業には川西倉庫、鈴鹿倉庫を始め大日本鹽業倉庫、鈴木商店魚油倉庫等あり。而して木材の置場としては市内唯一の場所たるを以て、其兩岸の空地は木材充塞するの盛況を呈し、宮下木材、北海林業、神戸木材を始め、大小の製材工場多く、今や關西に於ける木材の一大集散地たり。尙青物市場の設置あるを以て、當市民に供給せらるゝ野菜類は大半一旦此の關門を通過するの狀況なり。又陸送には新川驛の設けありて貨物の輸送隆盛を極め、沿岸一帯は常に船舶の輻輳せるを見る。以上の如く今日沿岸大小各製造工場に吞吐する貨物は、何れも船舶を使用せるを以て、河中は常に此等の船舶竝に入河木材を以て充塞せられ、頗る狹隘を感ずるの狀況にして、以て如何に運河開拓事業が當地方の發展に貢獻せるかを察知すべし。

第三款 市營後の概況

一設備費及其の財源 大正八年十二月本市が會社の權利一切を買收せる六拾萬圓は、其の中參拾萬圓を現金にて残り參拾萬圓を六分利付運河事業公債に

て交付せり。而して事業公債の償還は神戸市運河公債條例に依り、大正八、九、十の三ヶ年は之れを据置き、十一年より二十七年に至る十七ヶ年間に元資の償還を行はんとするにあり。又運河事業は本市一般會計に屬するも、元資並に利子の償還財源は主として運河収入を以て之に當つ。

二、事業の收支 大正八年十二月運河買収より翌年三月に至る四ヶ月間は、一ヶ月貳千四百圓也にて個人に料金徴収方を請負はしめしが、九年四月より市直營を始め。當時大戰後に於ける財界の變動及使用料條例の認可延引に依り、収入に多大の減收を來したるも、尙七萬壹千三百拾餘圓を得たり。翌十年度に於ては使用料條例の改正、並に所謂中間景氣の爲收入著しく増加し、拾萬壹千四百餘圓に達したるも、十一年度に於ては依然財界不況の爲、收入減少の狀態を續け、漸く八萬四千參百八拾餘圓を得たり。支出に關しては大正九、十年年度迄は、元資の償却を爲さざりし爲め、支出は公債の利子並に事務費に限られ、一ヶ年凡そ六萬圓内外を要せしも、十一年は元資の償還を行ひたるを以て八萬六千餘圓を要せり。今之が收支計算表を示せば左の如し。

運河事業收支表

種別	大正八年度		大正九年度		大正十年度		大正十一年度		計
	入	出	入	出	入	出	入	出	
護岸使用料	—	—	—	—	—	—	—	—	—
船舶賃入津料	—	—	—	—	—	—	—	—	—
筏延滞料	—	—	—	—	—	—	—	—	—
箱嶋島使用料	—	—	—	—	—	—	—	—	—
雑收入	14,355,000	—	7,312,900	—	101,400,000	—	8,668,810	—	121,758,300
計	14,355,000	—	7,312,900	—	101,400,000	—	8,668,810	—	121,758,300
運河事業公債元資償還金	—	30,330,700	—	34,670,300	—	33,100,000	—	33,100,000	33,100,000
同上利子	—	3,441,400	—	3,173,100	—	3,767,000	—	3,767,000	100,577,900
事務費	—	6,666,300	—	6,779,300	—	8,608,300	—	8,608,300	89,863,800
計	—	40,438,400	—	44,622,700	—	45,475,300	—	45,475,300	131,447,800
差引計	14,355,000	40,438,400	7,312,900	44,622,700	101,400,000	45,475,300	8,668,810	45,475,300	60,286,800

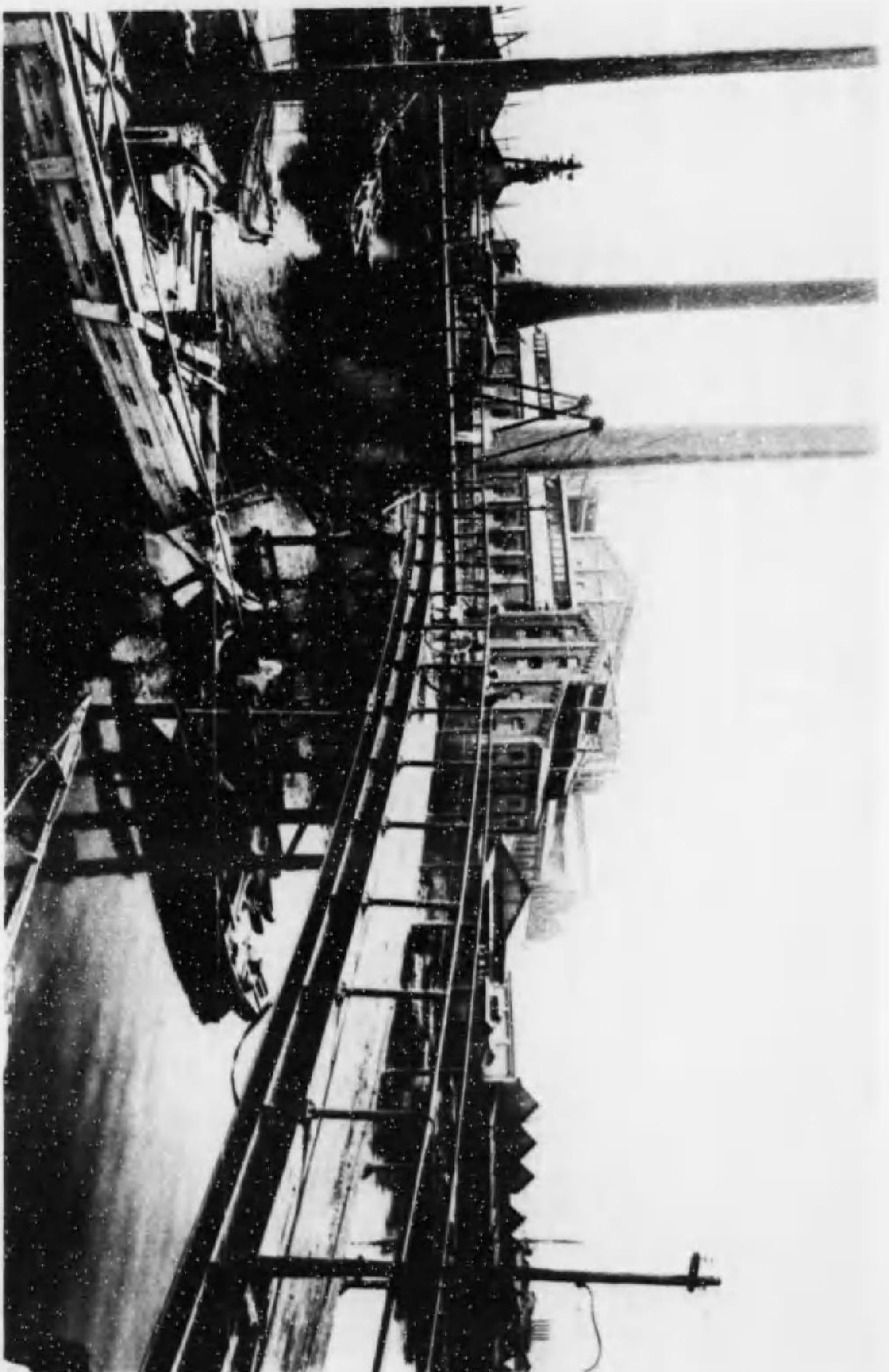
備考 大正八年度は四ヶ月間 △印ハ減

三、事業の効果並に維持費

イ、本事業が私營會社の經營より、本市の直營に移りたると同時に、從來放任せられたる運河内の秩序の維持に努め、一面施設の改善に留意し、經費を投じ

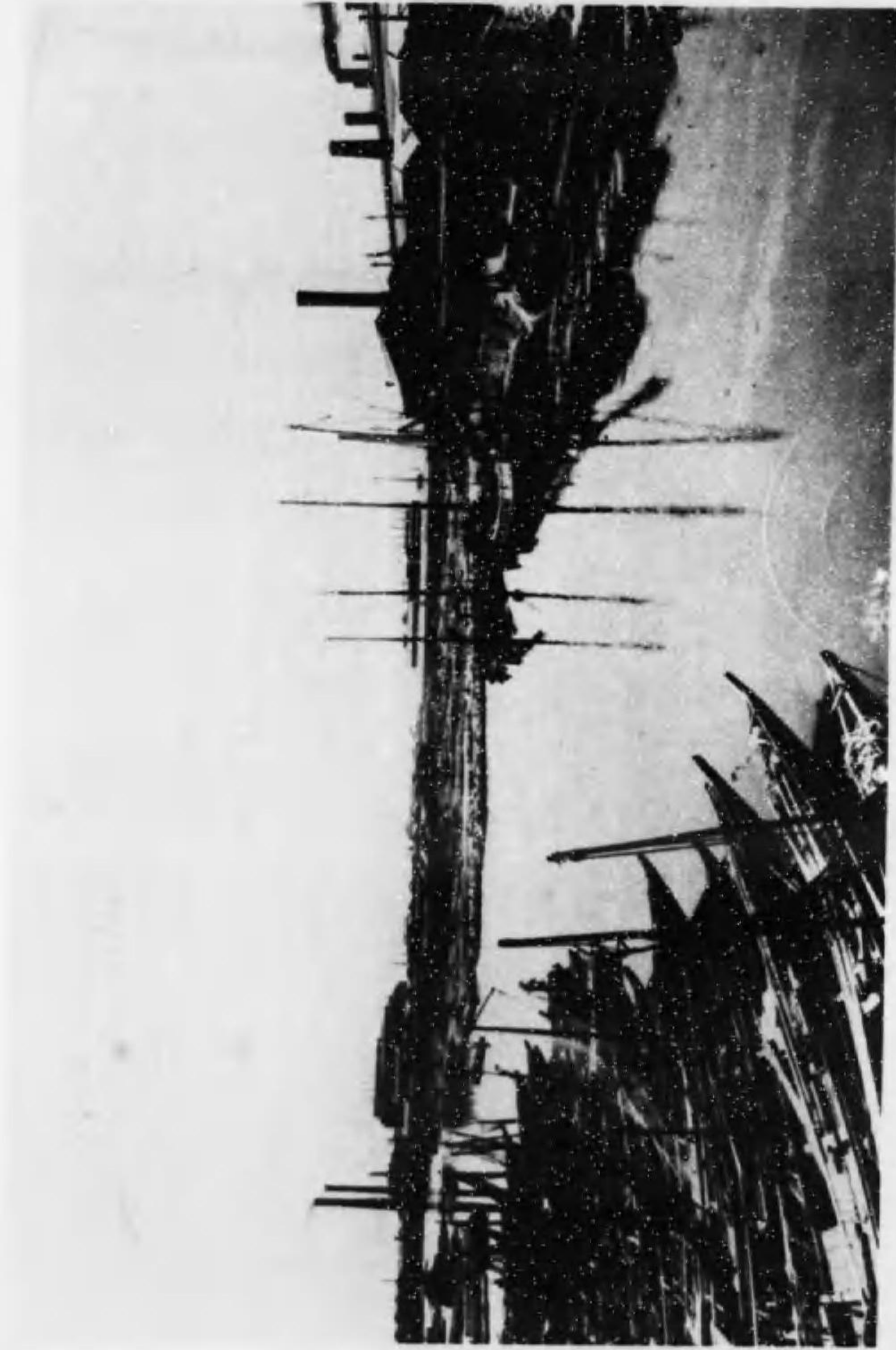
て橋梁の修繕河底の浚渫等を行ひたる爲其の効用増大し、一般利用者の利便を計ること頗る大にして、會社經營時代に比し面目一新せるの觀あり。

□ 運河の經營維持費は將來一ケ年凡そ八萬五千圓を要すべく、之が收入に關しては、近く新川廻轉橋の固定橋となるが爲有橋船の入津不能となり一見收入減少の懸念無きに非らざるも、兵庫築港の完成後は、内國貿易の中心地となり、商工業益と發展すべく、従つて現在に於ける有橋船は無橋船と變りて、依然入津旺盛なるべきを以て、收入寧ろ増加すと認められ、將來元資償還後に於ては相當の財源たらん乎。



運河第一廻轉橋附近

運河中ノ島附近に於ける舟筏の輻湊



第四章 船 舶

第一節 出入船舶の消長

往古漢として史實の徴すべきものなきも、本港に於ける海上の交通は平相國清盛此の地に卜居せし以來、久しきに亘りて行はれたること疑を容れず。平氏倒壊し源氏勃興し、次で兵亂相繼ぎ、其の間の消息之を知るに由なきも、近世紀に入り豊太閤大阪に築城するに及び、諸國廻送の船舶此の地に輻輳し、所謂兵庫の津之が碇繋地たり。次で徳川時代の末期、兵庫開港のことあるや、内外船舶漸次増加し、日清、日露兩戰役を経て愈々隆盛に赴き、更に今次歐洲戰亂の餘惠を受けて本港海運界は隆昌の極に達し、従て内外船舶の出入するもの激増し、海上の販空前と稱せられしが、戦後の海運界は一轉して萎靡振はず、其の盛時を夢想すること能はずと雖も、挽回の期蓋し近きにあらむ乎。

之を沿海通航船に就き賑ふるに、隣港大阪との海上往來は既に豊公居城以後頻繁の度を増し、本港と沿岸諸國との間亦然りしが如し。徳川時代に入り正保

年間攝津國傳法村の商人駿河より廻船を試備して之を大阪に回航し、貨物を積載して江戸に下りたること數回、其の航海の恙なきと海運の利便とを悟り、兵庫の商人貨物を運漕するの早船を開始す、兵庫江戸間船舶の來往是を以て始まる。爾來本港と江戸間との往復は菱垣廻船又は樽廻船と稱する和船により、直接に或は大阪港を介して行はれ、本港以西にありては中國沿岸より下關に及び、七十石積の小船の同地方より出入するもの亦尠からず、天保年間に至りては五百石乃至千二、三百石積和船の北國より入津するものも毎年百五、六十隻に上り、此等北國船と菱垣廻船樽廻船等同時に入港輻輳する時は、兵庫の津は帆橋林立海上を覆ひ一偉觀を呈せしと謂ふ。斯くて次第に沿岸諸國との交通開け、船舶の出入愈々繁く、紀州、赤穂、尾州、遠州地方より米、鹽、木材等を積載して本港に出入するに至り、徳川末期に及びては遠く北海道に達す。船舶の出入増加に伴ひ從來の船型にも次第に變化を來し、明治初年頃には西洋型帆船、小蒸汽船を見るに至り、一方本港と横濱港との航路を開始するもの興り、次で汽船會社の創立となり、定期船の運航となり、航路の擴張となり、明治十八年以後本港と四國、九州及中國沿岸との交通愈々繁きを加へ、日清戰役によりて更に助長せられ、日露戰役を経

て歐洲大戰となり、沿海通航船舶の出入彌増し以て今日に至れり。以上に依り本港を中心として船舶出入の消長を考察するに、本港と沿海諸國との交通は主として海上によるの外途なきもの多く、貨物の如きも亦大部分日常必需品に限定せられしが故に、其の財界の順逆に累せらるゝこと鮮く、彼の外航船舶に於けるが如き激變を見ざるを特長とす。

外國貿易船の出入狀況を仔細に觀察し、其の盛衰を審かにせんと欲せば、勢ひ我海運貿易界の趨勢に言及して兩者との關係を探究せざるべからざるも、斯くの如きは敢へて本節の目的とする所にあらざるのみならず、随つて記述すれば随つて多岐に分るゝの虞あるを以て、今茲には極めて簡明に之を叙述するに止めんとす。抑々外國貿易船の出入は本港開港以後の事にして、交易の目的を以て入港せしは、慶應三年十二月三十日獨逸商船ハヨ一號を以て魁となす。次で明治元年十月九日獨逸帆船イリス號漢保より入港す、是れ本港入港の第二船なり。同年同月英國帆船ブレイブ號製茶を滿載して紐育に向け出港す、是れ本港出港の最初なり。斯くの如く本港出入外國貿易船は、獨英船により先鞭を著けられ、外國品の如きは多く横濱長崎兩港の商人の介在によりて授受せられ、從つ

て船舶の出入の如きも稀にして、僅に蘭人ア德里アンによりフキロン號を以て一ヶ月二回の航海を爲したるに過ぎず。明治三年横濱、神戸、長崎、上海間の定期航路を始むるものあり、爾來外國貿易船の出入稍増加したりと雖も、今を以て當時を推すに、固より謂ふに足るものなく、明治十九年日本郵船會社の手により太平洋航路を開始し、次で仁川、芝罘、天津航路、同二十二年上海、南北鮮、浦塩に擴張し、更にニューカレドニア線、孟買線に及び、本港船舶の出入多きを加へ、大阪商船會社亦頻に航路の開拓に努め、社外船舶と相俟ちて是等船舶の來往漸く昌なり。明治二十七八年戰役によりて我國威中外に張り、海外の發展、航路の増大に伴ひ、本港海運界の進展著しきものあり。明治三十一年財界不況の餘波を蒙りて海運亦振はず、同三十三年北清事變起りて幾分回復の徵あり、船舶の出入年と共に増加するに至り、日露戰役を終へて、世界曠古の大戦となり、海運界の盛況前古比なく、船舶の出入亦旺盛にして本港之が中樞たり。而も戰後貿易一轉して沈滯するや、海運界も萎靡振はず、繫船續出漸く調落の感あり。此の虚に乗じ外國船の入港するもの其の數を増し、大正十一年に至りては内國船に迫らんとするの狀態となり、殊に大型旅客船の入港多く、從て噸數の増大するは當然にして怪し

むに足らざらんも、一面この事實が我船舶界を威嚇するや切なるものあり。從て其の結果にや、本年に於ける内外船舶出入隻數は、從來嘗て見ざるの優勢を現はし、其の噸數に至りても最盛時を凌駕し、既往に於て比儔を見ず、蓋近年の盛事なりと謂ふべし。

第二節 船舶の航路

船舶の航路は内外貿易と密接の關係を有し、其の開拓と擴張とは貿易の伸張を指示し、其廢止と縮少とは貿易の衰退を意味すべきを以て、此の兩者の關係に就きては深甚の注意を拂はざるべからず。本港を起點、終點或は寄港地とする内外航路は其の數極めて多く、殊に外國航路の如き歐洲戰亂終熄後船腹増加の結果、各汽船會社に於て争つて不定期航路を開始し、貨物積卸の關係により之が起點、終點、寄港地等も一定せざるの狀況を呈し、確然たる航路を記し難きもの尠からず。故に本節に於て内國航路に就きては主要定期航路、臺灣總督府及び樺太廳命令航路を揚げ、外國航路に就きては遞信省命令航路に屬する分のみに止め、其の他の航路に付きては之を除けり。

第一款 内國航路

内國航路は最近貨物の集散敏活なると、旅客の交通頻繁なることにより、船舶の往來織るが如く、各汽船會社は旅客及び物資の需給關係に由りて各航路を定め一定せざるまでも定期航路として、本港を起點終點又は寄港地とせる主要なるものを列記すれば左表の如し。

航路	起點	終點	寄港地	航海度數	船主
神戸基隆線	神戸	基隆	門司	月六回	日本郵船株式會社
横濱高雄線	横濱	高雄	大阪、神戸、門司、基隆、安平	月三回	同
神戸釧路線	神戸	釧路	大阪、横濱、芝浦、函館	同	同
神戶太線	同	同	大阪、横濱、函館、小樽、大泊	月二回	同
大阪清津線	大阪	清津	神戸、宇品、門司、釜山、元山、城津	月三回	大阪商船株式會社
大阪仁川線	同	仁川	神戸、門司、釜山、木浦、群山	月約三回	同
神戸基隆線	神戸	基隆	門司	月六回	同
横濱高雄線	横濱	高雄	神戸、宇品、門司、長崎、基隆、馬公	同	同
大阪沖繩線	大阪	那霸	神戸、油津、名瀬	月十回	同
大阪鹿兒島線	同	鹿兒島	神戸、高濱、土々呂、内海、油津、波見	每奇數日	同

大阪高知線	同	高知	神戸	隔日一回	同
大阪四國線	同	宿毛	神戸、多度津、今治、高濱、長濱、川ノ口、八幡濱、吉田、宇和島、深浦	隔日一回	同
大阪門司線	同	門司	神戸、高松、阪出、今治、北條、高濱、郡中	隔日一回	同
大阪山陽線	同	關門	神戸、阪手、高松、多度津、瓶、尾之道、糸崎、忠海、竹原、廣、阿賀、音戸、吳、宇品、宮島、岩國、久賀、柳井津、室津、三田尻、新川	隔日一回	同
大阪別府線	同	別府	神戸、高松、高濱	隔日一回	同
大阪細島線	同	細島	神戸、高松、多度津、今治、高濱、長濱、守江、別府、大分、佐賀關、白杵、佐伯、蒲江、古江、土々呂	隔日一回	同
大阪名古屋線	同	名古屋	兵庫、和歌浦、箕島、湯淺、御坊、印南、南部、田邊、四日市、津本、古座、勝浦、木本、二木島、九鬼、尾鷲、長島、波切、島羽、津、四日市	隔日一回	同
大阪甲浦線	同	甲浦	兵津、由良、沼島、福良、撫養、徳島、小松島、橋、椿泊、阿部、由岐、日和佐、牟岐、淡川、瓶浦、尖岬	隔日一回	攝津汽船株式會社

備考 前表所掲の寄港地は往航線によりたり。復航必ずしも同一ならざらんも甚しき相違なきを以て之を記載せず。

第二款 外國航路

歐洲航路 倫敦線

本航路は日本郵船株式會社受命、十一隻を以て毎二週一回の發航に係り、横

神戸港大觀

濱を基點とし倫敦に終る、其の寄航地次の如し。神戸、門司、上海、香港、新嘉坡、マラッカ、彼南、古倫母、蘇西、坡西士、馬耳塞。

北米航路 シヤトル線

本航路は日本郵船株式會社の命令航路にして、三週二回四隻を以て之に充つ、神戸を起點とし、シヤトル港を終點とす。四日市、名古屋、清水、横濱、ビクトリヤ、晚香坡等之が寄港地たり。

同 桑港線

本航路は東洋汽船株式會社の命令航路にして、四週一回五隻を以て之に就航し、横濱を起點とし、桑港を終點とす。香港、上海、長崎、神戸、ホノルルは其の寄航地なり。

南米航路 東廻線

本航路は大坂商船株式會社所屬船就航し、一ヶ年十回六隻を以て之に充つ、神戸を基點とし、南米グエノスアイレスを終點とす。其の寄港地次の如し。四日市、横濱、長崎、香港、新嘉坡、西貢、古倫母、ダーバン、ケープタウン、リオデジャネイロ、サントス。

同 西廻線

東洋汽船會社之に従事す、毎月一回四隻を以て就航す。横濱を起點とし、バルライソを終點とす。香港、上海、長崎、神戸、ホノルル、ヒロ、桑港、ロスアンゼルス、マンザニコ、バルボア、カラオ、モレンド、アリカ、イタイツクを寄港地とす。

濠洲航路 メルボルン線

日本郵船會社之に就航す、毎月一回三隻を以て發航し、横濱を起點とし、メルボルンを終點とす。四日市、神戸、長崎、香港、馬尼刺、サンボア、ガ、木曜島、タウンスヴィル、ブリスベーン、シドニーに寄港す。

支那航路

本航路は細別して五線とす。大阪上海線、横濱上海線、神戸天津線、神戸牛莊線是なり。日本郵船會社に屬す。

大阪上海線

毎週二回四隻を以て就航す、大阪を起點とし、上海を終點とす。神戸門司は其の寄航地なり。

横濱上海線

神戸港大製

毎週一回使用船舶三隻横濱を起點とし、上海を終點とす。寄航地を神戸、長崎とす。本線は復航に於て名古屋或は四日市に寄港す。

神戸天津線

毎五日一回三隻を以て就航す、其の起點は大阪にして終點を天津とす。本線は冬季白河結氷の爲め、毎年十一月末より翌年二月中旬迄休航す。寄航地は神戸、門司とす。

神戸牛莊線

毎十八日一回一隻を就航せしむ、大阪を起點とし、牛莊を終點とす。神戸、門司、大連を寄航地とす、本航路も亦冬季遼河結氷期に至り休航す。

横濱牛莊線

毎月三回三隻を以て就航す、本線往航に於て神戸に寄港せざるも復航に於て寄港す、横濱を起點とし、牛莊を終點とす。北清線は凡て冬季結氷に遭ひ之が爲め休航する航路多きは前述の如し、本線亦然り。

大連線

大阪商船會社之に就航す、毎週二回四隻を以て之に充つ、大阪を基點とし大

連を終點とす。神戸、門司を寄港地とす。

南洋航路

南洋汽船株式會社の命令航路にして、毎二ヶ月三回四隻を以て之に充つ、神戸を起點とし、スラバヤを終點とす。寄航地は門司、香港、バタビヤ、チェリボン、サマランなり。

大阪商船會社に屬するものは三週一回三隻を以て就航し、大阪を起點とし、神戸、門司、基隆、高雄、馬尼刺、サンダカン、タワオ、バタビヤ、サマラン、スラバヤに至る。

第三節 沿海通航船の觀察

大正十一年本港に出入せし内航船は二萬六千一百八十三隻にして、其の登簿噸數一千一百三十九萬一千四百六十七噸なり。内入港に係るものは其の隻數一萬三千一百六、其の登簿噸數五百七十三萬一千三百三十七噸、出港に屬するものは一萬三千七十七隻、其の登簿噸數五百六十六萬一千三百三十噸にして、之を前年に比すれば出入隻數に於て五百二十四隻、噸數に於て一百六十九萬五千八百三

十六噸の増加を示せり。是れ前年に比し貨物需給量の増大によること勿論なり。之を統計に徴するに、本港に於ける沿海通行船の著しき増加を示せるは、明治二十年以後にして漸次増進し、明治二十九年に至り一段の發展をなせり。茲に遺憾とすべきは沿海通航船に在りては、其の統計杜撰にして正確を期し難きの點にあり。殊に大正以前に於ける狀況を知るの記録に乏しく、其の之あるも概して信を措き難きを以て、既往十一ヶ年間の計數に従ひ、本港出入船舶最近の概況を知るに止めんとす。

年次	入		出		計
	隻數	登簿噸數	隻數	登簿噸數	
大正元年	二,三三三	四,八三三,二二七	二,一四九	五,〇五三,三〇一	三三,三七一
二年	二,六九八	四,九二一,三六三	二,八五九	五,三三六,二三四	九,九六六,四三八
三年	二,〇三三	五,二九〇,二九九	二,三三二	五,六四〇,七四七	一〇,一三七,五〇七
四年	二,一六一	五,〇九三,一七七	二,一七四	五,三九二,八二九	一〇,九三二,〇四六
五年	三,三〇四	四,九六六,五五一	三,三三九	五,一八五,六二六	一〇,四六六,〇〇六
六年	三,〇二六	四,二七二,四八九	三,一四四	四,五三七,六二七	一〇,一四三,一六七
七年	三,〇〇三	四,一九七,一九五	二,九八六	四,一九八,四六一	八,八二〇,一〇六
八年	二,四五一	五,五七五,三三二	二,四三三	五,四〇二,七六六	八,三九三,六五六
同					二九,〇七三
同					一〇,九七八,〇九八

年次	入	出	計
同	二,四二六	四,三三七,五八六	三三,八〇五
同	三,八四〇	四,八七七,〇三三	八,五二〇,六一九
同	三,一〇六	五,七三二,一三七	九,六九六,六三三
同			二六,一八三
同			一一,三九一,四六七

前表所掲の數字は登簿噸數二十噸以上の汽船、帆船を包含するものなれど、二十噸に満たざる船舶にして、沿岸貿易の爲め出入せるもの鮮からず。故に實際に於ける本港出入の沿海通航船は前掲の計數に幾何かの加算を要すべきは勿論なり。由是觀之大正元年以降本港出入船舶は、年により多少の例外ありと雖も、累進の跡あるは蔽ふべからず。今大正元年を基準とし、毎五年に於ける増減の關係を一瞥せん。

年次	割合	
	出入隻數の割合	出入噸數の割合
大正元年	一、〇〇	一、〇〇
同	一、一四	一、〇一
同	一、一〇	〇、九八
同	一、一一	一、一五

即ち沿海通航船にありては其の割合に甚しき増減なく、漸進の形跡あるに見

るも、本年以後に於ける出入の消息は之を想見し得べし。

第四節 外國貿易船の觀察

第一款 最近の外國貿易船

大正十年海運界不振の後を受けたる同十一年は、船舶噸數上に異常なる現象を呈して未曾有の増加を示せり。之を入港に就て見るに其の隻數三千一百九十四隻一千一萬六千七百二噸にして、出港に於ては三千六十九隻九百七十萬九千五百三十二噸なり。即ち出入總數は六千二百六十三隻一千九百八十二萬六千二百三十三噸の大數に上れり。前年に比較すれば、入港に於て三百九隻、一百九十八萬四千一百八十三噸を増し、出港に於て三百四隻、一百八十四萬四百十噸を超え、出入總數に於て六百十三隻三百八十二萬四千五百九十一噸の増超なり。即ち出入隻數は一倍一分強、噸數は一倍二分強に當り之を海運界の極盛期とも稱すべき大正五年乃至八年に比するも、尙且噸數に於て之を凌駕するの狀態なり。試みに左に掲げん。

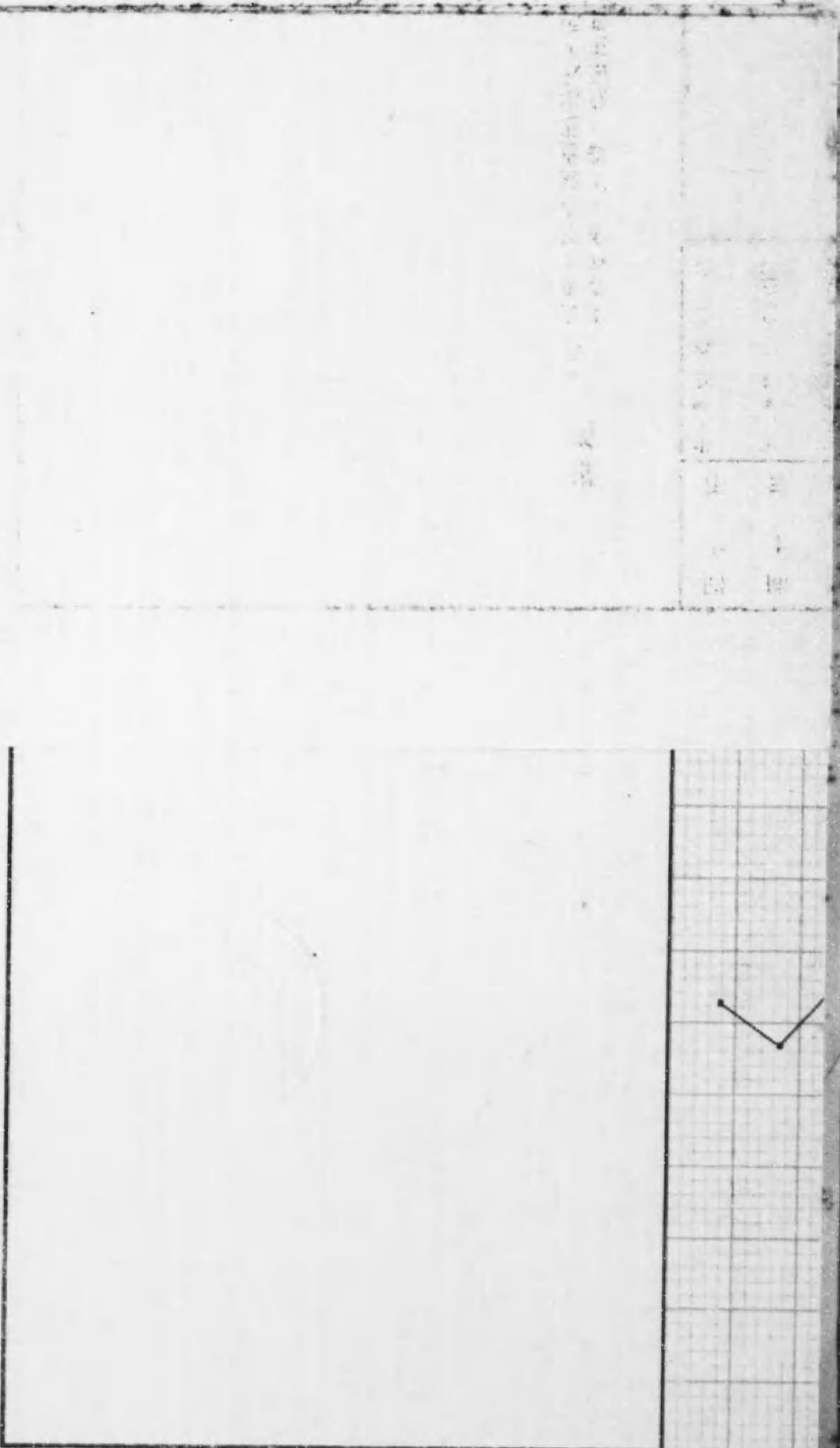
年次	入港隻數	同噸數
大正五年	二、六一一	五、八一七、八三二
同 六年	二、五六三	五、四二五、四五七
同 七年	二、七七六	五、一〇四、一四〇
同 八年	三、四一九	六、六五八、三一三
同 十一年	三、一九四	一〇、一一六、七〇二

斯る増加の主圖は、大正十年以來我海運界の沈衰に乗じ、英米佛獨諸國の大船巨舶相踵で入港したるも、本港に於ける輸出入貨物の増進に依るものと解せざるべからず。更に船籍により之を觀察するに、大正十一年中本港に入港せし船舶は内國船の二千二百四十五隻、五百七十二萬七千四百四十二噸を最高とし、英國船の四百九十一隻、二百二十五萬二千二百八十四噸之に次ぎ、北米合衆國の二百三十四隻、一百三十四萬六千七百四十噸之に隨ふ。即ち内國船の入港は全數に對し七割に上り、外國船は約三割とす。斯の如く本港に出入せし船舶は、噸數に於て異常なる膨張を來したりと雖も、其の三分の一は外國船舶なるを知るに於て、我海運貿易上遺憾の極みなりと謂ふべし。以上を詳述すれば左の如し。

計	船籍											入港隻數	同噸數	
	支那	波蘭	獨逸	露亞	瑞典	丁抹	和蘭	諸國	北米	佛吉	英吉利			日本
三、一九四	五	三	二五	一一	一四	一六	五五	三二	二三四	六三	四九一	二、二四五	一〇、一一六、七〇二	五、七二七、四四二
														二、二五二、二八四
														二四七、三二七
														一、三四六、七四〇
														一〇五、〇一三
														二〇一、五九四
														六九、〇六三
														五二、四七五
														一三、二五八
														九一、四三六
														五、九七三
														四、〇九七

第二款 外國貿易船累年比較

本港開港以來三十ヶ年を概観するに憑據すべき記録に乏しく、其のこれあるも概して正確を缺き、信を措くに足らず、従つて當時の消息を知るの利便を有せ

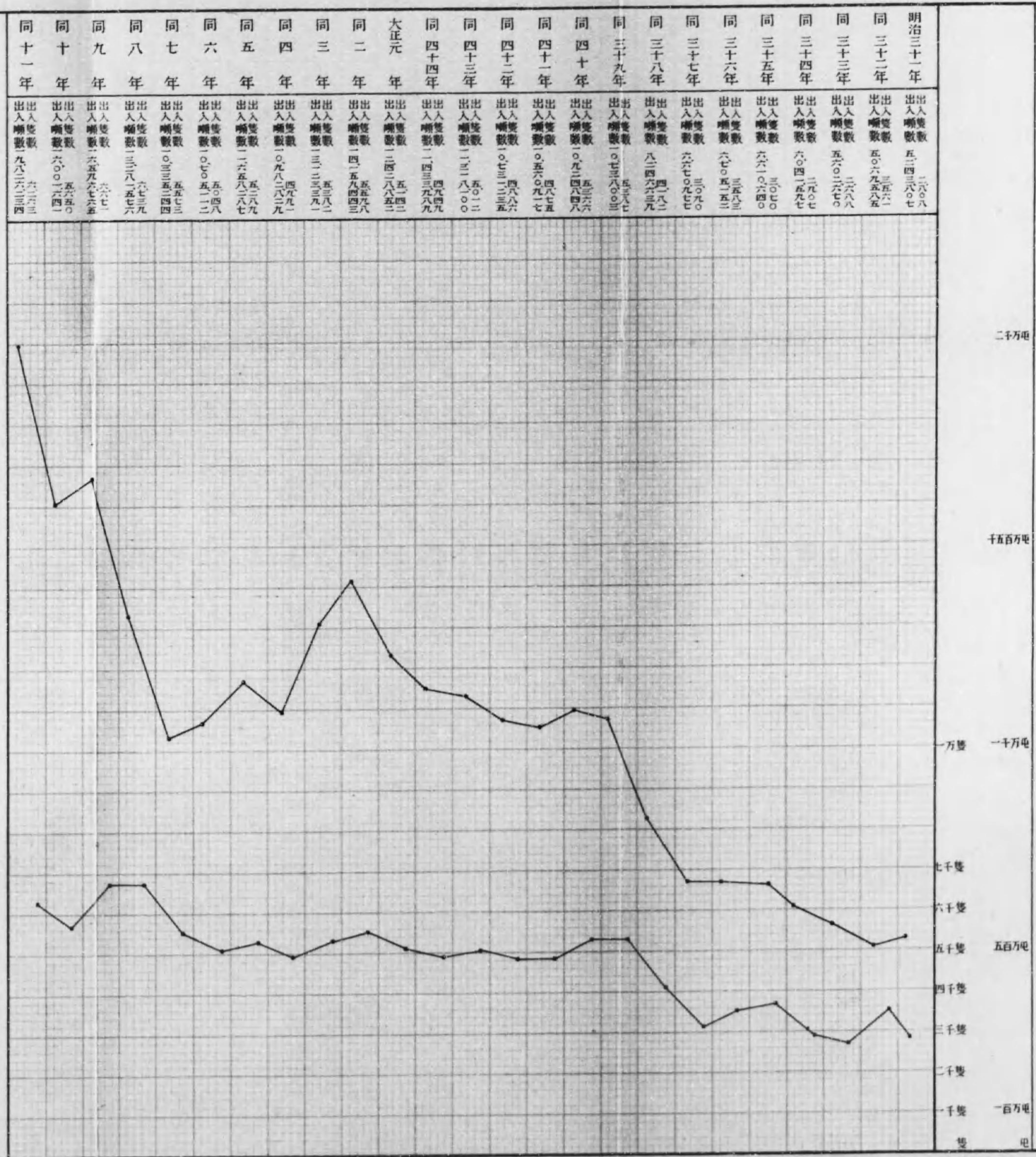


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

計
三一九四
一〇一六五〇
本港開港以來三十ヶ年を概観するに憑據すべき記録に乏しく、其のこれある
措くに足らず、従つて當時の消息を知るの利便を有せ

第二款 外國貿易船累年比較

神戸港出入外國貿易船累年表



備考
一、本表所掲ノ噸數ハ登簿噸數ヲ謂フ
二、大正十年以降當港出入ノ朝鮮籍船ハ本表ヨリ削除セリ

ざるなり。開港後初めの數年間は各種の材料を綜合しても之が實相を知るの端緒なく、明治六年に至り不備ながらも初めて幾分統計上の形體を具ふるに至れり。同年に於ける本港の入港船は約二百六十一隻其の登簿噸數三十萬噸内外にして、爾來明治十六年に至るまでは増加の度遅々たりしものゝ如く、同十七八年を経て、同二十一年頃に至り、累進して入港六百隻を超へ、其の登簿噸數九五萬噸前後に達し、同二十二年以後漸次入港の度加はり、其の隻數七百臺に上り噸數百十萬噸を上下し、同二十九年に入りて入港の數俄然激増の勢を示し、隻數千二百隻噸數二百十萬噸を突破せり。之を出入貨物の側より觀るに、開港後明治二十年に至る二十一ヶ年間は、船舶出入と輸出入貨物とは雁行して漸進し、其の差極めて緩漫なりしを以て見れば、貨物船の入港大部分を占めたる當時にありては、船舶の移動も之に隨從せしが如く、明治二十年頃より輸出入貨物増進の影響は、直接船舶に及びて入港船の隻數、噸數に一段の増加を示したること、察知するに難からず。今明治六年を基本とし、每五ヶ年の増加數を見るに、略々左の如し。

年次	入港隻數	入港登簿噸數
明治六年	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同 十年	約〇、三七七	約〇、四〇〇
同 十五年	約一、一九九	約一、一三〇
同 二十年	約一、九〇〇	約二、二二五
同 二十五年	約三、〇〇一	約三、八八九
同 三十年	約五、一〇〇	約五、一〇〇

明治十年に於て隻數噸數共に激減せしは、征南戦役の餘波を受けたるものと観測すべく、同十五年に於ては増加の度順調に復し、同二十年以後漸次至當なる増加を以て進み、更に同三十年に及び、其の隻數千三百臺に躍進し其の噸數二百四十萬噸に達す著しと云ふべし。即ち明治二十年以後に於ける入港船舶の顯著なる増加の主因は、蓋し輸入超過にありと觀るべきが如し。

船體に就きては、明治二十年以前に二千噸級のもの甚多からず、二十年以後に於ては、各國競ふて大型船の建造に熱中するに及び、其の影響は我國にも波及し、日清戦後四五千噸級船の出入を見、曩日二三千噸級を以て巨船に數へられしもの、漸く小船の部類に入り、次第に大船主義に傾くに至れり。

明治三十一年より同四十四年に至る十三ヶ年は、船舶多事の秋にして又漸く堅實性を帯びし期間と認むべく、其の間起伏あらざるにあらねど、其の進展著しきものありしは否むべからず。前段に續き之に一瞥を與へん。

年次	入港隻數	噸數	同一隻平均噸數
明治三十一年	一、四一六	二、六三九、九四一	一、八六三
同 三十二年	一、二八四	二、五三九、五九六	一、九七八
同 三十三年	一、三六一	二、八一六、九四九	二、〇七〇
同 三十四年	一、四七五	三、〇三五、九四九	二、〇五八
同 三十五年	一、五五五	三、三二八、五八四	二、一四一
同 三十六年	一、八〇七	三、八六四、五八七	二、一三八
同 三十七年	一、五八一	三、三八四、五七四	二、一四一
同 三十八年	二、〇九九	四、一三一、一五二	一、九六八
同 三十九年	二、七五二	五、四三二、八八〇	一、九七四
同 四十年	二、七一二	五、四九七、八七七	二、〇二七
同 四十一年	二、四五六	五、三三三、八二六	二、一七二
同 四十二年	二、四五九	五、三七五、四〇四	二、一八六
同 四十三年	二、五二四	五、六七六、二四一	二、二四九
同 四十四年	二、五〇一	五、七七四、三〇四	二、三〇九

前表により之を輸出入貨物に對比せんに、本期間に於ても入港隻數及び噸數の増加は貨物の増減に正比し、甚しき差等なきが如し。即ち明治三十年より輸入貨物量激増し、輸出貨物に倍加するの狀態となり、爾來此の差等を持続しつつ、漸次増進し、明治四十四年に至りては輸入の輸出を超過すること二倍二分強に達せる有様にして、入港船舶數に於ても其の隻數、噸數亦累加し、年を逐ふて頻繁となるに至れり。此の間日露戰役に逢ひ、船腹缺乏を訴へ、頻に外國船を備ひて之を補充し、海運界多端なりしと雖も、本港入港計數上に於ては其の成績顯著なりと謂ふべからず。是れ當時本港來往諸船舶が貨物を中心として變動せしが爲めにして、後述如き旅客を目的とせる巨船による計數と其の内容を異にせるを以てなり。戰役後海運界一時悲境に陥り、明治四十年に入りて繋船次第に増加したるも、入船數に於ては減退の徵候なく、四十四年に至りても漸増を示せり。兎に角前記十三ヶ年間の船舶界は之を統計上より觀て其の成績良好なりしは、一に輸入超過の結果に基くと謂ひ得べし。船體に就きても前段に述べたる如く依然大船主義に傾き、明治三十一年の入港船一隻平均噸數は一千八百六十三噸なりしもの、同三十五年には二千四百四十一噸に増大し、同四十年には且二千二

十七噸に下りしも、同四十四年再び二千三百九噸に上れり。此の間北米合衆國より一萬噸以上の巨船往々入港し、偉風港内を壓するの觀ありしと云ふ。更に國籍により分別すれば、十三ヶ年間を通じて入港數の最も多きは、年により多少の差異あれど、内國船を主とし、英、獨、米の順位にあり。但日露征戰前後即ち明治三十六年乃至三十八年間に在りては、英國船の入港首位に上り、日本之に次ぐの狀態なりき。是れ固より例外に屬し、既往十三ヶ年に於ける割合は、内國船六割外國船四割の有様なり。今明治三十七年を基準とし、全國との關係を見るに、同年外國貿易船の入港數は、全國を通じて隻數七千四百二十八隻、其の登簿噸數一千四百四十九萬八千八百四噸なり。累年入港船割合左の如し。

年次	全國隻數	神戸隻數	全國噸數	神戸噸數
明治三十七年	—	〇、二二	—	〇、二九
同三十八年	—	〇、二二	—	〇、二九
同三十九年	—	〇、二二	—	〇、二八
同四十年	—	〇、二〇	—	〇、二七
同四十一年	—	〇、一九	—	〇、二六
同四十二年	—	〇、二〇	—	〇、二七

同	同	同	同
四十四年	四十三年	一	一
		〇、一八	〇、二〇
		一	一
		〇、二七	〇、二七

前表によりて全國に對する本港の平均割合は、隻數に於て二割強、噸數に於て二割七分強に當れるを見る。即ち本港は當時に於て、既に主要なる地位を占めつゝありしこと明かなり。最後に大元正年以降最近十一年に至る船舶の趨勢を述べんとす。

一言以て之を覆へば、大正年間に於ける本港出入船舶は、管に計數に於て激増せるのみならず、實に本邦船舶界に一新記録を投せりと謂ふべし。我國に來航する外國船、内地を發航する外航船、一として本港に寄航せざるは無く、他の内地諸港を壓倒するに至れり。大正以後入港船舶の變動左の如し。

年次	入港隻數	同登簿噸數
大正元年	二、五七七	六、二一四、一二四
同二年	二、八〇一	七、一〇二、九九〇
同三年	二、七一一	六、六〇七、九七六
同四年	二、五〇一	五、三六二、六一六

年次	入港隻數	同登簿噸數
同五年	二、六一一	五、八一七、八三二
同六年	二、五六三	五、四二五、四五七
同七年	二、七七六	五、一〇四、一四〇
同八年	三、四一五	六、六五八、三一三
同九年	三、三七二	八、二四三、四〇一
同十年	二、八八五	八、一三二、五一九
同十一年	三、一九四	一〇、一一六、七〇二

既往に於ける船舶増加の原因は、主として貨物の増量に基きしが、大正五年頃より貨物と雁行せざるの傾向著し。蓋し歐洲動亂終焉後各國海運に注目し、優秀船を東洋方面に仕向け、且つ貨物の運送を主とせざる旅客船の入港頻繁なること之が誘因たり。彼の大正十年の如きは貿易海運兩方面より考察して不況期たること疑の餘地なき所なるを以て、其の影響は本港出入船舶數に波及すべかりしに拘らず、隻數、噸數共に毫末も減退せざるのみか、最盛時に比して遙に夫等を凌駕するを見ても首肯するを得べし。今大正元年以後本港入港増加率を見るに次の如し。

年次	大正元年	同 二年	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年	同 八年	同 九年	同 十年	同 十一年
入港隻数	一、〇〇〇	一、〇〇五	一、〇〇一	一、〇〇八	一、〇三一	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三
同登簿噸数	三、〇〇〇	三、〇〇五	三、〇〇一	三、〇〇八	三、〇三一	三、〇三三	三、〇三三	三、〇三三	三、〇三三	三、〇三三	三、〇三三

船體方面に於ても、大正元年入港船一年平均噸数は二千四百十一噸なりしに、同五年には二千二百二十八噸にして、百八十三噸を減少したるも、同十年には二千八百十九噸に増大し、大正十一年に入りては三千百六十七隻に躍進す。又以て大船主義の濃厚たるの状を知るべし。之を内外國籍に分別して入港の關係を窺ふに。

年次	大正元年	同 二年
内國船隻数	一、六四五	一、七〇七
外國船隻数	九三二	〇七九
全數割合	〇〇・六四	〇〇・六四
登簿噸数	三、三九〇、九〇九	三、三九四、一八二
全數割合	〇〇・四五	〇〇・四五

年次	同 三年	同 四年	同 五年	同 六年	同 七年	同 八年	同 九年	同 十年	同 十一年
内國船隻数	一、九〇九	二、〇三九	二、一五〇	二、一五〇	二、一五〇	二、一五〇	二、一五〇	二、一五〇	二、一五〇
外國船隻数	八〇〇	四六四	四一〇	四一〇	四一〇	四一〇	四一〇	四一〇	四一〇
全數割合	〇〇・三七〇	〇〇・八一九	〇〇・八二二	〇〇・八二二	〇〇・八二二	〇〇・八二二	〇〇・八二二	〇〇・八二二	〇〇・八二二
登簿噸数	三、〇七九、八五二	三、八一七、六六〇	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三	四、〇五四、九三三
全數割合	〇〇・四五三	〇〇・六八	〇〇・七〇	〇〇・七〇	〇〇・七〇	〇〇・七〇	〇〇・七〇	〇〇・七〇	〇〇・七〇

即ち大正元年以降同三年に至る平均数は、内國船の一千七百八十一隻三百二十四萬九千三百十四噸を最高とし、英國船の五百七十三隻二百萬二千七百二十三噸之に次ぎ、獨逸船の百四十七隻五十七萬四千三百八十八噸を第三位とし、北米合衆國の五百六十六隻四十萬六千三百十六噸第四位たりしが、同四年以後同

六年に至る三ヶ年平均数は、内國船の二千一百十三隻三百九十九萬四千三十三噸を首位とし、英國船の二百四十四隻六十萬一千七百七十八噸を第二位とし、北米合衆國四十四隻十七萬一千七百六十六噸を第三位とし、佛蘭等之に順ふ、同七年以後九年に至る三ヶ年は、内國船二千六百五十三隻四百七十二萬五千五百四十七噸、英國船二百二十五隻九十六萬四千八百四噸、北米船一百五十八隻六十萬六千三百一十一噸の順位にして、最近二ヶ年に於ては本節の初頭既に概略記述せる如く、日、英、米、佛蘭の順序なり。之を全國に比較するに、大正元年中全國入港船は一萬四千三百六十四隻二千三百六十二萬三千五百九十三噸なるを基準として、本港との對比を求むれば左表の如し。

年次	全國隻數	神戸隻數	全國噸數	神戸噸數
大正元年	—	〇、一一	—	〇、二八
同 二年	—	〇、一九	—	〇、二七
同 三年	—	〇、一九	—	〇、二六
同 四年	—	〇、一一	—	〇、二五
同 五年	—	〇、一八	—	〇、二六
同 六年	—	〇、一七	—	〇、二六

年次	全國隻數	神戸隻數	全國噸數	神戸噸數
同 七年	—	〇、一七	—	〇、二六
同 八年	—	〇、一七	—	〇、二七
同 九年	—	〇、二七	—	〇、三一
同 十年	—	〇、二三	—	〇、二九
同 十一年	—	〇、二四	—	〇、二八

之を以て見れば本港の全國に對する割合は、隻數に於て二割以上に出づること尠きも、噸數に於ては少きも二割五分にして、多きは三割を越へ平均二割七分強を占む。是れ偶々以て本港入港船の大型なるもの多きを知るに足らん。以上の如く過去五十餘年間を回顧すれば、本港船舶界は開港當初其の發達運々たりしが、明治二十年頃に及び漸次進運を示し、明治末期を経て大正に入り、異常なる進展を遂げ、本邦海上交通の中樞となり、船舶の入港數全國に冠絶するに至れるを知る。亦旺ならずや。

附 本港上陸外來客の狀況

國際交通の頻繁なる現代に於て、外國渡來の旅客を擧げんとするが如きは、其

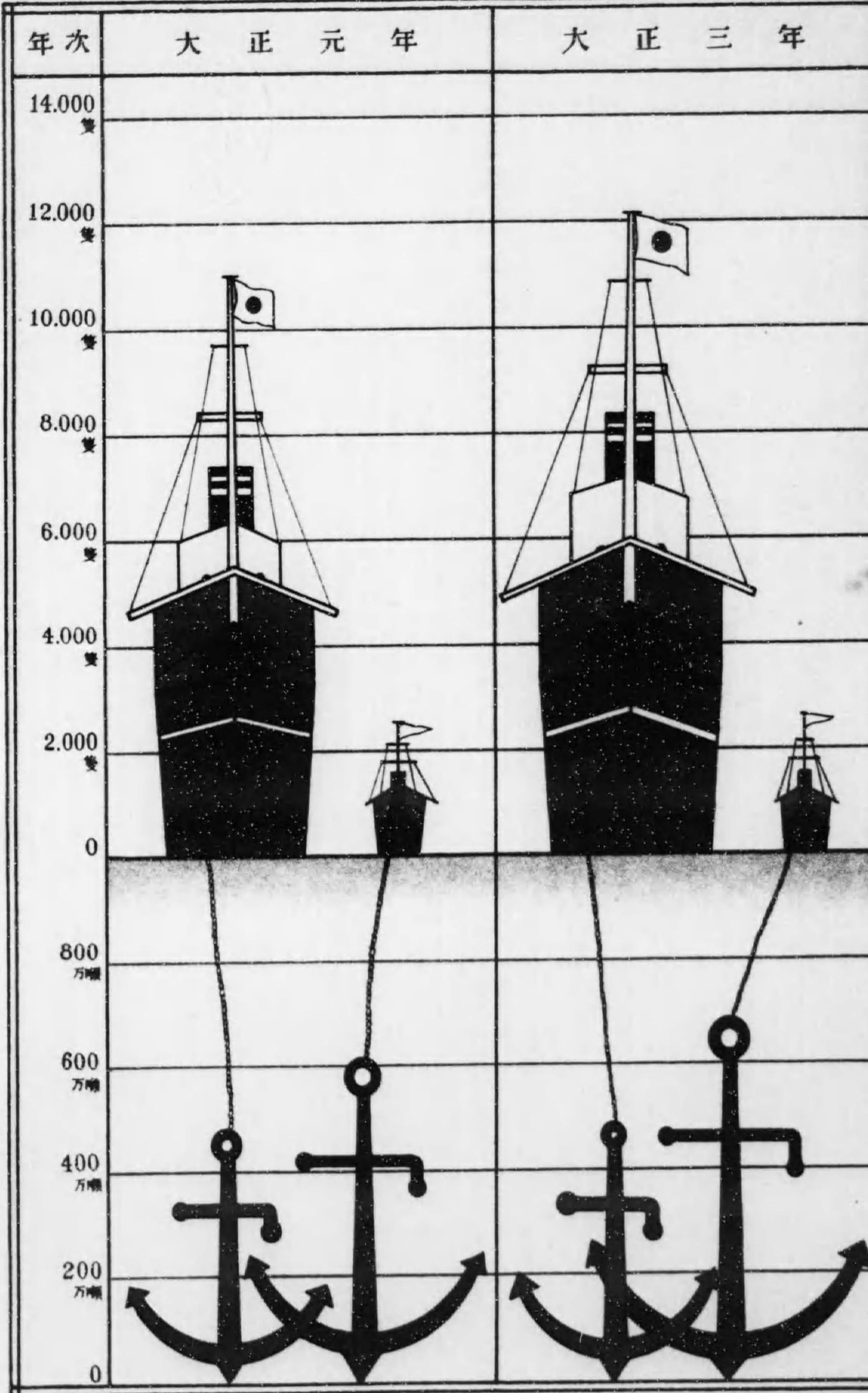
の類に堪へずと雖も、近時旅客を目的とする大型客船の本港に寄港するもの遂次其の數を増し、此等の客船は毎に外國渡來客を載せて來港し、其の數決して侮るべからず。殊に近時の渡來者は、往時の如く單なる觀光にあらずして、多くは我國に於て商業を營むもの、其の從業者、内地と商取引を開始し又は開始せんとするもの、或は特種の使命を帯びて來朝する者等に局限せらるゝ傾向を有するを以て、此等渡來客を通じて、本港と對手國との關係を知るの一助となり得べきか故に、茲に既往五ヶ年に亘り、上陸客の一斑を表示すべし。

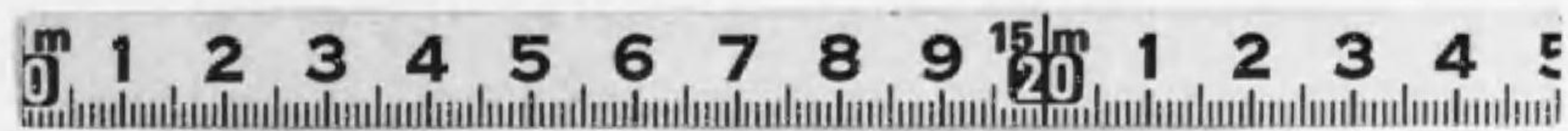
國籍	大正七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
英吉利	一、二四五	九五四	一、三一八	九三六	一、四三〇
獨逸	—	四	一〇六	九八	一三八
佛蘭西	二二五	一六五	一三〇	七二	一一二
伊太利	三五	三二	三三	一一	四〇
埃太利	—	—	—	—	—
匈牙利	—	三	七	—	—
匈牙利	—	—	—	—	—
白耳利	一三	九	二五	二	—
露西亞	四三四	二四〇	二九八	四四〇	二二四

國籍	大正七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
瑞典	一八	八	二二	一一	二四
諸威	二五	三三	二七	一六	一四
四班牙	一七	一五	二九	四〇	二
葡牙	四七	五五	四〇	三五	二四
和蘭	七五	九七	一六五	四五	四二
瑞西	二二	四一	二七	三七	一六
希臘	二二	—	—	—	—
希抹	二二	—	—	—	—
丁抹	二八	三六	四〇	二八	—
支那	四、一二七	四、五九〇	五、二〇三	六、九一八	八、七三〇
莫領印	—	一六一	一七〇	—	四九
比律賓	—	二九	一五一	—	三
暹羅	一六	一二	—	—	—
波羅	—	—	—	—	—
北米合衆國	七二三	八一二	一、二八九	七四六	一、二六三
濠太刺利亞	—	—	—	—	—
其他	一七	一二五	五三	一二六	三〇
計	七、〇八一	七、四三一	九、二〇六	九、五九六	一一、一五二

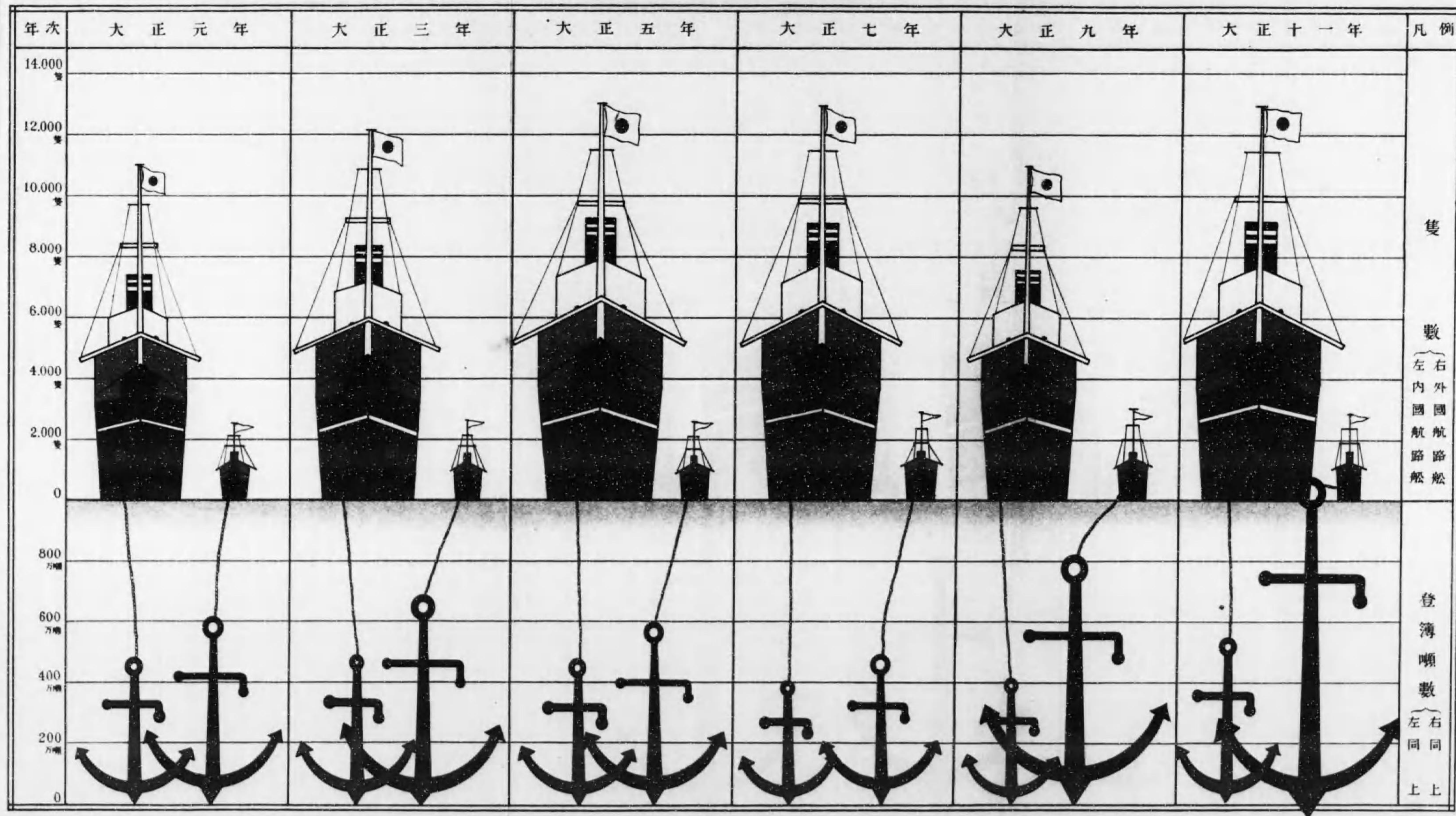
備考 本表所載の人員數は、外國より直接本港に上陸せしもののみにして、内地他港よりの乗船客を包含せず。

神戸港大観





神戸港入港内外航船舶对照表



第五章 貨物

第一節 内國貨物

第一款 内國貿易に於ける神戸港の地位

神戸港の眞價を知らんと欲せば、單に外國貿易のみに偏せず、須らく内國貿易の狀態をも知悉し、内外兩方面より觀察せざるべからず。外國貿易に關しては、後章詳述する所あるべけれど、内國貿易に關するものは、凡ての統計調査不充分にして、信憑すべき的確の基礎頗る尠きを以て、茲に充分之を披瀝すること能はざるは甚だ遺憾とする所なり。

惟ふに内國貿易に於ける當港貨物の集散地域は、頗る廣汎にして、其の仕向地及び仕出地は、殆ど枚舉に暇あらざるも、瀬戸内海を中心とし、四國、中國各港より延いて九州沿岸、臺灣、北海道等、殆ど全國の諸港を網羅して剩す所なし。就中瀬戸内海より九州沿岸に到る地域は、出入物資豊富なる良港灣に富み、海運界に取

りては天與の寶庫とも稱せられ、本港との關係特に密接なり。殊に四國沿岸地方は鐵道連絡の便を缺けるを以て、當港との航運關係唇齒の間柄なるは當然とす。尙臺灣は當港を起點とする命令航路に屬するが故に、物資の出入從て頻繁たり。之を要するに當港は四國、九州及び中國附近を勢力範圍とする中樞港にして、內國貿易上最も主要なる地位を占むと謂ふべし。

第二款 內國貿易荷役場の設備

當港に於ける內國貿易荷役場の設備は、其の貨物集散状態に比し頗る不備にして、現下に於ては縣營に係る國產波止場荷役岸及葺合港の外、兵庫新川、運河等あるのみにして、何れも規模狭少、百貨輻輳の場合狹隘を感ずること切に、從て貨物の堆積は集散の敏活を缺き、荷役の澁滯損害頗る大にして、其の不便云ふに堪へざるものあり。茲に於て政府は曩に第二期築港擴張工事中、內國貿易に關する設備として、兵庫新川沖、並に國產波止場沖に大突堤埋築の計畫を樹て、今や着々進工中なれば、之が完成を見るの曉に於ては、外國貿易と相俟て當港の隆盛正に期すべし。目下の荷役岸に於ける狀況を略述すれば左の如し。

一 國產波止場 當荷役岸は臺灣、九州、四國、中國、北海道及大阪附近に往復する船舶貨客の集散地たり。

一 葺合港 は近畿沿岸に往復する船舶貨物の集散場たるも、其の規模狹隘にして取扱數量も極めて少なし。

一 兵庫島上町沿岸 兵庫新川東入口に於ける島上町附近一帯は、四國及紀淡方面に於ける貨物の集散地にして、殊に阿波徳島間に於ける鐵道連絡貨物が、全部同所を経由するため、非常に輻輳す。尙同所附近及運河方面は、四國、中國、九州方面より往復する帆船の集合地にして、無數の帆船隨所に碇泊し、荷役終了後直に出帆するものあれど、中には載貨を索めて旬日又は月餘に亘り滯泊するものありて、繫留地帯は常に空所を有せざるの盛況を呈せり。

第三款 內國貿易の概況

大正十一年中に於ける神戸港內國貿易集散貨物の噸量價額總計を掲ぐれば左の如し。

計	内 國 貿 易		朝 鮮 貿 易	
	噸 出 量	價 額	噸 入 量	價 額
計	一、七〇〇、三〇〇	三、七九、三三三	二、一五八、六二四	二、七〇、九六八
朝 鮮 貿 易	六〇、九六四	一、四八五、九三三	一、五八、八五八	三、七九、三三三
内 國 貿 易	一、六三九、三三六	三、四一三、四〇〇	一、五七九、七六六	二、三二、六三五

之を前年に比較するに、内國貿易は出貨に於て噸量は二十一萬七千九百二十七噸を、價額は壹億參千六百參拾五萬四百六拾七圓を増加し、入貨に於て噸量八十四萬八千八百八十九噸、價格四千貳百九拾參萬八千參百貳拾壹圓を増加せり。朝鮮貿易は出貨に於て噸量二萬一千八百二十六噸、價額六百參拾九萬六百貳拾壹圓を減少したれど、入貨に於て噸量四萬六千二百八十九噸、價額六百參拾四萬五千九百四拾九圓を増加したるため、總噸量に於て一百九萬一千二百七十九噸を、總價額に於て壹億七千九百貳拾四萬四千百拾六圓を増加せり。今試に之を既往十ヶ年に對照すれば左の如し。

内國貿易出入貨物噸量及價額對照表

年 次	噸 出 量		價 額		噸 入 量		價 額	
	噸	價	噸	價	噸	價	噸	價
大正元年	一、八〇四、四六六	九、四、五三〇、六五	一、〇一八、三六	九、三、七九、九三	二、八三三、一〇	一、八七、七八八、六八	二、八三三、一〇	一、八七、七八八、六八
同 二 年	一、二九一、四二二	七、九、九三三、一八	一、二〇二、一五二	一、〇〇、九五六、三三	二、五八三、六三	一、七三、九二九、五五	二、五八三、六三	一、七三、九二九、五五
同 三 年	一、九四四、五五	五、八、九九五、七三	九、三、五三三	一、〇、八四〇、七三	二、二八〇、〇六	一、六〇、九六六、五五	二、二八〇、〇六	一、六〇、九六六、五五
同 四 年	一、六六一、〇八〇	一、四、四、五、九二	一、〇六六、五三七	一、五、四、二八四、四八	二、六九七、六一七	二、八八、六九、三九	二、六九七、六一七	二、八八、六九、三九
同 五 年	二、〇九八、一九七	一、六、一、三、七五	一、三九九、〇二五	二、〇〇、二、四、六、九	三、四六七、四〇	一、〇三、七、七、一、七	三、四六七、四〇	一、〇三、七、七、一、七
同 六 年	二、六八八、三三二	三、三、五、九、九七	二、九八七、五三三	六、七、六、八、八、九〇	五、六八五、五六四	一、〇三、七、七、一、七	五、六八五、五六四	一、〇三、七、七、一、七
同 七 年	二、九八八、六〇四	六、五、〇、六、五、八二	一、四九六、〇六	五、二、五、六、五、三、七	四、四五六、六三〇	一、一、六、三、三、三、三	四、四五六、六三〇	一、一、六、三、三、三、三
同 八 年	四、〇七、四、五	六、八、〇、五、九、七二	二、六四七、〇〇	八、五、七、三、三、〇	六、七四四、四三	一、四、九、六、三、三、三	六、七四四、四三	一、四、九、六、三、三、三
同 九 年	二、二七五、六〇九	四、三、三、六、一、五八	一、五八四、〇〇	三、〇、八、七、三、三、三	三、八五九、六五九	七、五、二、四、三、三、三	三、八五九、六五九	七、五、二、四、三、三、三
同 十 年	一、四一五、二九四	三、四、七、四、七、八八	一、三三九、九六五	二、六、六、五、三、三	二、五五〇、二五九	四、六、四、一、三、一、八	二、五五〇、二五九	四、六、四、一、三、一、八
同 十 一 年	二、三〇、四七三	二、六、六、七、三、九八	一、三三三、〇六	三、四、六、五、三、九	三、六四一、五三八	六、四、三、三、三、三	三、六四一、五三八	六、四、三、三、三、三

右の表中噸量に於て入超し、價額に於て出超するは、外國貿易の場合に於けると同様、入貨は各種の原料に屬する粗製品大部分を占め、出貨は比較的精製品を主とするが爲めに外ならず。

更に品種別に依り其の出入概況を前年に比較して表示すれば左の如し。

品種	大正十一年到		同着		大正十一年發		同送	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
穀類	內國米	四、七七一	二、三五〇	六〇、九〇五	一四、二五一	二七、七三三	一四、四四〇	三、三六八
穀類	朝鮮米	一一	二、三四四	三、八八三	三、五六七	一、三〇三	三〇	六二、四七三
穀類	臺灣米	四七、〇〇六	八、四六一	一九、八三〇	三、五六九	六、四七〇	八二	一五、八一〇
穀類	外國米	一八〇	二七、〇〇〇	—	五〇	三、四四五	八二	一五、八一〇
穀類	麥類	九三六	六、一三六	一四、二七九	一、九五七	五、四三四	二、四〇三	三、七二四
穀類	豆類	一九、〇六三	二、八三一	八二、二八九	一、九五七	一、九三三	五、一八四	六〇八、三四五
穀類	雜穀及種子	五、一四〇	八、四八五	二、五九九	一〇、四八九	六、〇九三	九、四七七	二、四六六
飲	小麥粉	三三二	三、九七二	二六九	五、四四三	一四、四五六	一九、三九九	三、七四四
飲	源粉	七、三九九	二、一九八	五、四四三	六、三六七	六九八	六六	二、六九九
飲	鹽	五七、三三九	三、四三八	四九、八〇三	二、九八七	六、八〇一	七、七四三	四、〇三三
飲	昆布	三三、〇九九	四、八〇四	二〇、〇〇六	三、三三〇	一、〇三三	一、五三三	四、〇三三
飲	生魚介類	一五、一四九	六、九六一	二一、四四〇	五、六二八	一、二四三	一、〇四四	四、七九九
飲	乾魚類	二、七七一	七、〇五二	五、五二四	三、〇七五	二、四八四	二、二八八	一、二六二
飲	鹽乾魚類	三、〇〇八	二、七七七	六、六六	一、五三三	一、八一九	九、五	九、〇八三
飲	其他海產物	五、〇九五	五、〇六八	二、六七二	四、六三三	二、二九	一九二	二、〇二〇
食	乾物類	三、二二一	三、六六五	三、四七七	二、六八五	三、九〇〇	二、二二七	一、三三九
食	其他海產物	六〇〇	六、六五五	—	—	—	—	—

品種	大正十一年到		同着		大正十一年發		同送	
	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額	噸量	價額
蔬菜類	蔬菜類	四九、三六六	三、五三七	二、三六六	一、四三〇	一六、八四三	九、八四九	六、二八四
果實類	果實類	一一、七三七	一〇、四五六	四、五二一	三、五七六	一、四八八	一〇、三三五	一、三六三
味增及醬油	味增及醬油	二、一六九	一、六九〇	一、七七一	三、七七七	二、一五一	二、六六九	四、二〇〇
和酒	和酒	二五、八八九	一〇、七五八	三九、二〇〇	二、一六七	四、〇三三	三、六三〇	一、八四四
洋酒	洋酒	六四	二、五〇〇	一、〇八四	二、三三九	一、六二二	四、四〇〇	一、六九九
砂糖類	砂糖類	一七三	六、七四九	二、一〇五	四、五八四	一、五八五	三、八、九、一、〇〇八	一、七、五、四、一、〇〇八
煉乳	煉乳	一七三	一〇、一〇〇	二、六九	七、五五五	二、三三四	三、〇〇四	七、三、八、三、九、六
罐詰食料	罐詰食料	四、二〇六	二、五三三	一、三七六	六、七、八、〇	一、二〇〇	七、三〇、〇〇〇	二、二、五、四、二
皮毛骨角類及其製品	獸骨皮革及同製品等	九〇一	一、二五〇	五二四	二、八九五	八七八	六、九、六、〇、八	一、五、三、三
油脂及蠟	鯨油、植物性油、魚油、蠟等	二、六二〇	五、八八〇	二、一四八	四、〇三二	五〇、四〇一	二、三、二、八	四、七、一、七、二
藥品及染料	硝磺、曹達、樟腦、藥品、染料等	二、七二〇	一、六九三	一、七、四、二、五	一〇、〇九八	四、九、五、九、二	四九、二〇八	二、三、六、二、三、四
絲織繩索及同材料	繭、棉花、綿、生絲、絹、綿絲、麻等	一五、八三三	五、一三三	二、三、二、六	四、二、七、五、三、七、五	六三、八〇〇	四七、三、六、八、二、三	二、三、三、五、一
布帛及同製品	絹、綿織物、毛織物、麻織物、布帛等	四九、八七四	二〇、六八七	三〇、六三三	三、九、一、〇、六、八、三	一九、五、一、八	八、三、五、一、八、五、〇	二、三、六、八、三
衣服及同附屬品	衣服、附屬品、帽子、靴等	五、一九九	二、五八八	一九、三三八	四、七、六、九、九、二、一	一、四、三、二	一〇、四、四、二、八〇	二、〇、五、五、四
製紙原料及同製品	紙、和洋紙、印刷物等	一四、五〇一	五、五三三	一九、三三八	五、六、二、九、四、三、〇	九、〇、四、五	三、五、八、三、二、八〇	二、〇、五、五、四

萬四千三百三十四噸、麥類の一萬三千三百五十三噸、豆類の六萬二千二萬二十六噸、和酒の一萬三千三百一十一噸、衣類及同附屬品の一萬四千二百二十九噸とす。

第四款 朝鮮貿易

朝鮮に關する貿易は、明治四十三年八月以前は、外國貿易に包含されしも、同月以後移出入として税關統計に計上せられしが、大正九年八月に至り全く之を内國貿易として取扱ふこととなり。蓋し同貿易の一般状態は、近事著しく改善せられたり。

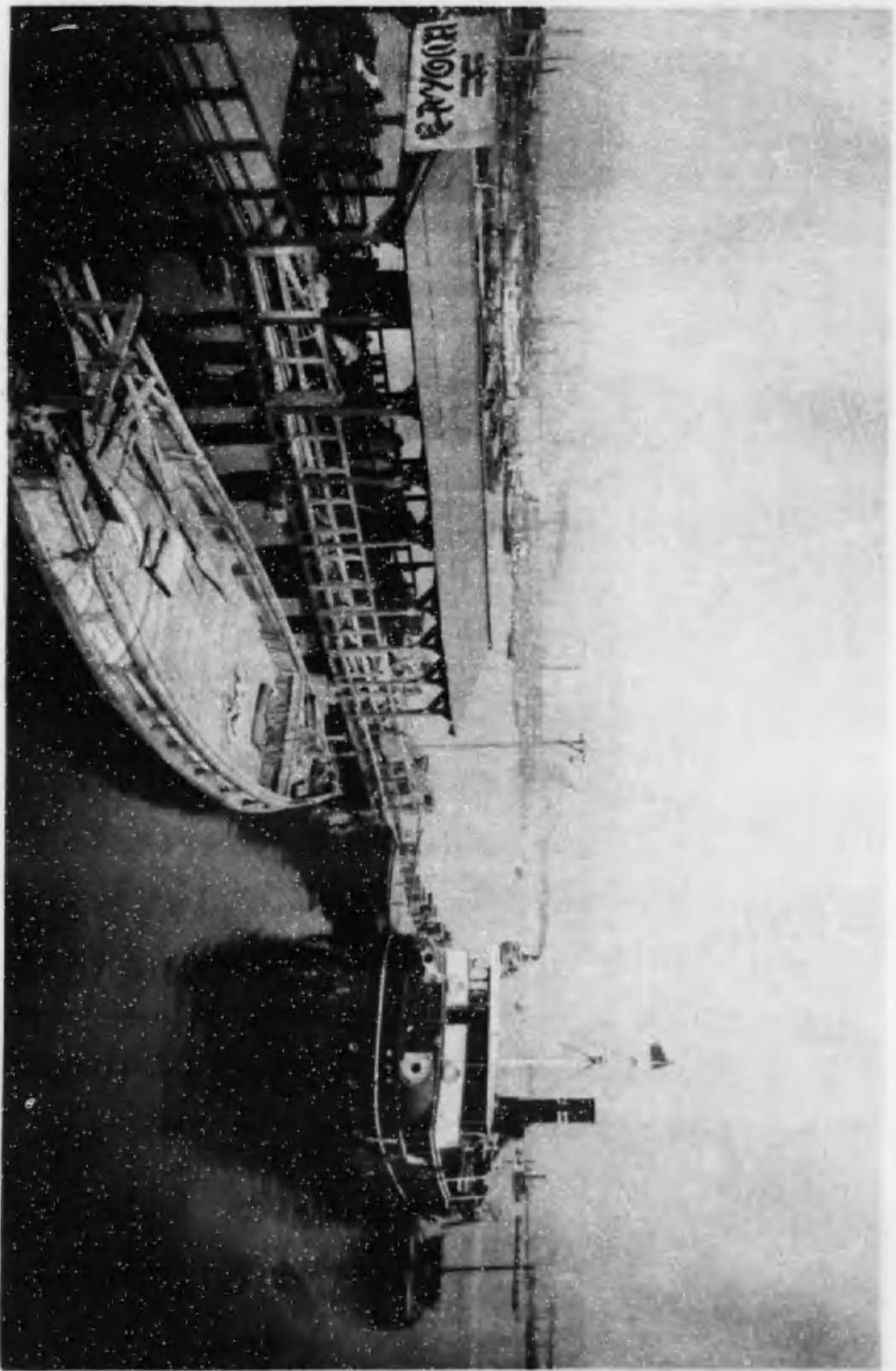
大正十一年中、神戸港に於ける移出は六萬九百六十四噸、壹千四百八拾四萬五千九百參拾貳圓、移入は十五萬一千八百五十八噸、貳千參百七拾九萬五千貳百參拾九圓にして、之れを前年に比較すれば、

種別	大正十一年		同十年		大正十一年		同十年	
	噸	價	噸	價	噸	價	噸	價
移出	69,644	151,826.40	60,964	142,953.00	69,644	151,826.40	60,964	142,953.00
移入	151,858	2,379,329.00	118,518	1,749,290.00	151,858	2,379,329.00	118,518	1,749,290.00
計	221,502	2,531,155.40	179,482	1,892,243.00	221,502	2,531,155.40	179,482	1,892,243.00

にして、總噸量に於ては二萬四千四百六十三噸を増加せしも、總價額に於て四萬四千六百七拾貳圓を減せり。こは固より種々の理由あるべしと雖も、主として一般物價の下落せるが爲めなり。今之を重要な品種別によりて觀察すれば、移出の主なるものは、内國米、外國米、和洋酒、藥品及染料、絲縷、布帛、金屬、機械類、燐寸及ゴム製品等にして、移入の重なるものは朝鮮米、豆類、生魚、鹽乾魚、木材等とす。即ち左表の如し。

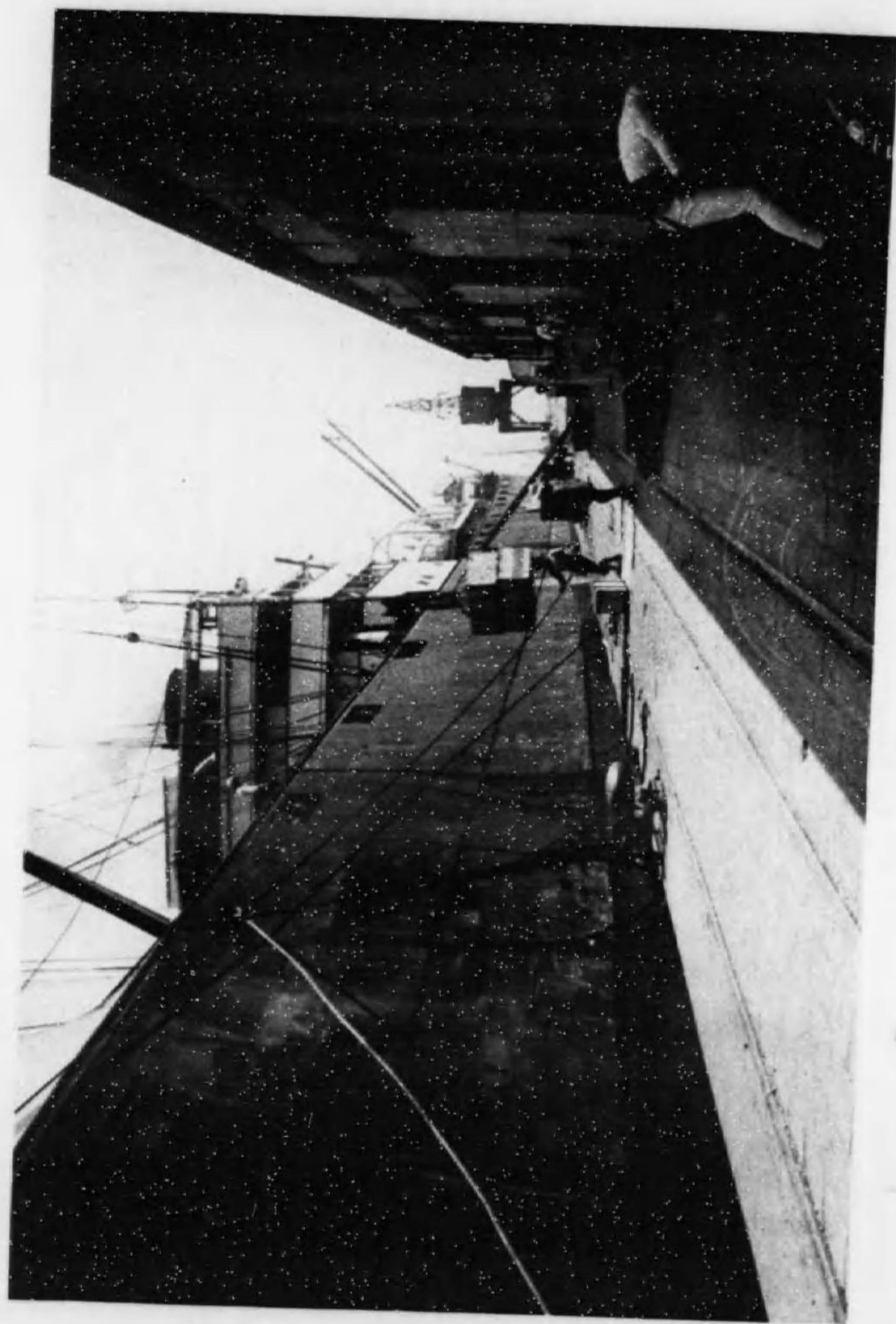
品種	大正十一年		同十年		大正十一年		同十年	
	噸	價	噸	價	噸	價	噸	價
穀物及種子	3,866	67,787.40	3,863	45,585.60	1,477	34,348.00	1,180	27,610.00
内國米					33	6,334.00		
朝鮮米					162	38,960.00		
臺灣米					2	3,960.00		
外國米					8,071	11,000.00	1	1,975.00
豆類	7,698	94,714.00	7,155	58,874.77	2	3,600.00	27	2,626.00
雜穀及種子	3,940	54,230.00	2,433	35,394.00	13	1,920.00	48	6,053.00
飲食物			262	50,641.00	2,143	25,704.00	3,169	62,789.90
小麥粉								

鹽	生魚介類	乾鹽魚	和洋酒	獸皮革	油脂及蠟類	藥品及染料及塗料	絲纜繩索及同材料	布帛及同製品	製紙原料紙及同製品	金屬及同製品	諸機械類	肥料及飼料	木、竹材及同製品	木	雜燐寸木	燐寸品	藥製寸品	及同製品
五、五五四	四、九九六	二、二七九	五	七二	六七	二、〇五	三二八	四	五八九	六〇三	三二	四、四九九	一四、〇七二	五、〇二六	五、〇二六			一六
三三三、二四〇	二、三九八、〇八〇	一、一〇七、〇三〇	五、〇四〇	八七、〇九〇	三三、一〇〇	九三、三三三	三二一、五〇四	二、四〇〇	二九四、三〇〇	六七、六五三	二五、一〇〇	三三、六一一	一、二五、七六〇	一、二五、七六〇	五、五二、七六〇			五、七〇〇
二、四三〇	一、七三二	一、七三二	一	七	四五	一、七七七	一、六三四	五	二〇九	一四八	二四〇	六六、二九	一、〇八〇	一、〇八〇			三	
一、五五六、〇〇〇	三、六四、五四九	三三三	一八、七五〇	一、五五〇	一、四八、一六〇	一、五六四、五〇〇	五、一〇〇	四八、〇九六	二五、一四六	二四、〇〇〇	三三〇、六九九	一、二六、五六六	一、二六、五六六	六五三	九六			七五〇
三九	三九	四、三二七	二六七	一、二四三	一、五五六	一、八三七	二、〇四六	五〇三	七、二七七	七、二七七	一、一九七	一、〇二八	一、〇二八	一、〇二八	六五三			三、三三〇
三五、二五〇	一、四三七、二八	二九二、〇〇〇	四四八、五八〇	六四〇、八九六	一、〇〇九、三八〇	一、〇〇九、三八〇	九五、一八〇〇	一八〇、八四〇	二、〇四、七六〇	一、三六三、八七五	八、〇五〇	五、二四〇	五、二四〇	五、二四〇	一〇、五六〇			一、二四、五八〇
四、六二二	三、一八二	一七八	六五五	五三九	三、五三九	三、五三九	三、三三七	七五三	九〇七	六四〇	二、五三三	二、〇二五	二、〇二五	二、〇二五	一四、四三七			二、五五〇
四、三二、九八	八七四、九五	四、八、五八〇	二六五、九九〇	三、一八五九	三、八四二、二五〇	三、八四二、二五〇	二、四二六、二五〇	三、四〇、三六七	八三、七四五	七六、四〇〇	二、七、七六	一九、〇〇六	一九、〇〇六	一九、〇〇六	一、三三、九九			四〇、六五四
七、二七〇〇																		七、二七〇〇



内國貿易の島上棧橋

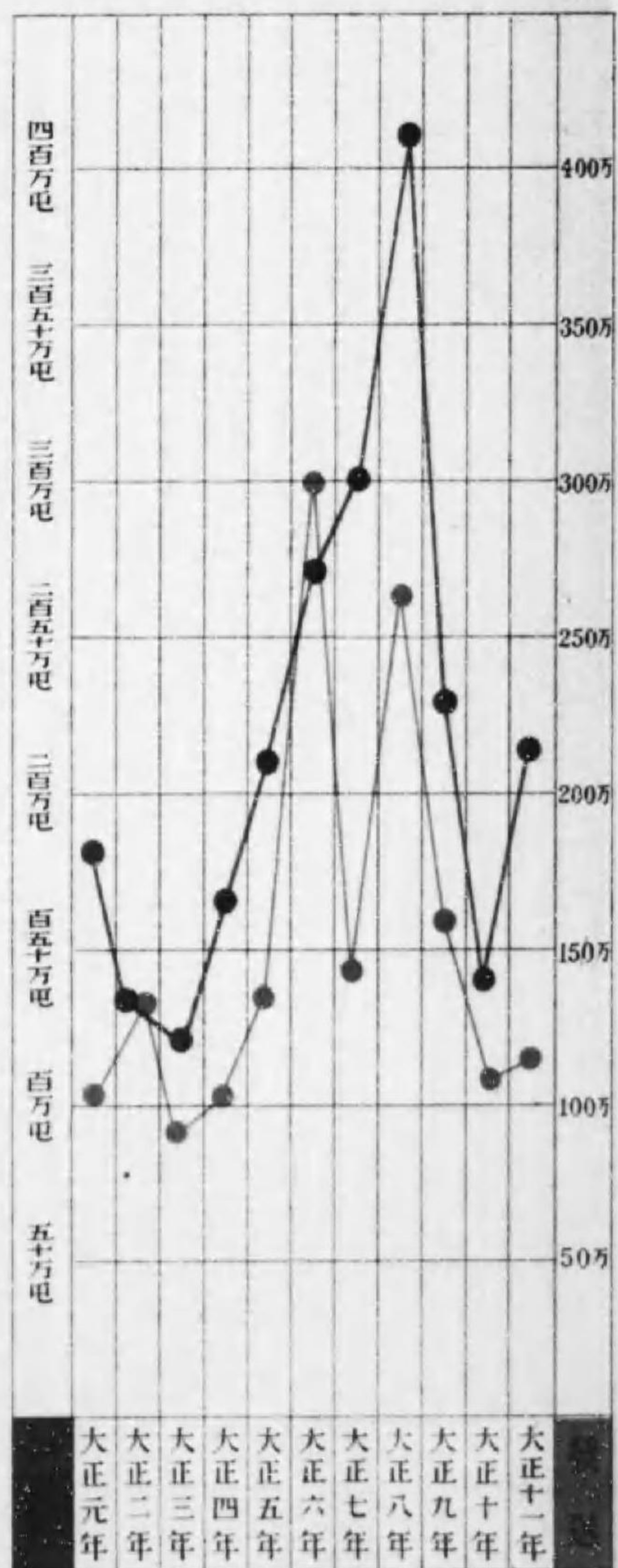
外國貿易の繁華船荷役



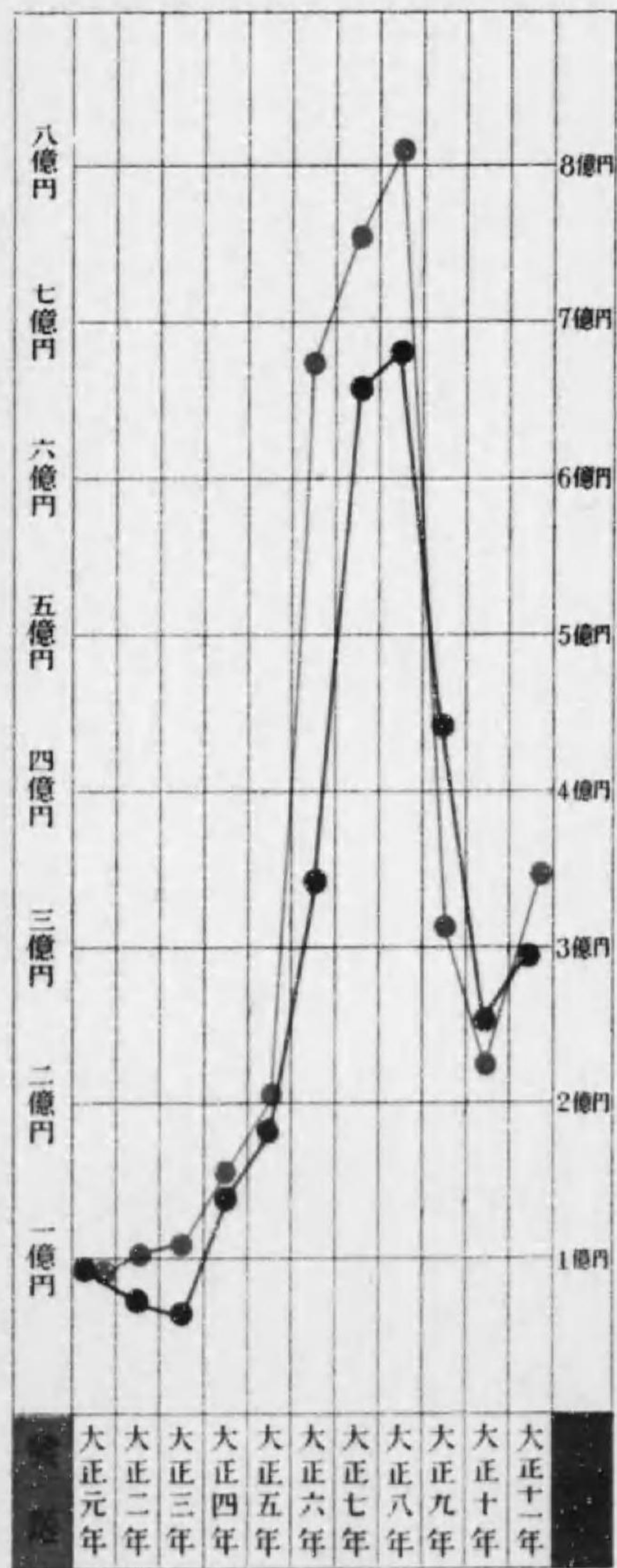
神戸港内國貿易發着對照表

内國貿易

發着噸量表



發着價額表



外國貿易の繁榮



神戸港内國貿易發着對照表

内國貿易

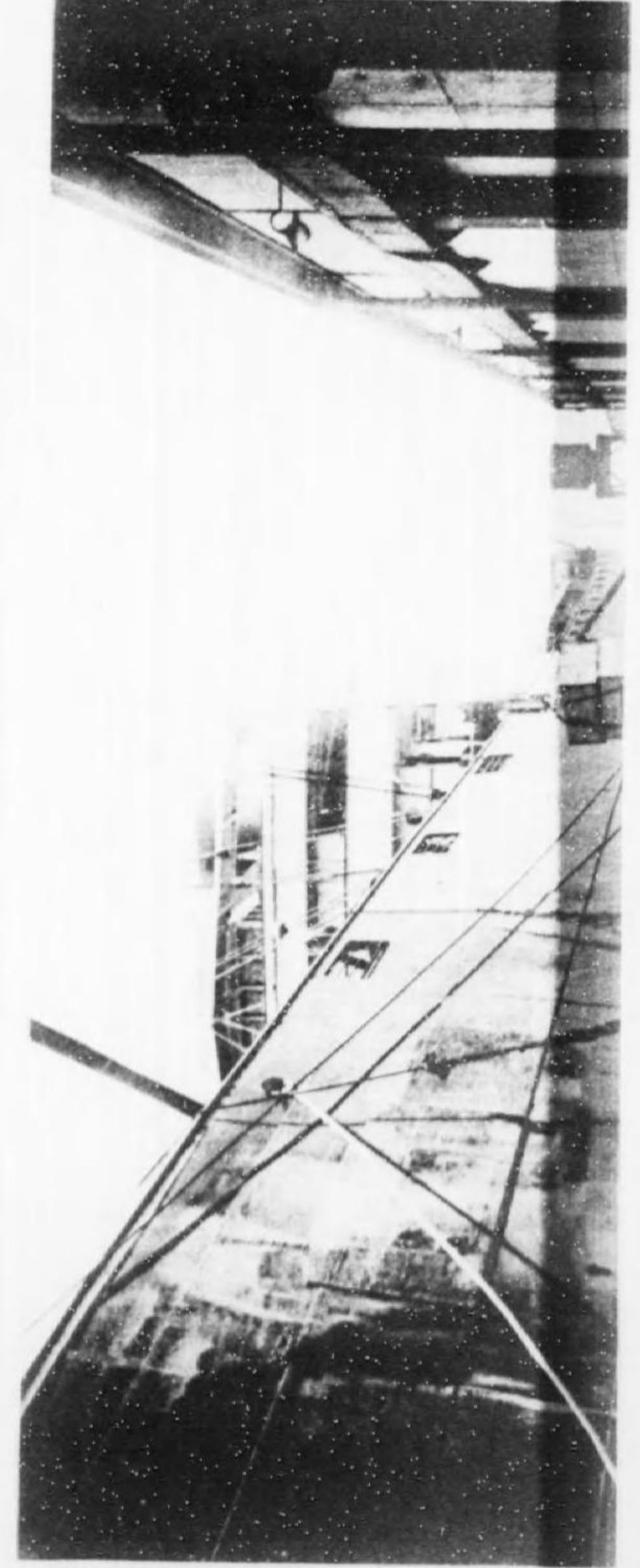
發着噸量表



發着價額表



外國貿易



第二節 外國貨物

第一款 總 說

本港輸出入貨物の消長を説かんとすれば、其の基礎を貿易統計に求めむるべからざるに、我國のみに限らず凡て各國貿易統計は、其の計數なるものに遺漏多く、貨物の數量價額を明確に表示するもの尠く、従つて其の實相を究むること極めて困難なり。之が原因を探查するに、我國に於ては(一)輸出入貨物検査の粗漏なること(二)貿易統計作製の基本に錯誤あること(三)貿易價額の算定に相違あること等を主とす。

我國に於ける貨物検査の標準を見るに、輸入品中從量税に依る貨物は、検査に際して、全貨物中の一部を指定し、指定箇數中より一箇の平均量を求め、之より全數を算出するが故に、貨物の實數と合致する場合極めて尠し。即ち査定方針は申告書面記載の數量と検査數量と合致する場合は問題とならざるも、検査數量が申告數量より低き時は申告數量を採り、検査數量申告數量を越ゆる時は検査

數量に依る。何れの場合にも其の多きに從ひて課税するが故に實數量を遠ざかるを普通とす。斯の如くして決定したる數量が統計の骨子となるを以て、勢ひ不正確を免れざるは自明の理にして多くの場合貿易統計數量は實數より超過するものとす。從價税品の検査は、検査の際輸入申告書に仕入書 (invoice) を添付する書なるを以て、仕入書面記載の價額を課税標準となす。然るに此の仕入ものは眞正の程度疑はしきものあり、奸商の如きは豫め謀りて眞偽二通の仕入書を準備し、貨物申告の際に虚偽の仕入書を添付し、故意に關稅の輕減を目論見んとするものあるやに聞く。而して從價税品にありても前述せる如く、指定數量検査の結果貨物の實際の價額を現すこと稀にして、多くの場合課税價額は輸入貨物の正價より低き傾あり。之を輸出貨物に就て見るに、我國策として輸出奨勵の結果、輸出手續の如きは極めて簡易迅速を旨とし、輸出申告に至りては特別貨物を除けば輸出検査を省略するを以て、其中申告書記載の數量價額の如きは杜撰なるもの少しとせず、運送積戻等の表示數量價額亦然り。斯く不正確にして實物と相伴はざる材料を基本として貨物統計を作製し、之を以て根柢となすが故に、到底正鵠を得ること難しと謂ふべし。

貨物は其の品種大小、輕重一ならず、其の課税の基底も重量によるあり、容積に依るあり、或は簡數によるありて一様に律する能はず。然るに貿易貨物總量としては容積重量共に合算し噸數を以て統計上に表示せるが、斯の如きは全く其の意義を爲さずと謂ふべく、容積に依るべきものと重量に依るべきものとは、截然區分して之を併記し其の差異を明かにせざるべからざるや論なし。蓋し容積の大なるもの必ずしも重量ならず、重量物又尤大なりと謂ふべからざればなり。

價額の算定に就きても、輸出と輸入とは其の趣を異にし、輸出價額は輸出地の時價を以て申告するに對し、輸入價額にありては輸入の際に於ける到着價額に依りて課税價額を定むるを以て、輸入價額は輸出地に於ける時價に運賃、保險料、其の他の諸掛を加算したるもの、總計なり。故に同一貨物にして所を異にするに從ひ、其の價額に差異を生じ、奇異の感を抱かしむ事、然既に斯の如きを以て貿易統計なるものが必ずしも正確に其の實際を表示せるものにあらざるを知るべし。問題は貿易統計は幾何程眞正に接近せるや否やに存す。然りと雖も、こは謂ふべくして實行すること頗る困難の事に屬するが故に、今官府の統計に

信頼し、以下大要を記述せん。とす。

第二款 輸出入貨物噸量

茲に貨物噸量を説くに當り、先知らざるべからざる事は貨物の範圍なり。抑も貨物とは如何なるものなりや、其の範圍如何の問題は本款に重要な關係を有するを以て、之が決定を爲したる後ならでは到底本款所説を明確に爲すこと能はず。廣く貨物と云へば經濟上交換價值を有する有體物を示すも、茲に謂ふ貨物は斯る廣汎なる意義を有するものにあらずして、關稅法に所謂貨物と稱するものなり。此の意義に於ける貨物は御料品、在外帝國公館及び其の他官廳用品、外國艦船用品、外國航行内國商船用品、博覽會出品物、陸海軍用品、外國公館用品、軍艦、兵器彈藥及爆發物等、主として關稅定率法中の免稅品に屬するものを除外せるものとす。貿易貨物として取扱はるゝものは、以上の如く狹義の貨物にして、統計に現れたる貨物も亦之に限定せらる。

輸出入貨物噸量は開港以降明治二十一年に至る二十一箇年間は正確なる記録に乏しく従つて其の間に於ける推移の状態を知るに困難なりと雖も、乏しき

の材料を以て之を判定するに、明治十年頃迄は輸出入貨物噸量は二十四萬噸を出でず、明治二十年頃迄は五十萬噸を超へざりしが如し。此の間の噸量増加の程度亦急激ならず。之を貨物藏置上屋設備の方面より看るに、開港當時徳川幕府の手により築造せられたる倉庫四棟は、明治初年に至りて改築せられ、同五年には前記四棟其の總坪數四百八十坪の外、上屋三棟二百五十坪の増設を見、翌六年に二棟四十八坪、同十一年には一棟四十坪を設置し、漸次藏置設備を擴張し、同十七年神戸棧橋會社私設倉庫二棟、上屋一棟を築造し、明治二十年に至り従來の倉庫上屋を以てしては狹隘にして用を爲さざるに至れるを以て、外人商業會議所長の申請に基き、上屋二百八十坪の増設をなせしと謂へば、二十一箇年間に於ける輸出入貨物増加率の淺漫なりしの状態推知するに難からず。此の間に於ける輸出入貨物相互の割合を考ふるに、本港に於ける輸出入貨物は、逐年輸入偏重の傾向を有し、近年に至りて益々顯著となりしも、既往に遡るに隨ひて其の程度尠なく、明治二十二年及其の後の五年間を觀るも、其の差僅少なるを以て推測するに、明治二十年以前に於ける輸出入噸量相互間の差は甚しからざるべしと見ることを得べし。明治二十二年に至り初めて神戸税關に於て貨物噸量の調査

第五章 貨物

一〇〇

を開始したるを以て、同年以後大正十一年に至る迄の輸出入貨物噸量を擧ぐれば別表の如し。(別表神戸港輸移出入貨物噸量累年比較表参照)

以上の比較表に現はれたる計數は、本港に吞吐せらるる貨物の純量なるも、本港を経由して他港に運送し、他港より本港を仲介して輸出せる貨物噸量は其の數莫大なるものあり。就中隣港大阪の如きは、其の設備大型船の出入、荷役、其の他種々の關係より甚しく利便を缺くを以て、大阪仕向貨物の中本港に於て輸出入貨物の積卸を爲し、海路に由り運送するもの鮮しとせず。此等の貨物及び其の他の開港よりの運送貨物を合して、之を本港出入純噸量に加算せざれば、出入貨物の實噸量を知るを得べからざるも、大阪港を除く他港の計數は少量なるのみならず調査の便を缺けるが故に、大阪の分のみを掲出するに止め、本港に於ける貨物の實數量を看んとす。即ち明治三十三年以降同港に運送し、同港より本港に運送せる輸出入貨物噸量左表の如し。

年次	輸 出	輸 入	輸 出 入 計
明治三十三年	一四、二六七	八五、四六九	九九、七三六
同三十四年	二四、六三一	七九、四二一	一〇四、〇五二

年次	輸 出	輸 入	輸 出 入 計
同三十五年	三四、一五五	八八、〇三三	一二二、一八八
同三十六年	四〇、六八二	一七〇、九三〇	二一一、六一二
同三十七年	一〇二、二四七	一四五、二一四	二四七、四六一
同三十八年	一一五、八〇九	一〇一、九〇六	二一七、七一五
同三十九年	一〇八、七四四	一四四、〇三四	二五二、七七八
同四十年	一四二、八二〇	一四二、八一六	二八五、六三六
同四十一年	一一六、五四二	一三九、四三四	二五五、九七六
同四十二年	一三一、五九四	一二二、七八〇	二五四、三七四
同四十三年	一七〇、一七八	九七、二五四	二六七、四三二
同四十四年	一七七、五九四	一一六、四五〇	二九四、〇四四
大正元年	一八六、七三七	一五九、六四七	三四六、三八四
同二年	二二二、五五八	二二五、〇四一	四三七、五九九
同三年	一五七、二九三	一八五、四一一	三四二、七〇五
同四年	二〇五、三四六	一六五、三五二	三七〇、六九八
同五年	二八〇、七〇一	二八六、六五〇	五六七、三五一
同六年	二二〇、二一六	一八九、〇七一	四一九、二八七
同七年	二八九、六六四	二三一、五〇三	五二一、一六七
同八年	二三七、二一七	二六〇、六七八	四九七、八九五
同九年	一九七、五一四	二二三、八八一	四二一、三九五

神戸港大観

一〇一

同	同	六八、五八二	二二一、八五〇	二九〇、四三二
十	十	八三、九五五	六四、八五四	一四八、八〇九
年	年			

明治二十二年に於ける本港貨物噸量は、輸出五十七萬七千三百八十六噸輸入三十五萬七百六十七噸、合計九十二萬八千一百五十三噸にして、同二十九年に至る間は漸次増加し、輸入は輸出を超過しつゝ進展せり。同三十年以後四十四年に至る期間は、輸出に於ては増加の進率順當なりしも、輸入に於ては異常なる増加率を示せしが、大正元年に至り輸出噸量亦俄然激増を來し、大正六年遂に一百七十七萬七千三百餘噸に上騰せり。一方輸入噸量は依然輸出貨物に倍加の計數を持続しつゝ進みしが、大正三年世界戰亂の勃發に遭ひて一時減退せしも大正八年に至りて頓に再び激増を來し、輸出に三倍するの旺盛を示し、大正十一年に入りては四倍となり終に輸出入噸量の差益顯著となれり。(第一章第二節參照)

今明治二十二年以降の輸出入貨物噸量相互間の増加率を窺ふに左の如し。

年次	輸出	輸入
明治二十二年	一、〇	〇、六

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二	三	三	四	五	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇	一、〇
四、〇	三、八	一、一	二、三	二、三	一、七	二、一	二、一	一、〇	一、〇

詮する所本港は輸入港にして、輸入超過は本港の特長なり。既往五十餘年を以て將來を卜するも亦同様の判断を下すことを得べし。

之を全國に對比するに、明治二十二年に於ける全國輸出噸量は一百三十六萬四千九十八噸にして、輸入噸量は七十七萬一千九百九十八噸、輸出入總量は二百三十三萬六千九百九十六噸なり。同年に於ける本港との比を見るに、輸出に於て本港は其の四割二分強、輸入に於て四割六分弱、輸出人は其の四割三分強に當り、同二十九年に於ては輸出二割四分弱、輸入四割九分弱、輸出入三割四分弱、同四十年に至り輸出一割三分、輸入四割弱、輸出入二割四分強となり、次第に減少の傾あり。更に

大正以後の割合を較ぶれば、

年次	輸出			輸入		
	全 國	神 戸	全 國ニ對 スル神 戸ノ割 合	全 國	神 戸	全 國ニ對 スル神 戸ノ割 合
大正元年	六、八六二、四四〇	一、〇〇五、二九〇	〇、一四	二、三八〇、八〇二	〇、三七	三、二八三、三九〇
同 五年	八、二四四、四七五	一、七〇〇、三六	〇、二〇	一、九四一、九九二	〇、三二	三、六三三、一三〇
同 十年	四、七四四、五八七	七九七、八三三	〇、一七	三、〇三三、七七五	〇、三二	三、八三三、九九七
同十一年	四、四一八、八六六	九三六、七三六	〇、二一	三、七四七、八九七	〇、三六	四、六四四、六三三

となり。輸出入共に噸量の増加率常ならざるも、明治二十二年頃に比して遞減の傾あるは、畢竟明治三十二年以降頻に開港を増置し、之が爲め本港に於ける取扱貨物の一部を奪取せられたるに殘由せずんばあらず。遑莫近年復逐次増加の率加はるを見れば、其の間の消息研究するの値あるべし。今之を本港横濱及び大阪三港の全國に對する輸出入貨物噸量の割合に驗するに

年次	神 戸		横 濱		大 阪	
	噸	割 合	噸	割 合	噸	割 合
大 正 元 年	〇、二六	〇、二七				〇、〇七
同 五 年	〇、二五	〇、二六				〇、〇九
同 十 年	〇、二七	〇、二〇				〇、一〇

の如し。即ち知る噸量上より觀たる本港の地位は、二者を壓倒して優秀の地歩を占め、全國に冠絶することを。

第三款 輸出入貨物價額

本港開港初年に於ける輸出入貨物實數は維新騒亂の際にして世情外國貿易に疎く、今日徴すべき統計に乏し。是を以て今明治元年以降大正十一年に至る五十五箇年間の表示すれば別表の如し。(別表神戸港外國貿易價額累年表参照)

以上を概観するに、明治初年より同十年迄は累進の度極めて遅々たり。其の價額は輸出入を合して九百萬圓を出せず、只此の時代より輸入超過の傾向あるを留意すべきのみ。同十一年に至り輸出入共に増加著しく兩者を合して壹千貳百萬圓を超へ、同十九年に至る迄漸進し、同二十年を経て二十一年に入るや俄然上騰し、輸出壹千八百萬圓、輸入貳千四百萬圓を示し、其の總額四千二百萬圓臺となり、爾來増進の度急激にして、二十八年輸出入額壹億圓を超へ、三十三年には

同	同	〇・三五	〇・三九	〇・二四
十一年	十年	〇・三二	〇・四四	〇・二三

となり、價額に於ては横濱港を以て首位に置くべきが如きも、こは輸出の大宗たる生絲を抱合せることが爲めにして、各種の材料に徴して之を判断すれば、將來に於ける繁榮は益々我神戸港に聚ること疑を容るゝ餘地なきものゝ如し。且横濱港と本港とは其の系統自ら異なり、彼は輸出に於て、我は輸入に於て各其の特色を有するのみならず、本港は地の利に據りて支那、印度、南洋を控へ且歐米諸國との要衝に當れること、横濱大阪兩港の比にあらざるを以て、將來一層の發展を期すべきや論なしと謂ふべし。

第四款 金銀輸出入の概況

輸出入貿易は金銀の流入出と相關聯し、大體に於て金銀の流出多きは輸入超過を示し、其の流入多きは輸出の旺盛を表はすべし。固より其の間外資輸入、國外放資、在外商人等の送金、其他各種の原因により流入出あるを以て、金銀の流入出額を以て貿易額を正確に觀察することを得ざるは勿論の事なきとす。只

茲には金銀出入の状況により、貿易概要の一を窺ひ、以て兩者の關係を見んとするに過ぎず。

年次	神戸	全出	神戸	全入
明治七年	一、三〇二	一三、九九五	一、四	一、〇七一
同八年	三、一三五	一四、六六三	三四	二九八
同九年	一、七七一	一〇、六七五	一、八五五	八、二六七
同十年	一、三二一	九、四四一	三七九	二、一七三
同十一年	一、五一七	八、三二八	三四五	二、一八九
同十二年	一、六〇一	一二、七七八	六九〇	三、一三四
同十三年	一、七八五	一三、二二二	二、〇二六	三、六三八
同十四年	二、五五〇	七、四九〇	一、一四六	一、八五六
同十五年	一、九七九	四、四三〇	三、九八七	六、一六〇
同十六年	一、一三二	三、一五六	二、四六六	五、四五一
同十七年	一、八五六	五、〇〇五	三、〇二三	五、六一一
同十八年	一、二一八	四、二五六	五、八四五	七、五四六
同十九年	三、二〇二	九、六二六	七、八一六	九、一七一
同二十年	三、九九二	一一、〇三五	八、一四五	八、八七一
同二十一年	二、五八二	七、八三三	七、六〇九	八、七三二

に至り其の位置を轉倒して輸入超過となり、明治末期より大正に入り、時に輸出超過を示せりと雖も、大勢は依然輸入偏重にして、殊に大正六年以降輸出金銀取締令公布實施の結果、金銀貨幣及び地金銀の輸出激減し、今に至るも尙熄まざるの狀態なり。之を全國に對比するに、明治十二、三年頃迄は其の割合微弱なるも漸次増加し、明治二十年以降にありては其の輸入の如き全國輸入額の九割以上を占むるに及べり。又輸出にありては明治二十五、六年頃全國に對して三、四割なりしもの漸増し、明治末期より大正に入りて全國の過半數を占め、輸出入共に全國に冠絶するに至れり。

第五款 輸出入品の變遷

明治初年以降大正十一年に至る五十六ヶ年を通覽して、本港貿易品の變遷を見るに、明治初期に於ける輸出入品は、其の數量價額共に尠少にして其の品種の如きも、輸出に於ては製茶、蠶絲、銅塊錠、樟腦、木蠟等の如き原料品に屬するもの多く、輸入に在りては生金巾及シーチング綿毛織物の如き製品大部を占むるに過ぎざりしが、内地産業の發達に伴ひ、漸次品目に變動を來し、近年に至りては全く

一變し、昔日輸出に於ける原料品は各種の全製品と代り、輸入に於ける製品は、内地工業の勃興に従ひて原料品の需要を喚起せるが爲め、其の多數は原料品となるに至れり。

之を輸出品に就て細檢するに、明治初年其の重要品と認むべきは、茶、蠶絲、蠶卵、紙、木蠟、海産物等なりしも、其の數量尠く之を擧ぐるに足らず、次で銅の輸出解禁、米の輸出等となり、漸次品目に増加を來し、樟腦、煙草、扇、團扇を加へ、明治十年に至りては價額拾萬圓以上に達するもの、茶、米、銅、麥、樟腦、寒天、椎茸等七種を算し、之に木蠟、煙草、海産物、陶漆器等を加へて輸出品目漸く多し。明治十年以後に於ては以上の外、燐寸、絹綿織物、陶磁器、漆器、綿メリヤス、銅製品、扇等を増加し、我工業の勃興に隨伴して同製品の產出となり、殊に燐寸の如きは異常の進歩を見たり。明治二十年に至り更に其の量と品目とを増せること言ふまでもなく、價額五萬圓以上のもの二十五種に達せり。この頃より内地工業の發達漸く順調に向ひ、工業品の製産と同製品に輸出税の免除を與へて之に利便を供與せしかば、是等製品の輸出俄然活況を呈し、又花筵、洋傘、綿氈、玻璃器、紙製品等をも輸出するに至り、同二十六年に及びては重要輸出品中拾萬圓以上のもの二十七種を數へ、五萬圓

以上のもの五種以上に達す。此間本港重要貿易品たりし生絲は、漸く其跡を断ち、石炭も門司の開港と共に減少するに至れり。日清戦後各地に綿工業の發達するや、明治三十二年國定關稅率の實施によりて内地工業の促進となり、工産品の増加となり、販路の擴張となり、對支貿易の旺盛となり、綿絲の輸出稅撤廢となりて、俄然其の數量の増加を來し、次で綿織物、綿莫大小、各種の綿布類の輸出殷盛を加へ、明治三十六年更に新に紙卷煙草、刷子、珊瑚、浴布、生金布及シーチング、清酒、麥酒、薄荷腦、紙類、綿ブランケット、礦水、熟皮、鈕釦、玩具、木材、茶箱用板、燐寸軸木、時計等の輸出品を加へ、拾萬圓以上のもの七十種の多數に及べり。之を明治十年に於ける拾萬圓以上の輸出品僅に七種に過ぎざりしに比較し、其の品目價額共に十倍に達し、二十年に比しても猶三倍強に達せるを見る。一方明治初期以來本港重要輸出品たりし海産物は、錫を除きて漸次減少の傾向を有せり。明治三十八年日露戰役を終へ戰勝によりて國威伸張するや、海外との貿易更に一段の殷盛を來し、歐米諸國市場への擴張に伴ひて輸出の激增を來し、歐洲に對してはバルカン諸邦、伊土の紛争に因りて銅の輸出を増加し、セルロイド業の發達に隨ひて我樟腦の需要を増加し、米國に對しては陶器類の増加となり、更に大正初頭に

於ては歐米重要品として豆類、魚油、大豆油等を加へ、他方東洋諸國に對しては支那の不作動亂相次ぎたるに抱らず、新に帽子、精糖、船舶、靴足袋、羽二重等を輸出せり。大正二年に至りては輸出品目拾萬圓以上のもの百十種、百萬圓以上のもの實に二十九種に及べり。

大正三年歐洲大戰の勃發するや、東洋方面に於ける歐米品缺乏と、歐洲戰場への軍需品輸送との爲め輸出は未曾有の盛況を呈し、戰役以來輸出重要品中、新に澱粉、椰子油、亞鉛、小麥粉、護謨、タイヤ、鐵條竿、手袋、塗料、鹽酸加里、セルロイド、珐瑯鐵器、毛糸、電氣機其の他諸品を加へたり。大正七年に於て此等の輸出品は各五拾萬圓以上に達し、輸出品總數二百種以上に及び、壹百萬圓以上のもの九十種の多きを計ふ。

大正十一年は前年輸出不振の後を承けたるに拘らず、猶海産物、魚油、木臘、綿織絲、絹綿織物、メリヤス類、鈕釦、玩具、硝子製品、刷子、鐵製品等は輸出の増加を見たり。同年に於ける壹百萬圓以上の輸出品は四十九種、貳百萬圓以上のもの二十七種に達せり。之を統計によりて重要なもののみを擧ぐれば左表の如し。

神戸港重要輸出品價額表

品種	明治五年		同十五年		同二十五年		同三十五年		大正元年		同十年		同十一年	
	額	同	額	同	額	同	額	同	額	同	額	同	額	同
茶	二、八〇〇	同	二、九〇〇	同	三、〇〇〇	同	三、一〇〇	同	三、二〇〇	同	三、三〇〇	同	三、四〇〇	同
銅塊及錠	二、六〇〇	同	二、七〇〇	同	二、八〇〇	同	二、九〇〇	同	三、〇〇〇	同	三、一〇〇	同	三、二〇〇	同
樟腦	四、〇〇〇	同	四、一〇〇	同	四、二〇〇	同	四、三〇〇	同	四、四〇〇	同	四、五〇〇	同	四、六〇〇	同
綿織物	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
麥稈	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
燐寸	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
花金	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
生巾	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
綿メリヤ	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
肌メリヤ	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
刷子	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
陶磁器	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
護膜タイヤ	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
眼鏡	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
器具	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
玻璃器	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
米	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同
寒天	一、〇〇〇	同	一、一〇〇	同	一、二〇〇	同	一、三〇〇	同	一、四〇〇	同	一、五〇〇	同	一、六〇〇	同

品種	明治五年	同十五年	同二十五年	同三十五年	大正元年	同十年	同十一年
清酒	少	少	少	少	少	少	少
綿製浴巾	少	少	少	少	少	少	少
精糖	少	少	少	少	少	少	少
豆類	少	少	少	少	少	少	少
珠那鐵器	少	少	少	少	少	少	少
魚油	少	少	少	少	少	少	少

備考 一、本表中「少」とあるは價額千圓に満たざるものを示す。
二、大正元年中には朝鮮移出を包含す。

由是觀之本港輸出品は漸次原料品より全製品に進化し、次第に其の品目の増加に従ひて粗より精に入り、輸出品量目の大量産出と共に、其の販路愈々確實の度を加へ來れるを見るべし。更に前記の諸品が本港輸出總額に對し、幾何の割合を有するやを見るに左の如し。

品種	明治五年		同十五年		同二十五年		同三十五年		大正元年		同十年		同十一年	
	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合	輸出總額	對スル割合
茶	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三	〇・六二	〇・三三
銅塊及錠	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九	〇・一五	〇・〇九

豆類	精糖	綿製浴巾	清酒	寒天	米	玻璃器	玩具	護膜タイヤ	陶磁器	刷磁子	鈕釦	肌綿メリヤス	生金巾	花及	燐寸	麥稈	綿織	樟腦	
				〇〇一			〇〇〇		〇〇〇										〇〇二
〇〇〇			〇〇〇	〇〇三	〇一三				〇〇三			〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇				〇〇九
〇〇〇			〇〇〇	〇〇三	〇一七	〇〇一			〇〇四			〇〇〇	〇〇五	〇〇九	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇六
〇〇〇		〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇八	〇〇一	〇〇〇		〇〇二	〇〇一	〇〇〇	〇〇〇	〇〇一	〇〇九	〇〇一	〇〇四	〇〇二	〇〇〇	〇〇四
〇〇〇	〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇三	〇〇一	〇〇一		〇〇二	〇〇一	〇〇一	〇〇四	〇〇三	〇〇三	〇〇六	〇〇四	〇〇二	〇〇〇	〇〇二
〇〇一	〇〇二	〇〇〇	〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇一	〇〇二	〇〇二	〇〇一	〇〇一	〇〇三	〇〇八	〇〇〇	〇〇六	〇〇一	〇〇一	〇〇〇	〇〇一
〇〇一	〇〇二	〇〇〇	〇〇一	〇〇一	〇〇〇	〇〇一	〇〇一	〇〇二	〇〇二	〇〇一	〇〇二	〇〇四	〇〇六	〇〇五	〇〇二	〇〇一	〇〇一	〇〇〇	〇〇三

珠那鐵器	魚鯨油
〇〇〇	〇〇〇
〇〇〇	〇〇〇
〇〇〇	〇〇〇
〇〇一	〇〇一
〇〇〇	〇〇〇
〇〇〇	〇〇〇

前記重要輸出品に就きて輸出總額に對する割合を驗するに、明治五年頃には於ける茶は、輸出品中の重要なものにして全額の六割二分を占め、之に次ぐものを銅塊、錠の一割五分とし、此の兩者を合すれば七割七分に達し、當時に於ける輸出品の大宗たり。十年後即ち明治十五年に至りて、前者は三割八分後者は九分弱に減じたりと雖も、依然輸出品中の主要なる地位を保持し、此等に次ぐを米の一割三分、樟腦の九分とす。明治二十五年に至りては茶は激減して一割四分に遞下し、米の一割七分に之に代りて首位を占め、燐寸漸く擡頭して此等に肉薄したり。此の頃より次第に品目の割合に均衡的傾向を生じ、復從來の如く著しき差等を生せず。明治三十五年に入り紡績業發達の結果、綿織絲躍進して二割を示し、燐寸亦増率して一割となり、花蔴、米等之に次ぎ、遂次品目の増率せるを見る。大正元年綿織絲更に増加して二割二分を表はし、銅塊、錠の一割燐寸の六分之に從ふ。大正十年海運貿易共に不況となり、綿織絲織に首位を持続せりと雖も、其

の割合は遂に降下して一割一分に過ぎず、之に次ぐものを生金布及シーチングの八分とし、燐寸亦漸く六分を維持し、他は全額の一分乃至三分のみ。大正十一年には綿織絲、燐寸、生金巾及シーチング等を主要とし、綿メリヤス、肌衣、亦優勢となれり。斯の如く本港に於ける輸出品の割合は、昔日の如く偏重の傾向全く消散し、年を経るに従ひて均分せらるゝに至れるは、閑過すべからざる事なりとす。

轉じて輸入品を瞥見するに、本來本港の輸入偏重的傾向は、己に其の端を開港當時に發し、歐米諸國品の販路を京阪地方に求めんとしたるものにして、互市的の通商は本來開港の眞意にあらざしが如し。果然兵庫開港の事あるや、彼等は此の機に乗じ、當時我が市場に於て最も需要の多かりし金巾、綿毛織物、毛布、綿絲、並に繰綿を輸入し、其の額は總額の過半に及べり。右の外銅、酒類、藥種、砂糖等亦輸入す。當時は維新動亂に際したるを以て、頻に兵器彈藥の輸入を計り、其の額莫大に上れり。幾何もなくして維新の宏業成るや、兵器の輸入其の跡を潜め、明治五年に至りても輸入品の主要なるもの、綿毛織物、綿織絲、酒類、砂糖等なること、開港初頭と同じく、只綿毛織物中品種に多少の變化ありしのみ。此の時期に於ける輸入品目は三十六種に亘り、主として全製品大部分を占め、半製品之に次ぎ、

原料品の如きは極めて稀なり。蓋し當時未だ産業幼稚にして、原料によりて加工製造するの力なく、全製品の需要に汲々たりしの狀方に想見するに足れり。

明治十年に至り輸入品目漸く増加し、拾萬圓以上を越ゆるものモスリン、生金巾、砂糖、石油、紅花、綿天鷲絨、緋金巾等八種に及び、西南戰役によりて一時不振を來したりと雖も、政府租稅上の政策機宜に適し、民力の休養に銳意したるを以て、久しからずして貿易順調に復し、綿絲、石油等一段の増加を見たり。明治十五年本市に石油會社の設立を見るに及んで、石油は貿易の中樞となり、又一方本港と香港との直通汽船航路を開始するものあり。英印棉花の輸入頓に激増し、他方近畿地方に外國産綿絲を原料として綿工業を開始するや、生金巾の輸入を抑壓するの形勢となり、本港輸入品に對して内容的變化を起すに至れり。

明治二十年にては本港輸入品中價額拾萬圓以上に達したるものは、綿絲、白砂糖、石油、生金巾、モスリン、繰綿、毛織子、熟鐵類、鐵釘、レール、豆類、生皮、熟皮、油糟、赤砂糖、緋金巾、晒金布、絹綿織子、毛布、亞鉛等二十一種に上り、壹萬圓以上のものに至りては百餘種の多きに及べり。此の頃より明治二十六年頃に亘る期間には新に輸入重要品として、アニリン染料、苛性曹達、紡績機、格魯兒酸、剝爲亞斯、窓硝子、羊

毛セメント等を加へたり。此等を一覽して直ちに知るべきは、其の大部分が工業原料品又は工業用機械にして、以て此の間に於ける内地工業の勃興を物語ると共に漸次輸入製品を驅逐して之に代らんとするの氣運に到達せることなり。以上諸原料品の外、英綿絲の輸入は漸次印綿絲を壓迫し、モスリン亦内地友禪染色業の發達に伴ひて一時の衰退を回復し、又食料品中の豆類は朝鮮、支那より、米は印度、支那方面より逐年輸入の増加を見、明治二十六年に於ける拾萬圓以上の重要輸入品總計四十五種に達せり。

日清戰役後勃然として企業界の活氣を呈するや、本港貿易亦多大の影響を蒙りて輸入品の激増となり、繰綿機械類、羊毛、麻等最も著しく、洋紙、時計、乾藍、毛織絲、練乳新に重要輸入品となる。從來振はざりし麥粉は明治三十年以來、小麥は同三十六年以後、共に巨額の輸入を見、却て精糖及鐵類の一部は減少をなせり。明治三十六年に於ける十萬圓以上の輸入品は、品目百餘種に及び内百萬圓以上のものを舉示すれば左の如し。

繰綿、米、石油、麥粉、モスリン、小麥、器械類、大豆、乾藍、豆糟、砂糖、鐵條竿、精糖、更紗、生金巾、羊毛、生綿、鐵板。

明治三十七年日露戰役に際して、政府は各種の租税を課したる爲め、本港貿易上にも其餘波を受け、砂糖、石油、モスリン等一時輸入の減少を來し、更に同四十四年國定税率施行の結果、内地産業に保護を加へられたると各種工業の發達せることにより、輸入減少の傾向を來したるもの鮮からず、麥粉、小麥、豆、乾藍、羅紗、セルヂス、更紗、生金巾及シーチング、熟皮、レール、自轉車及附屬品、綿織絲等即ち是なり。但し如上の影響を受けざるのみならず、愈々増加を示せるものに、生護謨、バルブ、葉鐵、鐵類、機械、麻類、羊毛、繰綿、紙等あり。而して此間新に重要輸入品となりたるものは、貝殼、硝酸、曹達、硫酸、安母尼亞、磷礦石、鐵筒及管、バラフキン臘、人造藍、銑鐵、錫、ニツケル等にして何れも各五拾萬圓以上に及べり。

大正三年歐洲戰爭の起るや、其の始期に於ては歐米諸國よりの輸入減少を來すと共に、東洋方面よりの輸入増加を見たり。即ち減少の主なるものは、塩酸加里、毛織糸、磷礦石、アニリン染料、石油、葉鐵、ニツケル、銑鐵、バルブ等にして、増加の重なるものは、コブラ、生護謨、食鹽、羊毛、麻類、ソーダ灰、鐵板、レール、硝酸、曹達、砂糖、米等なり。戰役中新に重要輸入品となれるものにシエラツク、松脂、植物性揮發油、牛脂、阿仙藥、野蠶絲、發電機、ガンニー袋等あり。

大正十一年には食料品中の米、小麥、原料品中の染料、毛絲及全製品中の毛織物等輸入の増加を來し、反對に棉花は減少を示せり。同年に於ける輸入重要品中價額百萬圓以上のもの八十二種、内二百萬圓以上のもの五十三種の多きに達せり。就中五百萬圓以上に屬するものは、米、小麥、烏卵、砂糖、硫酸、安母尼亞、生護謨、綿、麻類、羊毛、木材、豆精、毛織絲、銑鐵、鐵條竿、鐵板、鐵線、鉛塊、バルブ、セルヂス、アルバカ、汽鐘及部分品、發電機及び電動機、紡績機等なり。

以上五十六年間を通觀するとき、本港に於ける輸入品目は、其の初期に於て原料粗製品に屬するもの極めて鮮く、大部分は製品にして、毛綿織物、食料品等に局限せられしが、次第に内地産業の勃興と發達とに伴ひ原料品の輸入増加を來して、逐年製品を驅逐し、近年に入りては原料品及機械類等を以て輸入品の大多數を占むるに至れり。これ一國文化の進展に隨へる當然の現象にして、本港亦此の例に洩れずと謂ふべし。左に重要輸入品を掲げて、既往現在の狀況を一目の下に示さんとする。

品種	明治五年	同十五年	同二十五年	同三十五年	大正元年	同十年	同十一年
米	1,000	100	100	7,000	11,000	11,000	26,875
小麥	100	100	100	78	1,600	7,500	11,337
粗糖	100	100	100	896	1,000	8,000	6,333
生護謨	100	100	100	17	1,350	10,500	7,700
織金巾及シヤチンガ	100	100	7,500	66,873	126,000	37,300	29,812
羊毛	100	100	800	1,700	797	9	4
モスリン	100	100	500	739	4,900	13,800	27,000
セルヂス	100	100	1,500	3,000	93	1	1
その他の毛織物	1,000	100	1,800	1,700	3,500	22,700	26,300
染緋金巾	1,000	100	1,800	1,700	996	1,200	1,400
麻類	1,000	100	1,800	1,700	11	1	1
豆類	1,000	100	1,800	1,700	2,600	5,900	5,700
其他の糖類	1,000	100	1,800	1,700	8,600	25,300	33,000
紙類	1,000	100	1,800	1,700	3,500	5,600	6,300
バルブ	1,000	100	1,800	1,700	2,400	3,700	4,300
アニン染料	1,000	100	1,800	1,700	2,400	3,700	4,300
曹達灰	1,000	100	1,800	1,700	89	1,300	10,000
硝酸曹達	1,000	100	1,800	1,700	755	1,300	2,200

神戸港大観

紅花	石油	石塊及錠	鐵塊及板	鐵條、竿及チ ーアング ル類	コ ー ア ラ	パラ フ ン 酸
二六	三五	四三	四三	一、〇五四	二七三	一六
五二	一、〇五四	一、三三三	一、八四	一、〇三三	三九三	一六
一四	五、四七七	一、八四	一、〇三三	一、八四	少	三五〇
一六五	一、八九	五、七九	七、六九	七、〇三	一〇八	一、八六
不詳	二、七五	二、七五	二、八九	二、六八	三、六八	一、九九
不詳	二、三三	二、三三	二、三三	二、三三	二、三三	一、五九

備考 本表中少とあるは假額千圓に満たざるものを示す。

更に開港初頭より大正十一年に至る本港輸入品の割合を見るに、其の初期に於ける品目の總額に對する割合は、一部分を除きて偏重の傾向少なし。之を明治五年に就て觀察するに、同年中輸入額の最も大なりしものは各種毛織物にして、此等全部を合するも其の割合三割五分を出でず、之に次ぐものを生金巾及びシーチングの二割とし、他の綿織物は七分七厘、綿織絲六分四厘、砂糖四分六厘にして、他は悉く三分以下なり。明治十五年に至りても綿織絲の一分九分強を筆頭とし、石油の一分六分強之に次ぎ、モスリン八分二厘、他の毛織物五分九厘、生金巾及びシーチング五分四厘にして、依然其の割合に偏重の度少なし。而も明治

二十五年に至りては、内地紡績業の勃興急激にして、神戸は其の中心に近接せる關係により、繰綿の輸入激増して同年に於ける輸入總額の約二割五分を占め、綿織絲の一分一分、砂糖の一分、毛織物の八分三厘、豆類の五分二厘等之に隨ふ。之を明治五年及び明治十五年に於ける割合に對比すれば、其の偏重の度漸く著しく、更に明治三十五年及び大正元年に至りては、繰綿各四割七分強、四割六分強となり、米の五分八厘を始めとして、其の他のもの悉く四分以下なり。最近に至る迄此の傾向は頗る顯著にして、繰綿偏重の状態を持續し、大正十年に於ては輸入總額の四割一分を占め、其の他の諸品は遂に降りて、鐵板の三分六厘、豆糟及び其の他油糟の三分二厘、羊毛一分六厘、羅紗セルヂスの一分五厘、鐵條竿チーアングル類の一分五厘に過ぎず。大正十一年には繰綿の輸入稍減少せりと雖も、尙全額の三割四分の地位を保持し、同品偏重の傾向は、本港輸入貿易品の特異なれり。之を輸出品に對比せんか、開港初期以來輸出は數種の品目に偏重したるに拘らず、年を経るに従ひて漸次均衡的傾向を帶び來れると、正に相反するの現象を呈せりと謂ふべし。

第六款 通商國に對する關係

本港と對外通商國との關係を叙するに當り、便宜上之を五期に分ち、開港より明治十八年迄を第一期とし、明治十九年より同二十六年迄を第二期、明治二十七年以降同三十六年迄を第三期、明治三十七年以降大正二年迄を第四期、大正三年以降同十一年迄を第五期とし、以て各期間に於ける輸出入の狀態を究めんとす。

第一期 本期は兵庫開港に始まり、維新の宏業確立して、國內漸く統一せられたる期間にして、諸外國亦互に干戈に相見えて寧日なかりき。此時に際し、本港に於ける外國貿易の狀態は、明治五年に至る迄は之を徵すべき統計なく、從つて其通商國との關係も之を知るの便を有せざること既述の如しと雖も、歐米諸國との交通及彼我貿易の關係は次第に密接を加へ、就中輸出に於て米國との交渉深かりしは實際に徴して明かなりとす。英國亦蘇士運河開通の結果、大に交通の利便を得るに至りて主要なる通商國たりしこと争ふべからず。如上二國の外獨、佛、清諸國との貿易關係亦侮るべからざりしが如し。明治六年に於ける本港と通商諸國との關係は左表によりて知るを得べし。

國	別	重要輸出品	輸出額	重要輸入品	輸入額
清	國	銅塊及錠、昆布、乾魚、生絲	五、一〇 <small>千円</small>	生命巾、毛織交織、砂糖、木綿絲、其他織物	二、五九五 <small>千円</small>
英	吉	米、木蠟、銅塊及錠、渣滓、葉	八六六	毛織交織、木綿絲、ブランケ	一、九二五
北	合	茶、陶磁器	七八四	砂糖、硝子器、時計	一三四
獨	衆	銅塊及錠、茶	二四	毛織交織、木綿絲、其他諸織物	七九六
佛	逸	木蠟、渣滓	三三	毛織交織、其他諸織物	三六五

即ち明治六年輸出にありては英國を首とし、米、清、佛、獨の順位、輸入にありては清國を第一とし、英、獨、佛、米順次に隨ふ。當時に於ける輸出入共に最も密接なる關係を有せしは清國にして、英、米、獨、佛を凌駕し之に次ぐものを英國とす。

明治六年以後内外狀勢の變化に伴ひ、通商國との關係も漸次推移し、輸出に在りては曩に第二位たりし米國群を抜きて第一位となり、明治十年の頃には其の額百六十萬圓に及ぶ。之より本港の對米貿易は、從來輸出品に於て茶のみならず、漸次樟腦、絹屑物等に及び、對米貿易關係愈密接となるに至れり。米國に次で主要なりしは清國なりしが、明治十年前後同國凶歉の爲め、本邦より米の輸出盛にして、輸出額は米國に薄らんとするの狀あり。輸入に在りては依然英國

首位を占めせしと雖も、本期末に至りて、清國、印度方面より食料品、原料品等の輸入増加し次第に優勢となれるを見る。

第二期 明治十九年より同二十六年に至る期間は、我産業勃興の時代にして、本港及附近に構寸、紡績業の諸工業の興起するに伴ひ其製品の輸出、原料品の輸入共に増加せるによりて、對通商國との關係に變動を及ぼしたるは明かなり、左に明治二十年及同二十六年の兩年に於ける通商國輸出入關係を掲出すべし。

國別	明治二十年		明治二十六年	
	輸出入額	輸出入額	輸出入額	輸出入額
清國 (香港を含む)	四、三六五	一、二、六七六	一、九一三	五、九六四
英領吉	一、三六六	一、九一三	一、九一三	五、九六四
北米合衆國	三、九七〇	三、九七〇	三、九七〇	三、九七〇
佛蘭西	六三二	六三二	六三二	六三二
英領印度	五三四	五三四	五三四	五三四
英領亞米利加	一八八	一八八	一八八	一八八
露西亞	四八〇	四八〇	四八〇	四八〇
露亞米利加	一五九	一五九	一五九	一五九

輸 入

用別	明治二十年		明治二十六年	
	輸出入額	輸出入額	輸出入額	輸出入額
清國 (香港を含む)	一、九九七	一、四一〇	一、四一〇	一、四一〇
英領吉	五、三三八	五、三三八	五、三三八	五、三三八
北米合衆國	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇	一、〇五〇
佛蘭西	八九五	八九五	八九五	八九五
英領印度	六四八	六四八	六四八	六四八
英領亞米利加	三、三二八	三、三二八	三、三二八	三、三二八
露西亞	少	少	少	少
露亞米利加	少	少	少	少

先づ輸出に就て之を観るに、各國中著しき進歩をなしたるは清國にして、前期の終に於て第二位なりしもの、本期に入り米國を凌駕して首位に上り、二十六年の貿易額は二十年に比して三倍するの盛況に達せり。尤も茲に謂ふ清國とは香港を含むものにして、輸出額は寧ろ香港を以て優れりとす。清國に次で著しきは北米合衆國にして、從來同國に對する茶、樟腦、屑糸の外、新に花蔴、綿氈、陶磁器を加へ、其の増加率五割とす、而して英國は第三位に下り、獨、佛之に隨ふ。本期末

に至り英領印度への輸出も相當目覺しく、米、銅の外燐寸を交へて、其の額九十三萬圓餘に達す。英領亞米利加は本期に至り、初めて輸出國として現はれ、濠太刺利も引續き米の輸出によりて其の増加を見たり。前述の外韓國、露西亞、白耳義、布哇、埃太利、匈牙利、和蘭等、新に輸出國として加はりたれど、其の額僅少にして、韓露を除きては十萬圓に達せず。

轉じて輸入通商國の狀況を察するに、本期初頭に於ける順位は英、印、清、米にして、就中英吉利の最も優勢なるは、主として内地綿工業の發達及燐寸工業の旺盛となれる結果、紡績機、格魯兒散刺篤亞斯の輸入を見たるが爲めにして、清國印度兩國よりの輸入増加は、練綿、綿織絲、豆類、豆糟等に基因す。本期末即ち明治二十六年に及んでは依然英吉利を首位とし、清國は印度を抜きて第二位を占め、印度、北米、佛、獨の順位となれり。本期中注目し、値すべきは練綿の輸入激増にして其の末期に於ては米、印、清よりの輸入年額合せて七百五十萬圓以上に達す。露西亞よりは一時石油の大量輸入ありしが、幾何もなく衰退に至れり。尙前表以外に於て、白耳義より玻璃の輸入あり、逐年其の額増加す。韓國、暹羅、瑞典、比律賓、伊太利、布哇、埃太利、匈牙利等よりの輸入は其の額謂ふに足るものなし。

第三期 本期は日清戰役の勃發より初まり、戰勝の結果國力の發展産業の發達著しく、我商權の伸張と需給激増とによりて、本港と通商各國との間に異常なる變化を生じ、對外貿易は顯著なる増進を見たり。本港と通商國との關係を示せば左の如し。

國別	輸 出		
	明治七年	三十一年	三十六年
清國	四、七三九	一九、八四四	三三、七〇四
北米合衆國	七、〇六二	九、七四六	一五、六四〇
香港	九、二一八	一八、七五八	一四、九三三
英吉利	二、三三六	三、五〇八	五、六〇七
英領印度	一、三六四	一、九九五	三、一〇三
獨逸	三、五八	五、五二	二、九三七
濠太刺利	九、六	一、四六	二、一九五
海峽殖民地	—	—	三、〇二一
佛蘭西	五、四	五、二	一、七〇九
布哇	一、〇一	二、五二	一、五三
英領亞米利加	六、一	四、九	一、〇六六
韓國	九、七	一、九	七、六

同 三 十 六 年 重 要 輸 出 品	
清國	綿織絲、燐寸、熟銅、紙卷烟草、天笠布、酒類、生金巾
北米合衆國	茶、花蕊、樟腦、陶磁器、麥稈真田、刷子
香港	熟銅、燐寸、綿織絲、鰵、麥稈真田、綿フランネル
英吉利	麥稈真田、熟銅、米、樟腦、地氈
英領印度	燐寸、樟腦、綿、リヤス肌衣、熟銅
獨逸	樟腦、熟銅、麥稈真田、米、木蠟
濠太刺利	米、肥料
海峽殖民地	燐寸、紙卷烟草、樟腦、陶磁器、浴巾、綿メリヤス肌衣
佛蘭西	麥稈真田、樟腦、生皮、米、菓子、團扇
布哇	米、清酒
英領亞米利加	茶、米、花蕊、陶磁器
韓國	米、粟、繩索、及、蓬、小麥

比律賓諸島	一〇	三	六三	綿織絲、鎮水、木蠟、玉葱、燐寸
伊太利	五八	七	六五	珊瑚、扇子及團扇
埃太利匈牙利	三三	五	五五	米、熟銅
露領亞細亞	三三	六六	一六	蜜柑、苧麻繩索

輸 入

國 別	明治二十七年	同三十一年	同三十六年	同三十六年重要輸入品
英領印度	七、八三三	三〇、八七〇	四六、五二四	綿綿、米、小麥、乾藍、苧麻
清國	八、九三〇	一五、五九四	二五、二三四	綿綿、豆類、油糟、小麥、棉絲、米、生綿、苧麻、生卵、桑子
北米合衆國	五、六三三	三三、八五〇	三三、九八四	綿綿、麥粉、石油、機械類、煙草葉、板紙、パラフン、臘、小麥
英吉利	一八、〇三三	三三、四三三	一八、七九八	更紗、生金巾、羅紗、諸機械、鐵塊、綿織子、鐵板、電鍍板、汽船、紡績機
獨逸	三、三三四	一〇、〇三四	一一、一八九	人造乾藍、アニリン染料、羊毛、鐵條竿、精糖、モスリン、毛絲、亞鉛板、バルブ、鐵釘
佛領印度	四、〇六六	一六、〇三三	九、九〇二	米、綿綿、生綿
佛領西印度	二、〇八〇	三、三九四	三、一八六	モスリン、鹽酸加里
白耳義	三、九	一、七四三	二、七二	鐵條竿、玻璃、鐵板、亞鉛板
暹羅	五七九	三、五三七	二、四五三	米
蘭領印度	一	八六	二、三三三	砂糖、乾藍
埃太利匈牙利	一	三六	一、四〇〇	綿綿
埃太利	一	二八	一、八四	精糖、紙類

韓 國	三〇八	一、〇六四	一、四七	米、豆類
露領亞細亞	九八	一、〇四五	一、一〇	モスリン、時計
海峽殖民地	三七八	二〇〇	七〇、一	石油
比律賓諸島	六三九	七四	七四	錫塊及錠、革類
香港	四、三一一	五、〇〇〇	四一	砂糖、苧麻
露太刺利	一七四	四七	二五〇	精糖、粗糖、苧麻、繩索
				羊毛、苧麻、鉛塊

之を輸出に就て觀察するに、本期に入りて清國、香港に對する進展著しく、從來我對清輸出關係は香港を主としたるに、明治三十一年に入りて清國は香港を凌ぎ、同三十六年に至り香港に倍加するの進境を示し、同年中輸出額に於て他の追従を許さざるの域に達せり。其主因は我戰勝によりて彼の開港場の開放となり、從て我商權を伸張し、内地汽船會社の對清航路擴張したるに基く。之に次ぐものを米國及英國とし、兩國共に本期末に於て初期に二倍するの増進をなせり。印度も亦前期以來増進を持続し、其加率顯著なれるは、全く我黃燐燐寸の販路擴張せる外、新に樟腦、綿メリヤス肌衣等の輸出加はりたるに由る。以上諸國の外

海峽殖民地及布哇は、新に重要輸出國として現はれ、本期末に於て共に百五十萬圓以上の額を有せり。前者は我海運の發達と商品の需要増加によるものにして、後者は邦人の同國に於ける發展に基因す。同三十六年に於ける輸出額百萬圓以上に達せるは、前掲の外獨逸、濠太刺利、佛蘭西、英領亞米利加等の諸國とす。

輸入國方面を瞥見するに、本期の初めに於ては英吉利の一千八百萬圓を首位とし、清國、英領印度、北米合衆國、香港、佛領印度の順位なりしが、期末三十六年に至りて英領印度の四千六百五十六萬圓を最高とし、遙かに降りて清國の二千五百二十三萬圓を第二位とし、北米合衆國、英吉利、獨逸、佛領印度之に次ぐ。本期中頃より印度が一躍して首位を占むるに至りたるは、一に印度綿輸入激増に因る外、蘭貢米の輸入逐年増加したるに基くものにして、我日本郵船株式會社の孟買航路開始も亦之を刺激したるや勿論なり。清國よりの輸入増加は原料品、食料品に因るものにして、北米合衆國の激増は、米國綿の増量と、麥粉、小麥及軌條、機械類等の輸入に原因す。英吉利よりも亦盛に綿毛織物、紡績機械を輸入し、獨逸よりは主として染料、佛蘭西よりは原料品の輸入を見たり。香港に至りては往時の盛況復見るべくもあらず、蓋し我海運發達の結果、從來同地を經過して、諸國に集

散せし對外貿易品も直接需給國間に交易せらるゝに至れるが爲めなり。本期末に於ける輸入額壹百萬圓以上の國は十五ヶ國にして、内壹千萬圓以上に達するもの五國に及ぶ。

第四期 本期は日露戰役の開始より世界戰亂前年に亘る十箇年間に於て、戰勝の餘威により國光中外に宣揚したりと雖も、之を本港の對外貿易上より看るときは、大勢前期に比して著しき進境を認めず。従つて通商國との關係も其變動鮮なく、本港對外貿易上特筆すべき點なし。本期に於ける通商國との關係を表示すれば次の如し。

輸 出

國 別	明治三十七年	同四十二年	大正二年	重要輸出品
支那	三、四六	三、八三	五、五八	綿織絲、生金巾及シートンケ、燻寸、銅、糖、石油、洋傘、昆布
北米合衆國	一六、二五	一六、三六	三、七三	絹子、花冠、眞田、茶、米、陶磁器、銅塊及錠
香港	一四、六二	三、四八	一、九三	綿織絲、燻寸、銅、錫、綿メリヤス肌衣、綿フランネル
英領印度	三、七六	七、二八	一、三九	綿メリヤス肌衣、燻寸、銅塊及錠、樟腦、紡績絹織絲
英吉利	五、四二	一、二七	一、三九	銅塊及錠、眞田、眞田、魚鯨油、菜子油
獨逸	一、九三	四、三二	八、二四	魚鯨油、銅塊及錠、眞田、薄荷腦、眞田、樟腦

國別	明治三十七年	同四十二年	大正二年	重要輸入品
關東州	—	二,〇七〇	五,四五六	綿織絲、生金巾及シーチング、白木綿
佛蘭西	二,四七五	三,一五五	四,三四四	真田、銅塊及錠、鈕釦、木屐、陶磁器
海峽殖民地	一,九三三	二,八六六	三,九四七	燐寸、錫、綿製浴巾、陶磁器、貝柱、綿メリヤス肌衣、硝子瓶
濠洲刺利	二,六三二	二,五九四	三,七九七	羽二重、綿製浴巾、魚鯨油、綿織
布哇	一,五〇六	二,〇六七	三,七九二	玄米、清酒、煎餅
比律賓諸島	七五六	二,〇〇六	三,一九八	綿織絲、綿メリヤス肌着、綿縮、番語、玉葱、綿縮肌着
蘭領印度	四七三	一,八三三	三,二五五	燐寸、綿メリヤス肌着、寒天、洋傘、綿製浴巾、綿フランネル
白耳義	一,五九	一,〇七	二,一五〇	亞鉛鐵、魚鯨油、真田、層棉及層綿絲
英領亞米利加	一,二五一	一,三三八	一,九三三	玄米、清酒、豆類、茶
伊太利	五五	八八	一,三三	珊瑚、真田、硝子及陶扇、銅塊及錠
奧太利匈牙利	四〇七	六六	七〇	銅塊及錠、菜子油、木屐
暹羅	二	一四	七〇	汽船、綿製浴巾、綿メリヤス肌着

國別	明治三十七年	同四十二年	大正二年	重要輸入品
英領印度	四,〇〇七	四,五八〇	一〇,八四七	綿織、米、鉄鐵、麻類、菜子精、豆類
北米合衆國	二六,八八一	二四,五八	六,八三三	綿織、小麥、鐵筒及管、發電機及電動機、小麥粉、鐵油
英吉利	二七,三七	四〇,六二	五八,〇五六	硫酸アンモニア、硝子、紡績機、汽船、鉄鐵、綿織子、鐵條竿類、鐵板、鐵鐵
獨逸	二,三五〇	二〇,五〇五	三〇,八五六	鐵條竿類、手織絲、アニリン染料、人造藍、パルプ、鐵板、鐵電線

國別	明治三十七年	同四十二年	大正二年	重要輸入品
支那	三〇,〇四	一八,八〇九	二四,三〇三	綿織、油精、豆類、菜子、鳥卵
佛領印度	一〇,五三	二,五九九	三,一〇五	米、綿織、實綿
濠洲刺利	八四	一,〇〇二	七,〇四八	羊毛、鉛塊、小麥
關東州	—	四,四八	六,八三九	豆類、豆類、粟
暹羅	四,九八五	二,〇三三	四,九八五	米、チーク
蘭領印度	二,四六四	四,〇五九	四,八三三	砂糖、石油、實綿、貝殼
白耳義	二,四一九	二,七八三	四,三〇七	硝子製器、鐵條竿類
海峽殖民地	一,八四二	二,〇九六	三,三九九	錫塊、生ゴム、綿織、貝殼
佛蘭西	一,三五四	三,三六一	二,九二二	毛絲、鹽酸加里、赤燐
瑞典諾威	四〇四	一,三三五	二,八三三	製紙用パルプ、鉄鐵、鐵インゴット及ブルーム、紙類
埃及	一,八九二	二,四三三	二,四四五	綿織
智利	—	四四九	一,四二	硝酸曹達
比律賓諸島	三二八	一八六	一,三五四	麻
奧太利匈牙利	五〇二	一,二九五	一,一八一	毛織絲、紙類
瑞典	八三四	一,二八	八二	人造藍、アニリン染料

本期に於て支那内地に綿工業、燐寸業の發展したる結果、我輸出貿易に影響する所尠からざるのみならず、明治三十七年來風水害、凶作頻に到り、加ふるに革命戦争、日貨排斥等の勃發したる爲め、我對支貿易をして深甚の打撃を蒙らしめた